

神戸市東灘区

住吉宮町遺跡

第33次調査

－公社長期分譲住宅「住吉宮の前(3)住宅」建替事業に伴う発掘調査報告書－

2002年3月

兵庫県教育委員会

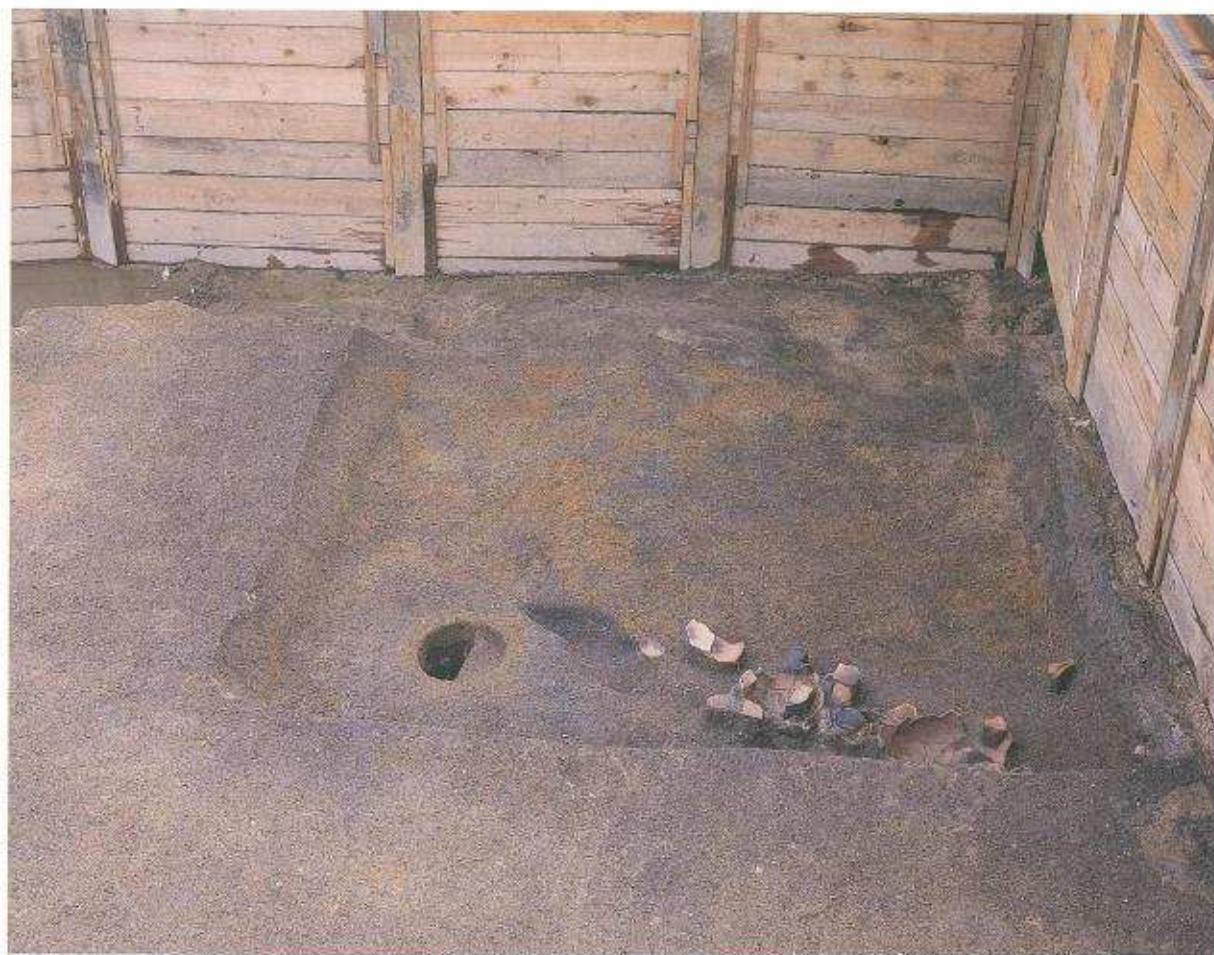
神戸市東灘区

すみ よし みや まち
住吉宮町遺跡
第33次調査

－公社長期分譲住宅「住吉宮の前(3)住宅」建替事業に伴う発掘調査報告書－

2002年3月

兵庫県教育委員会



SH 309 (北から)



SH 309出土土器



84

管玉状土製品が混入した土器



同上拡大（部分、口頸部）



同上拡大（部分、体部）



同上底部の管玉状土製品



同左 X 線写真

例　　言

1. 本書は、神戸市東灘区住吉宮町6丁目88番地に所在する住吉宮町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、住吉宮町遺跡の第33次調査にあたる。調査時および『平成10年度　年報』（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1999）では第32次調査と報告していたが、その後の神戸市教育委員会による既往の調査の整理の結果、第33次調査であることが判明し変更した。
3. 発掘調査は公社長期分譲住宅「住吉宮の前(3)住宅」建替事業に先立つもので、兵庫県住宅供給公社の委託を受け、兵庫県教育委員会が平成5年度と平成10年度に確認調査を、平成10年度に全面調査を実施した。平成5年度の確認調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　水口富夫が、平成10年度の確認調査は同多賀茂治が、全面調査は同鐵　英記・服部　寛が担当した。
なお、全面調査は、株式会社フジタと請負契約を結び実施した。
また、確認調査の遺跡調査番号は930165・980034、全面調査の遺跡調査番号は980109である。
4. 遺構の実測については調査員と調査補助員が、写真については調査員が行った。なお、空中写真撮影については、株式会社サンヨーに委託した。
5. 調査にあたって、通商産業省工業技術院地質調査所大阪地域地質センター（現産業技術総合研究所活断層研究センター）の寒川　旭氏には現地にて地震痕の調査方法について御指導いただいた。また、寒川氏からは、調査での所見をもとに玉稿をいただいた。
6. 整理作業は、平成12年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
7. 遺物の接合・実測・トレス・復元については整理普及班で行い、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトと株式会社イーストマンに委託した。
8. 本書に用いた方位・座標は、国土座標Vを基準にし、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。また、方位は座標北を示す。
9. 本書に使用した遺跡分布図などの地図については、国土地理院発行2万5千分の1地形図「神戸南部」「西宮」の図幅を使用した。
10. 本書の編集は増田麻子の補助を得て服部が行った。
11. 本報告にかかる遺物は兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
12. 最後に、発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。記して感謝の意を表するものである。（敬称略、順不同）
加古千恵子・篠宮　正・菅本宏明・中村大介・中村　弘・平田朋子・深江英憲・山田清朝

凡　　例

1. 遺構については、竪穴住居跡をS H、掘立柱建物跡をS B、土坑をS K、溝をS D、柱をPと略し各遺構番号の頭に付いている。
2. 遺物については通し番号を付けており、本文・図版・挿図ともに統一している。また、土器以外の遺物の呼称については、金属器F・石器Sのアルファベットを頭文字として付している。なお、土器の種別を表現するために、須恵器の断面を黒塗り、弥生土器・土師器その他を白抜きとした。

本文目次

| | |
|-------------------------|----|
| 第1章 住吉宮町遺跡 | |
| 第1節 地理的環境 | 1 |
| 第2節 歴史的環境 | 3 |
| 第3節 住吉宮町遺跡と周辺の遺跡 | 8 |
| 第2章 調査の経緯 | |
| 第1節 調査に至る経緯 | 13 |
| 第2節 確認調査 | 13 |
| 第3節 全面調査 | 14 |
| 第4節 整理作業 | 15 |
| 第3章 調査の成果 | |
| 第1節 基本層序 | 16 |
| 第2節 第1面の調査 | 19 |
| 第3節 第2面の調査 | 27 |
| 第4節 第3面の調査 | 33 |
| 第4章 自然科学分析 | |
| 住吉宮町遺跡第33次調査で検出された地震の痕跡 | 52 |
| 第5章 まとめ | |
| 第1節 住吉宮町遺跡第33次調査のまとめ | 56 |
| 第2節 住吉川右岸の遺跡分布の様相 | 56 |

挿図目次

| | | | |
|----------------------|----|-------------------------------------|----|
| 第1図 遺跡の位置図 | 0 | 第36図 土器溜まりB検出状況 | 35 |
| 第2図 遺跡周辺の地形分類図 | 2 | 第37図 土器溜まりB出土土器 | 36 |
| 第3図 周辺の遺跡 | 4 | 第38図 土器溜まりC検出状況 | 37 |
| 第4図 周辺の遺跡(明治18年測量図) | 5 | 第39図 土器溜まりC出土土器 | 37 |
| 第5図 周辺の遺跡(地形分類図と重ね図) | 6 | 第40図 S H301 | 38 |
| 第6図 住吉宮町遺跡調査地点(西半) | 10 | 第41図 S H301の調査 | 38 |
| 第7図 住吉宮町遺跡調査地点(東半) | 11 | 第42図 S H301出土土器 | 39 |
| 第8図 調査区配置図 | 13 | 第43図 S H301出土石器 | 39 |
| 第9図 整理作業状況 | 15 | 第44図 S H302 | 40 |
| 第10図 基本層序 | 17 | 第45図 S H303 | 41 |
| 第11図 第1面平面図 | 18 | 第46図 S H303出土土器 | 41 |
| 第12図 第1面包含層出土土器 | 19 | 第47図 S H304 | 42 |
| 第13図 第1面の調査 | 19 | 第48図 S H305 | 43 |
| 第14図 S B101 | 20 | 第49図 S H306・307の調査 | 44 |
| 第15図 S B102 | 21 | 第50図 S H306 | 45 |
| 第16図 S B102P 2 | 22 | 第51図 S H307 | 46 |
| 第17図 S B102P 3 | 22 | 第52図 S H308 | 47 |
| 第18図 S B102柱穴出土鉄器 | 22 | 第53図 S H309 | 48 |
| 第19図 S K101出土土器 | 22 | 第54図 S H309土器出土状況 | 49 |
| 第20図 S K102 | 23 | 第55図 S H309出土土器 | 50 |
| 第21図 S K102出土土器 | 23 | 第56図 S K301出土土器 | 51 |
| 第22図 S K102出土鉄器 | 23 | 第57図 位置図 | 52 |
| 第23図 第1面柱穴出土土器 | 24 | 第58図 砂脈の平面図 | 52 |
| 第24図 第2面平面図 | 26 | 第59図 砂脈の断面図 | 52 |
| 第25図 第2面の調査 | 27 | 第60図 地滑り跡の平面形態 | 53 |
| 第26図 A地区第2面包含層出土土器 | 28 | 第61図 地滑り跡の断面形態 | 53 |
| 第27図 B地区第2面包含層出土土器 | 29 | 第62図 地滑り跡の断面図 | 53 |
| 第28図 植輪の表面調整(拓本) | 30 | 第63図 井戸枠の変形 | 53 |
| 第29図 地滑り痕断面 | 31 | 第64図 大阪平野周辺の活断層と伏見地震 の痕跡跡を検出した遺跡 | 54 |
| 第30図 寒川先生による現地指導 | 31 | 第65図 住吉宮町・郡家遺跡の既往の調査 | 57 |
| 第31図 第3面平面図 | 32 | 第66図 住吉川右岸の遺跡の様相(I期) | 58 |
| 第32図 A地区第3面包含層出土土器 | 33 | 第67図 住吉川右岸の遺跡の様相(II期) | 59 |
| 第33図 B地区第3面包含層出土土器 | 34 | 第68図 住吉川右岸の遺跡の様相(III期) | 60 |
| 第34図 土器溜まりA検出状況 | 35 | 第69図 住吉川右岸の遺跡の様相(IV期) | 61 |
| 第35図 土器溜まりA出土土器 | 35 | | |

表 目 次

| | | | |
|--------------------------|----|--------------------------|----|
| 第1表 住吉宮町遺跡調査一覧表(1) | 9 | 第4表 郡家遺跡調査一覧表(2) | 63 |
| 第2表 住吉宮町遺跡調査一覧表(2) | 12 | 第5表 住吉宮町遺跡土器観察表(1) | 64 |
| 第3表 郡家遺跡調査一覧表(1) | 62 | 第6表 住吉宮町遺跡土器観察表(2) | 66 |

卷頭図版目次

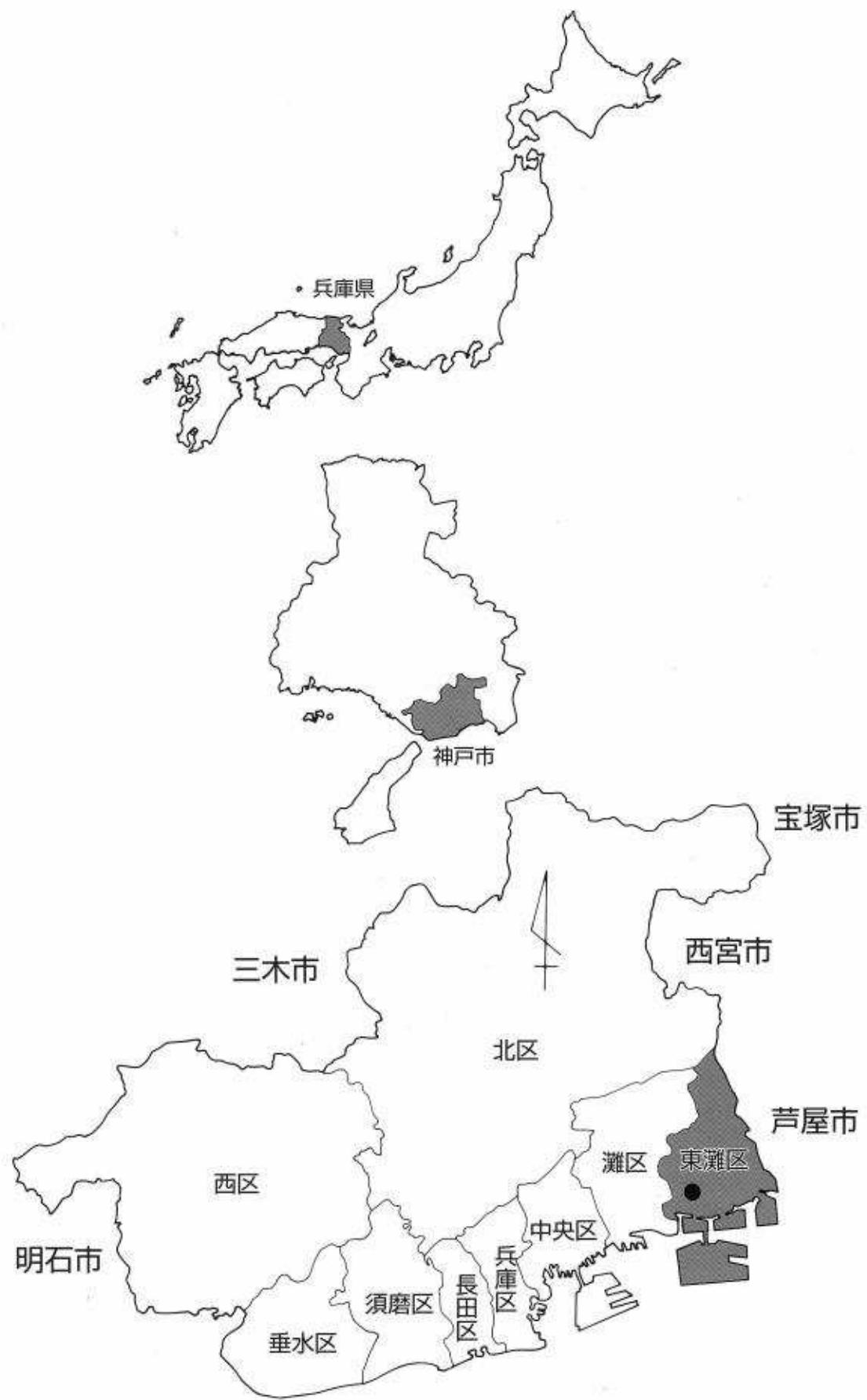
| | |
|------------------|--|
| 卷頭図版1 S H309 | |
| 上：S H309（北から） | |
| 下：S H309出土土器 | |
| 卷頭図版2 S H309出土土器 | |
| 上：管玉状土製品が混入した土器 | |

中左：同上拡大（部分、口頸部）
中右：同上拡大（部分、体部）
下左：同上底部の管玉状土製品
下右：同左X線写真

写真図版目次

| | |
|-----------------------|--|
| 写真図版1 住吉宮町遺跡 | |
| 上：調査地遠景（北上空から） | |
| 下：調査地遠景（北上空から） | |
| 写真図版2 第1面・A地区 | |
| 上：全景（西から） | |
| 下：S B101（東から） | |
| 写真図版3 第1面・B地区 | |
| 上：全景（東から） | |
| 下：全景（東半）（西から） | |
| 写真図版4 第1面・B地区 | |
| 上：S B102（西から） | |
| 中：S K102（西から） | |
| 下：S K102出土土器出土状況（東から） | |
| 写真図版5 第2面 | |
| 上：B地区地滑り痕（西から） | |
| 中：B地区地滑り痕（東から） | |
| 下：B地区地滑り痕断面（南から） | |
| 写真図版6 第2面 | |
| 上：B地区地滑り痕検出（西から） | |
| 中：B地区同断面（西から） | |
| 下左：A地区地滑り痕断面（東から） | |
| 下右：B地区砂脈断面（東から） | |
| 写真図版7 第3面・A地区 | |
| 上：全景（東から） | |
| 下：全景（東半）（西から） | |
| 写真図版8 第3面・A地区 | |
| 上：S H301（北西から） | |
| 中：S H302（北西から） | |
| 下：S K301出土土器出土状況（西から） | |
| 写真図版9 第3面・B地区 | |
| 調査区全景（西上空から） | |
| 写真図版10 第3面・B地区 | |
| 上：全景（東から） | |
| 下：全景（東半）（東から） | |
| 写真図版11 第3面・B地区 | |
| 上：S H303（南から） | |
| 中：S H304・305（西から） | |
| 下：S H306・307検出（南から） | |
| 写真図版12 第3面・B地区 | |
| 上：S H307（北から） | |
| 上中：S H308（東から） | |

| | |
|----------------------------|--|
| 下中：S H309（北から） | |
| 下：S H309出土土器出土状況（南から） | |
| 写真図版13 第1面出土遺物 | |
| 包含層出土土器（1・2） | |
| 土坑出土土器（3～6） | |
| 柱穴出土土器（1）（7～9） | |
| 写真図版14 第1面出土遺物 | |
| 柱穴出土土器（2）（10～15） | |
| 写真図版15 第2面出土遺物 | |
| A地区包含層出土土器（1）（17～21・23～26） | |
| 写真図版16 第2面出土遺物 | |
| A地区包含層出土土器（2）（27～38） | |
| 写真図版17 第2面出土遺物 | |
| A地区包含層出土土器（3）（16） | |
| B地区包含層出土土器（39～45） | |
| 写真図版18 第2面出土遺物 | |
| B地区出土埴輪（46～49） | |
| 写真図版19 第3面出土遺物 | |
| A地区包含層出土土器（50～53） | |
| B地区包含層出土土器（1）（55～57・59） | |
| 写真図版20 第3面出土遺物 | |
| B地区包含層出土土器（2）（54・58・60～62） | |
| 土器溜りA出土土器（1）（63・65・66・68） | |
| 写真図版21 第3面出土遺物 | |
| 土器溜りA出土土器（2）（64・67） | |
| 土器溜りB出土土器（1）（69～73） | |
| 土器溜りC出土土器（1）（76） | |
| 写真図版22 第3面出土遺物 | |
| 土器溜りB出土土器（2）（74） | |
| 土器溜りC出土土器（2）（75・77） | |
| S H301出土土器（78・79） | |
| S H303出土土器（80） | |
| 写真図版23 第3面出土遺物 | |
| S H309出土土器（一括） | |
| 管玉状土製品が混入した土器（84） | |
| 写真図版24 第3面出土遺物 | |
| S H309出土土器（81～83・8587） | |
| 写真図版25 第3面出土遺物 | |
| S K301出土土器（88～92） | |



第1図 遺跡の位置図

第1章 住吉宮町遺跡

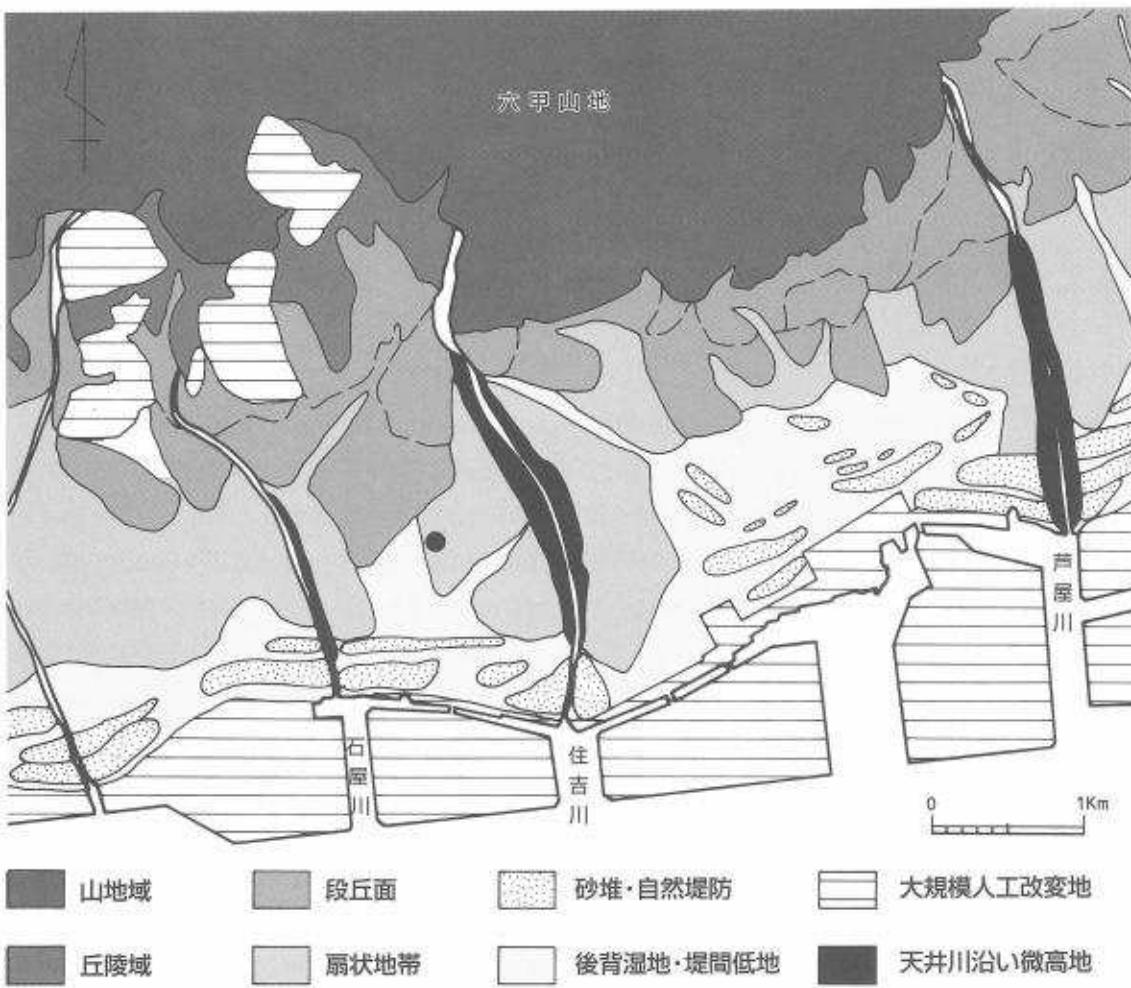
第1節 地理的環境

(1) 地理的位置

- 神戸市** 住吉宮町遺跡の所在する神戸市は、兵庫県南東部に位置し、南は大阪湾に面している。東は芦屋市・西宮市・宝塚市、北は三田市・美嚢郡吉川町・三木市、西は加古郡稻美町・明石市と境をなす（第1図）。中央部には六甲山地がほぼ東西に横たわり、市域を南北に分断する。南麓の海岸沿いには狭い帯状の沖積平地が発達し、神戸港を中心に商工業の発達した市街地を形成し、国道2号・国道43号のほかJR神戸線・阪急電鉄・阪神電鉄など鉄道の走る市の中心部をなしている。市域は近世までの摂津国八部郡全域と兎原郡の大部分、有馬郡の南部および播磨国明石郡東部・北部、美嚢郡の南東部からなる。神戸の地名は「和名抄」八部郡の郷名にあり、生田神社（現中央区）の神戸に由来するという。
- 東灘区** 遺跡の所在する東灘区は、神戸市南東部に位置し、行政区的には東は芦屋市、北は北区、西は灘区と接している。近世までは兎原郡に属し、旧の御影村・魚崎村・住吉村・本山村・本庄村からなる。
- 住吉宮町** 遺跡の名称となっている住吉宮町は、東灘区の南部に位置し、住吉川の右岸を占める。町の北側を国道2号とJR神戸線が、南側を阪神電鉄本線が東西に走っている。JR住吉駅（住吉本町）前商店街と本住吉神社の宮町商店街を中心とする住宅地域である。旧住吉村の範囲の一部で、「和名抄」の兎原郡住吉郷の遺称地である。

(2) 地形環境

- 住吉宮町遺跡周辺の地形環境および地形の形成過程については、これまでに高橋学氏が詳細に検討されている（高橋1986・1987・1988・1990a・1990b）。そこで、今回は氏の一連の実績から要点のみを概略する。
- 六甲山地南麓** 住吉宮町遺跡は、六甲山地南麓に位置する。地形域レベルでみると、六甲山地南麓の地域は北から南に、山地域、丘陵域、平野域、海域の順に配列している（第2図）。
- 六甲山地** 当地域を大きく特徴付ける六甲山地は、市域の中央をほぼ東西方向約30kmにわたり横たわっている。標高は931mで、深層風化を受けた花崗岩類で形成されている。
- 丘陵域** 山麓には大阪層群と呼ばれる半固結状態の主に河成～湖成の砂礫・粘土から構成される丘陵が分布している。眺望が良好で、地盤が安定しているため高級住宅地となっている。
- 平野域** 平野域は、段丘面と現氾濫原面からなる。当地域の平野域は、崩壊しやすい六甲山地の性格を極めてよく反映しており、土石流扇状地や扇状地として形成された地形が広い範囲を占めていることが特徴である。
- 以上のように、地形域レベルでは、崩壊しやすい六甲山地の性格が、この地域の特徴として大きな比重を占めている。
- 現氾濫原面** 住吉宮町遺跡が立地するのは、上記の平野域でも現氾濫原面にあたる。現氾濫原面は現在も土砂の堆積が継続している場所である。遺跡の周辺は、昭和13（1938）年の阪神大水



第2図 遺跡周辺の地形分類図（高橋1990aを改変）

害の際に被害が甚大であった地域でもある。当地域の現氾濫原面は、山側の扇状地として形成された地形带と、海側の「縄文海進」最盛期に海域であった場所が後に陸化した三角州帶と考えられる地形带からなり、当遺跡は前者に立地する。

扇状地

扇状地は、河川が形成した谷口を扇頂とする半円錐状の堆積地形である。扇状地を構成する微地形は、網状通路を描く旧河道とそれに囲まれた旧中州あるいは土石流ロープが基本をなす。本来、河川は洪水時には扇頂から放射状に分流するが、当地域では中世末以降の築堤による河川の固定化の結果、河川は河床が周囲より高くなる天井川となっている。

当遺跡は、上記のような上流から放射状に土砂が供給される扇状地上に立地することから、堆積状況は極めて複雑で、また時期によって微地形が変化することから、遺跡の土地利用もその都度変遷するという特徴を指摘できる。

なお、芦屋川・住吉川流域の地形環境および地形の形成過程についての詳細は、高橋学氏の文献にあたられたい。

参考文献

- 高橋学 1986 「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅰ」 兵庫県教育委員会『北青木遺跡』
- 高橋学 1987 「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅱ」 兵庫県教育委員会『小路大町遺跡発掘調査報告書』
- 高橋学 1988 「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅲ」 兵庫県教育委員会『深江北町遺跡』
- 高橋学 1990a 「郡家遺跡—御影中学校地区の地形環境」 神戸市教育委員会『郡家遺跡』
- 高橋学 1990b 「坊ヶ塚遺跡の地形環境分析」 兵庫県教育委員会『坊ヶ塚遺跡(住吉宮町遺跡群Ⅱ)』
- 竹内理三編 1988 『角川日本地名大辞典28 兵庫県』 角川書店
- 地学団体研究会編 1996 『新版 地学事典』 平凡社

第2節 歴史的環境

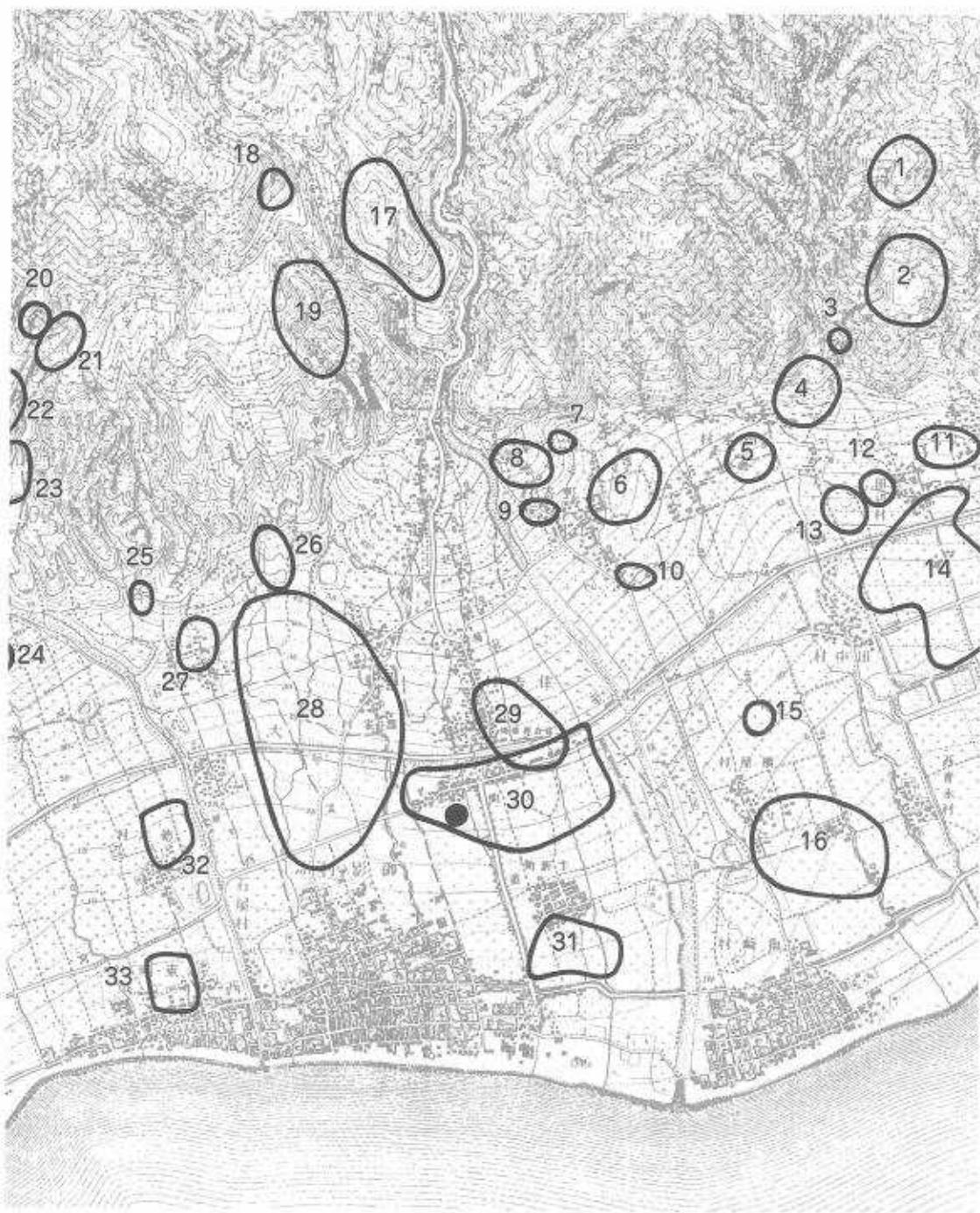
住吉宮町遺跡の立地する、六甲山地南麓の住吉川と石屋川の流域周辺の遺跡を時期別に概観する。

- 旧石器時代** 当地域で明確な遺構は未だ検出されていないが、平野域段丘面上の西岡本遺跡（8、第3～5図8に対応、以下同じ）と丘陵域の滝ノ奥遺跡（22）で終末期の石器が出土している。
- 縄文時代** 西岡本遺跡（8）で早期の竪穴住居跡が検出されている。また、丘陵域の申新田遺跡（21）で前期の玦状耳飾と石錐が採集されている。
- 弥生時代** 当該期においてようやく平野域を中心に、遺跡が確認されるようになる。
- 前期** 平野域段丘面上の本山遺跡（14）で集落が出現する。また、処女塚古墳（33）の盛土からではあるが、当該期の土器が出土している。処女塚古墳は現海岸線からの直線距離がわずか1.5kmで、また海岸沿いの旧砂堆上に立地すると考えられることから（第5図）、同様な旧砂堆上に立地する芦屋川右岸の本庄町遺跡（東灘区）や北青木遺跡（東灘区）のような集落遺跡が旧砂堆上で今後確認される可能性が大いに考えられる。
- 中期** 中期後半以降六甲山地から派生する尾根上や丘陵上で集落が営まれるようになる。平野部との比高差が80m以上もある眺望の優れた場所に立地する、いわゆる高地性集落に分類されるものである。周辺では東から、金鳥山遺跡（1）、保久良神社遺跡（2）、荒神山遺跡（17）、赤坂山遺跡（19）、桜ヶ丘B地点遺跡（23）などが確認されている。
- 平野域では、引き続き本山遺跡（14）が当該期まで継続して営まれる。また、郡家遺跡（28）と住吉宮町遺跡（30）で当該期の遺物が確認されるようになる。
- 後期** 尾根上や丘陵上の集落は当該期には廃絶する。それに対して平野域では、段丘面上の岡本北遺跡（6）、西岡本遺跡（8）、郡家遺跡（28）や、扇状地帶上の住吉宮町遺跡（30）で集落が出現するようになる。中でも、郡家・住吉宮町の両遺跡では当該期以降集落が継続的に、また大規模に拡大していく。また、両遺跡では周溝墓を主体とする墓域も確認されている。
- 終末期** 平野域段丘面上の本山北遺跡（12）で集落が、住吉川左岸の扇状地帶上の魚崎中町遺跡（16）で周溝墓と土器棺を主体とする墓域が確認されるようになる。また、引き続き郡家遺跡（28）と住吉宮町遺跡（30）でも墓域が確認され、当地域は畿内でも有数の周溝墓集中地帯の様相を呈する。
- 青銅器祭祀** なお、当該地の弥生時代の地域的な特徴として、青銅器が多量に出土する地域であることが特記できる。主に六甲山地から派生する尾根からの出土で、著名な桜ヶ丘（20）の銅鐸14口・銅戈7本の出土を筆頭に、渦ヶ森（18）、本山遺跡（14）、生駒（東灘区）、森（東灘区）、伝大月山（灘区）で銅鐸が、保久良神社遺跡（2）で銅戈がそれぞれ出土している。これら埋納された青銅器は、境界祭祀（結界）に用いられた可能性などが考えられている。
- 古墳時代** 集落については弥生時代から引き続き継続するものが多い。中でも、郡家遺跡（28）と住吉宮町遺跡（30）は古墳時代を通じて当地域の拠点的な集落となっている。
- 墓域については、近年の調査の結果、新知見が加わり新たにその様相が明らかになりつつある。そこで、時期ごとに古墳（群）の分布の変遷を概観してみたい。
- 前期** 海岸沿いの旧砂堆上で、東求女塚古墳（31、全長約80m）、処女塚古墳（33、全長約68m）、



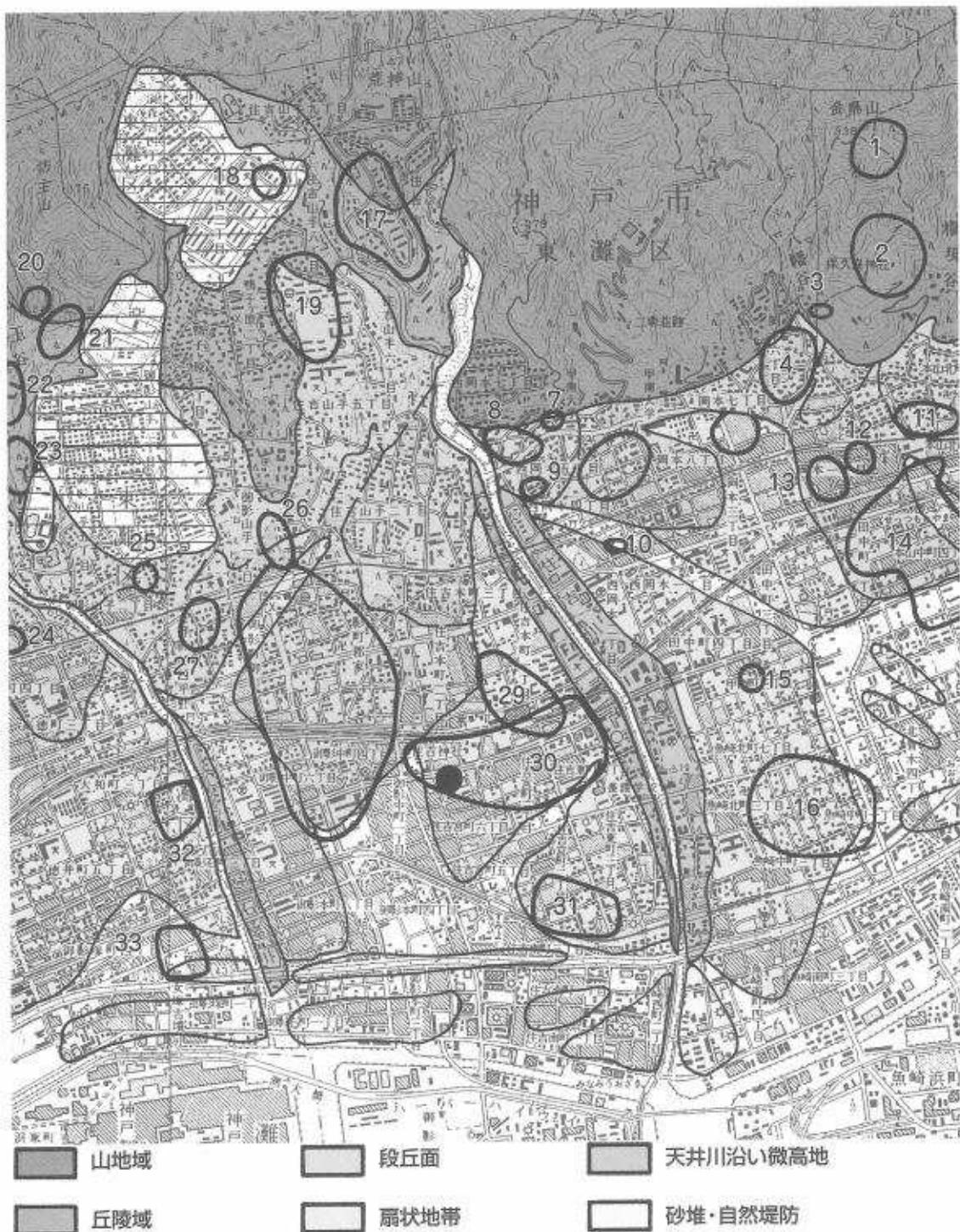
| | 遺跡名 | 時期 | 文献 | | 遺跡名 | 時期 | 文献 |
|---|---------|----------|-----|----|--------|-------|-----|
| 1 | 金鳥山遺跡 | 弥生 | 1 | 10 | 岡本南遺跡 | 古墳・中世 | 3 |
| 2 | 保久良神社遺跡 | 弥生 | 1・2 | 11 | 散布地 | | 3 |
| 3 | 八幡谷古墳 | 古墳 | 1 | 12 | 本山北遺跡 | 弥生～中世 | 6 |
| 4 | 岡本梅林古墳 | 古墳 | 1 | 13 | 扁保曾塚古墳 | 古墳 | 1・6 |
| 5 | 岡本東遺跡 | 縄文～中世 | 3 | 14 | 本山遺跡 | 弥生・中世 | 7～9 |
| 6 | 岡本北遺跡 | 弥生～古墳・中世 | 4 | 15 | 甲南町遺跡 | 中世 | 10 |
| 7 | | 古墳 | 3 | 16 | 魚崎町遺跡 | 弥生～平安 | 11 |
| 8 | 西岡本遺跡 | 旧石器～中世 | 5 | 17 | 荒神山遺跡 | 弥生 | 12 |
| 9 | | 古墳 | 3 | 18 | 渦ヶ森銅鐸 | 弥生 | 1 |

第3図 周辺の遺跡



| | 遺跡名 | 時期 | 文献 | | 遺跡名 | 時期 | 文献 |
|----|----------|-----------|------|----|--------|-------|--------|
| 19 | 赤塚山遺跡 | 弥生 | 1 | 28 | 郡家遺跡 | 弥生～中世 | 16～18 |
| 20 | 桜ヶ丘銅鐸 | 弥生 | 13 | 29 | 坊ヶ塚古墳 | 古墳 | 19 |
| 21 | 申新田遺跡 | 縄文 | 1 | 30 | 住吉宮町遺跡 | 弥生～中世 | 20～25 |
| 22 | 滝ノ奥遺跡 | 旧石器・弥生・平安 | 2・14 | 31 | 東求女塚古墳 | 古墳 | 1・2・27 |
| 23 | 桜ヶ丘B地点遺跡 | 弥生 | 2・15 | 32 | 徳井町遺跡 | 中世 | 3 |
| 24 | 散布地 | | 3 | 33 | 凧女塚古墳 | 古墳 | 1・2・28 |
| 25 | 御影山手遺跡 | 中世 | 3 | | | | |
| 26 | | 中世 | 3 | | | | |
| 27 | 西平野遺跡 | 弥生・中世 | 3 | | | | |

第4図 周辺の遺跡（明治18年測量大日本帝国参謀本部陸軍部測量局仮製地形図を1/25000に縮小）



第5図 周辺の遺跡（地形分類図と重ねあわせたもの）

西求女塚古墳（灘区、全長約95m）の3基が知られている。後二者では山陰系の土器が出土し、また墳形に前方後方墳を採用している点が注目される。また、段丘面上では前方後円墳の扁保會塚古墳（13、全長約65m）が知られている。処女塚古墳の埋葬施設は不明であるが、他の古墳は竪穴式石室を採用し、副葬品に三角縁神獸鏡の出土が知られている。

中期 住吉宮町遺跡（30）で群集墳が出現する。以後、当遺跡では後期前半まで群集墳が継続的に造営される。現在までに洪水で埋没した古墳が50基以上確認されている。前方後円墳の坊ヶ塚古墳

- (29) と帆立貝形の住吉東古墳（全長約24m）を除き、他は全て1辺5～20mの方墳で、埋葬施設には主に木棺直葬と箱式石棺を採用している。また、墳丘を持たない石棺墓群も認められる。
- 後期** 後期後半以降、主に段丘面上で横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が形成されるようになる。八幡谷古墳（3）、岡本梅林古墳群（4）、西岡本遺跡（8）で確認された野寄群集墳、郡家遺跡（28）の下山田地区などである。江戸時代の地誌などによると上記以外にも横穴式石室を内蔵する古墳が多数存在したようだが、明治時代以降の急激な市街化のため、その多くは消滅した。
- 奈良時代～** 当地域は、律令期の攝津国兎原郡の範囲にあたる。当該期には郡家遺跡（28）と住吉宮町遺跡（30）で掘立柱建物跡や井戸などが確認されている。郡家遺跡は、遺跡の範囲内に残る「郡家」「大藏」といった地名から、兎原郡衙に比定されているが、積極的に郡衙と評価できる遺構は現在のところ確認されていない。また、滝ノ奥遺跡（22）では寺院跡が、魚崎中町遺跡（16）では水田跡が見つかっている。
- 平安時代** 町遺跡（30）で掘立柱建物跡や井戸などが確認されている。郡家遺跡は、遺跡の範囲内に残る「郡家」「大藏」といった地名から、兎原郡衙に比定されているが、積極的に郡衙と評価できる遺構は現在のところ確認されていない。また、滝ノ奥遺跡（22）では寺院跡が、魚崎中町遺跡（16）では水田跡が見つかっている。
- 中世** 当地域は山路荘として再開発・再編成されるようになり、平野域でも特に段丘面上に集落が展開するようになる。段丘面上の岡本北遺跡（6）、西岡本遺跡（8）、本山遺跡（14）、郡家遺跡（28）、扇状地帯上の住吉宮町遺跡（30）、徳井町遺跡（32）などで掘立柱建物を主体とする集落が確認されている。また、甲南町遺跡（15）で水田跡が、滝ノ奥遺跡（22）で経塚・火葬墓が検出されている。

参考文献

- (1) 神戸市 1989『新修神戸市史 歴史編I 自然・考古』
- (2) 兵庫県 1992『兵庫県史 考古資料編』
- (3) 神戸市教育委員会 2000『神戸市埋蔵文化財分布地図』
- (4) 六甲山麓遺跡調査会 1992『岡本北遺跡』
- (5) 六甲山麓遺跡調査会 2001『西岡本遺跡』
- (6) 六甲山麓遺跡調査会 1995『本山北遺跡』
- (7) 財團法人古代學協會 1984『本山遺跡発掘調査報告書』
- (8) 神戸市教育委員会 1991『本山遺跡第12次調査の概要』
- (9) 神戸市教育委員会 1998『本山遺跡（第22次調査）』
- (10) 神戸市教育委員会 1993『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (11) 神戸市教育委員会 1996『魚崎中町遺跡（第3次調査）』
- (12) 神戸市教育委員会 1970『荒神山遺跡調査概報』
- (13) 兵庫県教育委員会 1969『神戸市櫻ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』
- (14) 神戸市教育委員会 1983『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (15) 神戸市教育委員会 1998『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (16) 神戸市教育委員会 1990『郡家遺跡』
- (17) 大手前女子大学史学研究所 1992『郡家遺跡—御影中町地区第4次調査—』
- (18) 六甲山麓遺跡調査会 1995『郡家遺跡—様坪地区第10次調査—』
- (19) 神戸市教育委員会 2000『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (20) 兵庫県教育委員会 1989『住吉宮町遺跡群Ⅰ（坊ヶ塚遺跡）』
- (21) 兵庫県教育委員会 1990『坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』
- (22) 兵庫県教育委員会 1991『住吉宮町遺跡発掘調査報告書』
- (23) 神戸市教育委員会 1990『住吉宮町遺跡 第11次調査』
- (24) 神戸市教育委員会 1998『住吉宮町遺跡 第17次・第18次調査』
- (25) 神戸市教育委員会 2001『住吉宮町遺跡 第19次・第20次調査』
- (26) 神戸市教育委員会 2001『住吉宮町遺跡 第24次・第32次発掘調査報告書』
- (27) 神戸市教育委員会 1985『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (28) 兵庫県 1923『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書 第1輯』

第3節 住吉宮町遺跡と周辺の遺跡

はじめに 住吉宮町遺跡は、以前から周知されていた遺跡である。そこで、これまでの調査の結果明らかになってきたことを以下にまとめておきたい。

また、住吉宮町遺跡と同じく住吉川と石屋川に挟まれた平野域に立地する遺跡に、坊ヶ塚古墳と郡家遺跡がある。住吉宮町遺跡と近接し、また遺跡の性格も同様である両遺跡についてもこれまでの成果を概観し、住吉宮町遺跡との関係について言及する。

住吉宮町遺跡 東灘区住吉宮町に所在する。住吉川の形成した扇状地帶上に立地する。遺跡の推定範囲は、東西方向約800m、南北方向約400mの範囲である。これまで35次におよぶ調査が実施されており（2001年8月末現在）、今回報告する調査は第33次調査にあたる（第1・2表）。これまでの調査の結果、当遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが明らかになっており、（Ⅰ期）弥生時代後期～古墳時代前期、（Ⅱ期）古墳時代中期～同後期、（Ⅲ期）奈良時代～平安時代、（Ⅳ期）中世前半の4時期に大別されることが判明している。

坊ヶ塚古墳 東灘区住吉宮町に所在する。住吉川の形成した扇状地帶上に立地する。遺跡の推定範囲は、東西方向約200m、南北方向約400mの範囲である。遺跡名となっている坊ヶ塚古墳は江戸時代の絵図や地名から存在の推定された前方後円墳である。長らく詳細は不明であったが、平成9年の調査（住吉宮町遺跡第28次調査）の結果、坊ヶ塚古墳のものと考えられる後円部が検出され、古墳の詳細が明らかになってきた。

今回、注意しておきたい点は、坊ヶ塚古墳として範囲を括られているが（第3～5図29）、本来は同古墳を内蔵する坊ヶ塚遺跡の範囲であり、同古墳と同遺跡の範囲が混同されている点である。

また、坊ヶ塚遺跡は、JR住吉駅付近で住吉宮町遺跡と範囲が重複している。これは、1980年代後半の時点では、住吉宮町遺跡（神戸市教育委員会による第1～4次調査）と坊ヶ塚遺跡（兵庫県教育委員会による住吉宮町遺跡第5～7・10次調査に相当）は、埋没した谷地形を挟んで別の微高地に立地する別遺跡であると認識されていたことによる。しかしながら、両遺跡の存続時期や性格は同一で、両遺跡間の範囲の線引きも困難であることから、住吉宮町遺跡群の中の一支群として扱われることとなった。したがって、坊ヶ塚遺跡とは、広義の住吉宮町遺跡であることを確認しておく。

郡家遺跡 東灘区御影町・同御影中町に所在する。住吉川と石屋川の間の段丘面上に大部分が立地する。遺跡の推定範囲は、東西方向約600m、南北方向約1,100mの範囲である。これまでに80次以上の調査が実施されている（第3・4表）。これまでの調査の結果、当遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが明らかになってきており、住吉宮町遺跡と同じく4時期に大別させる。また、律令期の兎原郡家の推定地でもある。

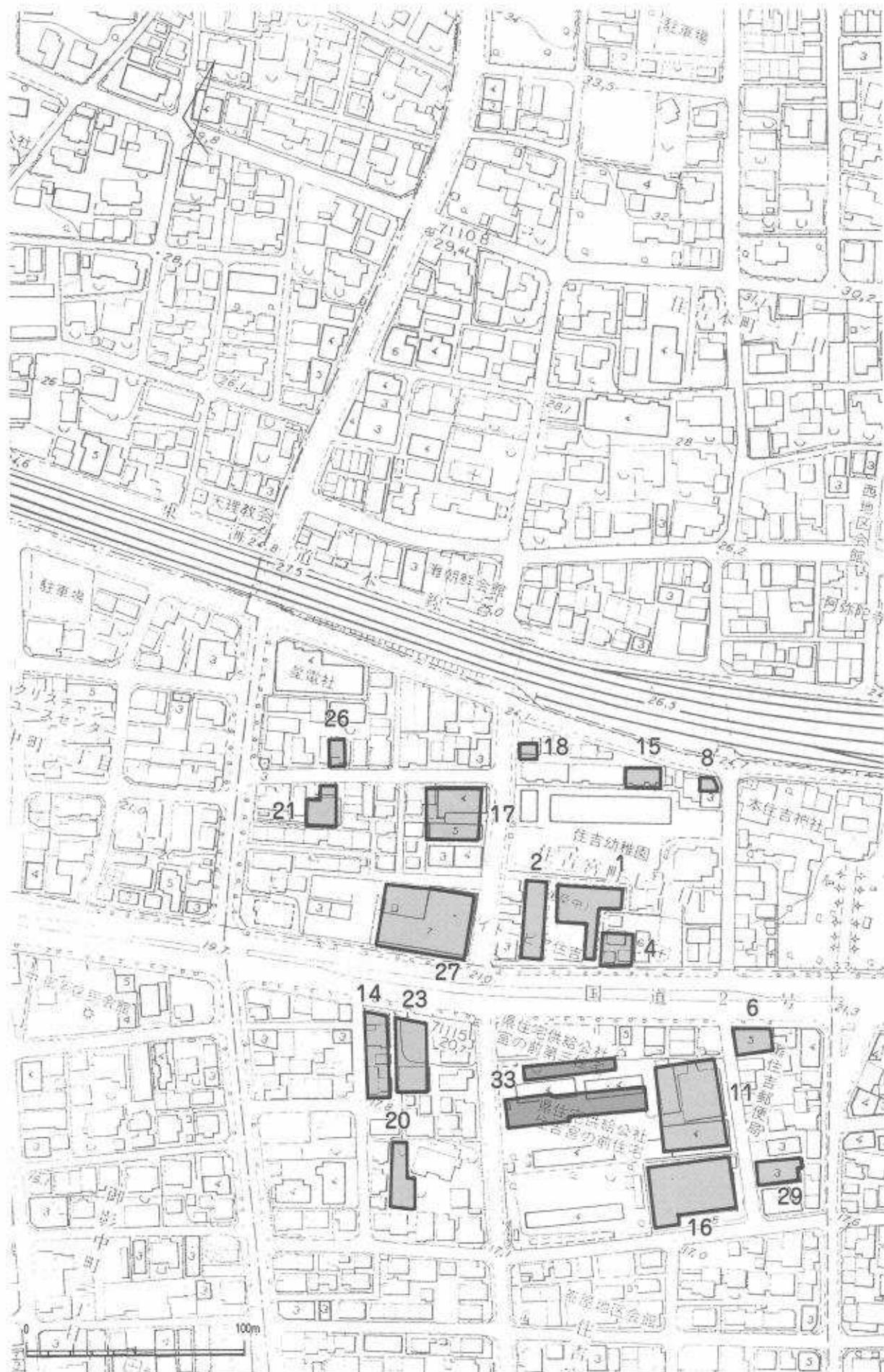
郡家遺跡の範囲は住吉宮町遺跡と近接し性格も類似するにも関わらず、現行政区の制約により線引きされ、括られている感が否めない。両遺跡とも住吉川と石屋川によって形成された複合扇状地上に立地するといった記載が多く、見かけ上は同一の扇状地上に立地しているように見える。しかしながら、地形分類図によると（第5図）、住吉宮町遺跡は扇状地帶上、郡家遺跡は段丘面上に立地している。河川の固定化される以前、遺跡の立地条件・状況は立地する地形により自然災害などの影響に大きく左右され、通常は土地の利

用状況も異なる。したがって、立地の異なる両遺跡は、別遺跡であると考えておく。

遺跡間の関係 以上のことから、住吉宮町遺跡と坊ヶ塚古墳（坊ヶ塚遺跡）は広義の同一遺跡、郡家遺跡とは立地の異なる別の遺跡であることを再度確認しておく。なお、遺跡間の有機的な関係については、第5章第2節で詳述する。

第1表 住吉宮町遺跡調査一覧表(1)

| 次数 | 年度 | 調査主体 | 調査概要 | 文献 |
|----|------|------|---|----|
| 1 | 1985 | 市教委 | (古墳時代後期) 古墳3基、土抗、溝 (鎌倉時代) 土抗 | 1 |
| 2 | 1985 | 市教委 | (古墳時代前期初頭) 土抗、落ち込み (古墳時代後期初頭) 古墳8基 (古墳時代後期末) 流路 | 1 |
| 3 | 1985 | 市教委 | (古墳時代後期) 溝、土抗 (鎌倉時代) 溝、土抗 | 1 |
| 4 | 1986 | 市教委 | (古墳時代前期初頭) 土抗 (古墳時代後期初頭) 箱式石棺3基、溝 (古墳時代後期後半~奈良時代) 溝 | 2 |
| 5 | 1987 | 県教委 | (弥生時代終末期) 方形周溝墓3基 (古墳時代前期) 堪穴住居跡1棟、木棺墓、土抗墓 (古墳時代後期) 古墳9基、埋葬施設2基、水田 (鎌倉時代) 掘立柱建物跡2棟 | 3 |
| 6 | 1987 | 県教委 | (中世~近世) 土抗 | 4 |
| 7 | 1987 | 県教委 | (弥生時代終末期) 方形周溝墓3基 (古墳時代後期) 古墳2基、土器棺1基 | 5 |
| 8 | 1987 | 市教委 | (鎌倉時代) 柱穴 | 4 |
| 9 | 1988 | 市教委 | (弥生時代終末期) 方形周溝墓1基 (古墳時代後期) 堪穴住居跡10棟、古墳3基、住吉東古墳(帆立貝形) 1基 (奈良時代) 掘立柱建物跡9棟 | 6 |
| 10 | 1988 | 県教委 | (弥生時代後期) 土抗 (古墳時代後期) 第7次調査の古墳の続き | 5 |
| 11 | 1988 | 市教委 | (弥生時代中期~古墳時代前期) 堪穴住居跡6棟 (古墳時代後期) 堪穴住居跡4棟 (平安時代前中期) 掘立柱建物跡3棟、地鎮造構2基 (平安時代後期) 掘立柱建物跡2棟 (室町時代) 採石跡 | 7 |
| 12 | 1989 | 県教委 | (古墳時代後期) 古墳4基 (奈良時代) 溝1条 (鎌倉時代) 溝1条 | 8 |
| 13 | 1989 | 市教委 | (古墳時代後期) 古墳2基、堪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟、土抗1基 (奈良時代~平安時代) 掘立柱建物跡2棟、欄1条、溝5条、土抗1基 | 9 |
| 14 | 1990 | 市教委 | (古墳時代後期) 堪穴住居跡2棟、土抗2基 (奈良時代) 掘立柱建物跡2棟、井戸3基 | 10 |
| 15 | 1992 | 市教委 | (中世) 包含層 | 11 |
| 16 | 1993 | 市教委 | (古墳時代後期) 流路 (平安時代) 掘立柱建物跡 | 12 |
| 17 | 1995 | 市教委復 | (古墳時代後期) 古墳8基 (飛鳥時代) 堪穴住居跡16棟、掘立柱建物跡7棟 (奈良時代) 道路跡 | 13 |
| 18 | 1995 | 市教委復 | (古墳時代後期後半) 古墳1基 | 13 |
| 19 | 1996 | 市教委復 | (弥生時代後期後半) 溝1条、土抗1基 (古墳時代後期) 古墳3基 (平安時代) 掘立柱建物跡1棟 (中世後半以降) 掘立柱建物跡2棟 | 14 |



第6図 住吉宮町遺跡調査地点（西半）



第7図 住吉宮町遺跡調査地点（東半）

第2表 住吉宮町遺跡調査一覧表(2)

| 次数 | 年度 | 調査主体 | 調査概要 | 文献 |
|----|------|------|--|-----|
| 20 | 1996 | 市教委復 | (古墳時代中期～後期) 流路2条 (飛鳥時代～奈良時代) 石組み遺構1基、流路1条 | 14 |
| 21 | 1996 | 市教委復 | (古墳時代後期) 壓穴住居跡1棟 (古墳時代後期後半) 壓穴住居跡2棟、掘立柱建物跡2棟 (奈良時代) 掘立柱建物跡1棟 | 15 |
| 22 | 1996 | 市教委復 | (古墳時代後期末) 溝1条、落ち込み (奈良時代) 溝2条、土抗 | 15 |
| 23 | 1996 | 市教委復 | (奈良時代～平安時代) 井戸1基、横列2条、流路2条 (中世) 溝3条 | 15 |
| 24 | 1997 | 市教委復 | (弥生時代終末期～古墳時代前期) 土器棺1基 (古墳時代中期末～後期初頭) 古墳4基、土抗1基 (平安時代) 流路1条 | 16 |
| 25 | 1997 | 市教委復 | (弥生時代後期) 壓穴住居跡1棟 (古墳時代) 掘立柱建物跡1棟 (奈良時代～平安時代前期) 掘立柱建物跡1棟 (中世) 土抗墓1基、井戸1基、土抗7基、溝1条 | 17 |
| 26 | 1997 | 市教委復 | (古墳時代後期) 壓穴住居跡1棟、流路 (奈良時代) 掘立柱建物跡2棟、横列2条 (中世) 土抗 | 17 |
| 27 | 1997 | 市教委復 | (弥生時代後期) 壓穴住居跡1棟 (古墳時代) 土抗墓1基 (奈良時代) 溝1条 (江戸時代) 溝1条 | 17 |
| 28 | 1997 | 市教委 | (古墳時代) 坊ヶ塚古墳(前方後円墳)の後円部 | 17 |
| 29 | 1997 | 市教委復 | (中世) 溝1条、土抗2基 | 17 |
| 30 | 1997 | 市教委 | (弥生時代中期) 溝3条 (弥生時代終末期) 溝2条 (古墳時代後期) 古墳6基、壓穴住居跡1棟、溝1条 (古代～中世) 掘立柱建物跡2棟、溝2条、土抗、柱穴 | 17 |
| 31 | 1998 | 市教委 | (中世) 掘立柱建物跡1棟、流路 | 18 |
| 32 | 1998 | 市教委復 | (弥生時代後期) 壓穴住居跡6棟、土抗26基、溝、落ち込み、土器溜まり、流路 (古墳時代後期) 古墳10基、石棺墓10基、埋葬甕1基 (奈良時代) 柱穴、土抗、落ち込み (鎌倉時代～室町時代・近世) 井戸2基、土抗、落ち込み、溝、柱穴 | 16 |
| 33 | 1998 | 県教委 | (弥生時代終末期) 壓穴住居跡9棟、土抗7基、溝2条、柱穴 (古墳時代後期) (地滑り痕、噴砂痕) (奈良時代～平安時代前半) 掘立柱建物跡2棟、地鎮遺構1基、土抗7基、溝2条 | 本報告 |
| 34 | 1998 | 市教委復 | (弥生時代後期) 土抗1基、柱穴 (古墳時代後期) 柱列1条、落ち込み2基、柱穴 (奈良時代) 土抗1基、流路、柱穴 | 18 |
| 35 | 2001 | 市教委 | (古墳時代後期) 古墳1基 | 19 |

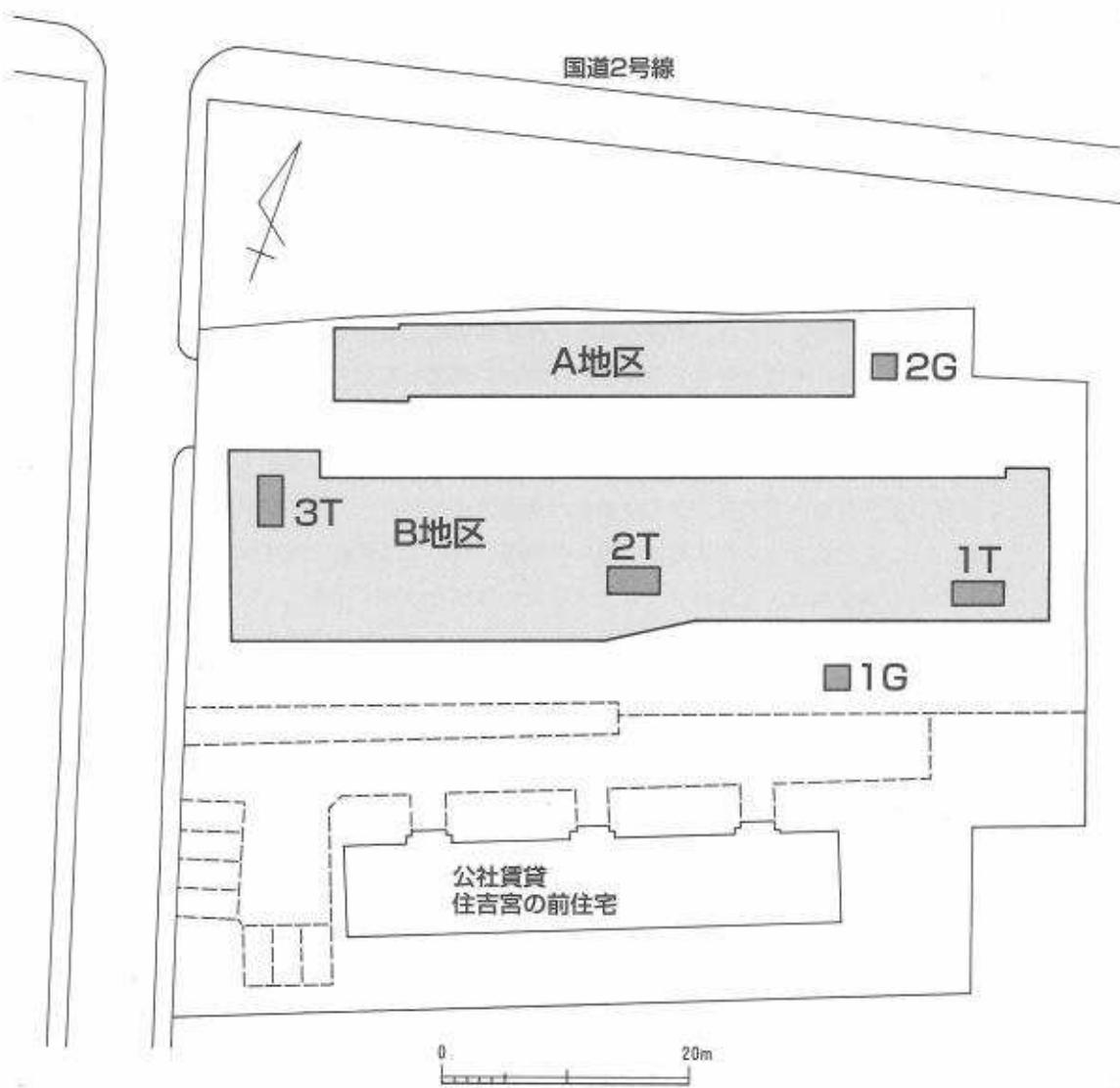
参考文献

- (1) 神戸市教育委員会 1988『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (2) 神戸市教育委員会 1989『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (3) 兵庫県教育委員会 1990『坊ヶ塚遺跡(住吉宮町遺跡群Ⅱ)』
- (4) 神戸市教育委員会 1990『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (5) 兵庫県教育委員会 1989『住吉宮町遺跡群Ⅰ(坊ヶ塚遺跡)』
- (6) 神戸市教育委員会 1994『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (7) 神戸市教育委員会 1990『住吉宮町遺跡 第11次調査』
- (8) 兵庫県教育委員会 1991『住吉宮町遺跡発掘調査報告書』
- (9) 神戸市教育委員会 1992『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (10) 神戸市教育委員会 1993『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (11) 神戸市教育委員会 1995『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (12) 神戸市教育委員会 1996『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (13) 神戸市教育委員会 1998『住吉宮町遺跡 第17次・第18次調査』
- (14) 神戸市教育委員会 2001『住吉宮町遺跡 第19次・第20次調査』
- (15) 神戸市教育委員会 1999『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (16) 神戸市教育委員会 2001『住吉宮町遺跡 第24次・第32次発掘調査報告書』
- (17) 神戸市教育委員会 2000『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (18) 神戸市教育委員会 2001『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (19) 神戸市教育委員会 2001『住吉宮町遺跡第35次現地説明会資料』

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査の経緯 住吉宮町遺跡については、前節で紹介したように周知されている遺跡である。平成5年、兵庫県住宅供給公社は、当遺跡内の神戸市東灘区住吉宮町6丁目88番地に所在する住吉宮の前住宅の老朽化に伴い建替え（現ラヴェール住吉の建設）工事を計画した。そこで、兵庫県住宅供給公社からの依頼を受けて、遺跡の有無やその状況を把握するための確認調査を実施することとなった。



第8図 調査区配置図

第2節 確認調査

調査の目的 遺構の残存状況を確認し、周辺の調査の成果から複数の遺構検出面が想定できるためその遺構面数を確定する、という2点を明らかにするべく確認調査を実施した。

調査の結果 平成5年度に第1次確認調査を、平成10年度に第2次確認調査を実施した。

第1次 既存建物を避けて2m×2mのグリットを2箇所(1G・2G)設定して調査を実施した(第8図)。調査の結果、2層の遺物包含層を確認した。

第2次 既存建物の解体後、建設予定地内に2m×4mのトレンチを3箇所(1T～3T)設定して調査を実施した(第8図)。調査の結果、3面の遺構面を確認した。

確認調査の体制

第1次確認調査(遺跡調査番号930165)

調査担当職員 企画調整班 主査 水口 富夫

第2次確認調査(遺跡調査番号980034)

調査担当職員 企画調整班 技術職員 多賀 茂治

第3節 全面調査

地区設定 確認調査の結果、調査地の敷地内全域で遺構および遺物が確認された。しかし、今回建替え工事が行われるのは、新設される立体駐車場部分と住宅本体部分の2箇所である。そこで、前者をA地区、後者をB地区と呼称して調査を実施することにした(第8図)。

調査方法 既存建物の基礎および盛土は、地上の既存建物の解体時に機械で掘削し、場外に搬出した。また、確認調査および調査区東側に隣接する第11次調査の成果から、今回の調査地では厚い洪水起源の堆積層を挟んで複数の遺構面が存在することが想定された。そこで、遺物をほとんど含まない洪水起源の厚い堆積層については機械で掘削することとした。

今回の調査地は、上記のように洪水起源の堆積物が厚く堆積しているため、降雨・湧水による調査区壁面の崩落の危険が予想された。そこで、調査区壁面の崩落を防ぐために、調査区の周囲をH鋼と横矢板により護岸しながら掘削した。

調査順序 調査にあたっては、掘削による廃土を場外に搬出する必要があったため、面積の広いB地区から調査を開始した。そして、B地区的調査完了後、A地区的調査を開始し、掘削による廃土はB地区に埋め戻すこととした。

全面調査の体制

全面調査(遺跡調査番号980109)

調査担当職員 調査第3班 技術職員 鐵 英記

事務職員 服部 寛

第4節 整理作業

(1) 平成12年度の整理作業

整理作業内容 出土した遺物の大半は、発掘調査で取り上げたままの未洗浄の状態で、兵庫県教育委員会魚住分館に仮収蔵されていた。したがって、最初に魚住分館において遺物の洗浄、遺物台帳作成およびネーミングを行った。

遺物を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に移した後、遺物の接合作業を行った。接合した遺物から実測するものを選び出し、必要なものについては補強作業を行った。実測した遺物の点数は、土器92点、鉄器2点、石器1点である。遺物については実測および復元までの作業を行った。

遺構および遺物の図面は版下作成からトレース作業まで、遺構の写真は図版のレイアウト作業までを行った。

平成12年度の整理作業の体制

| | | | |
|---------|--|------|--------------|
| 整理担当職員 | 整理普及班 | 主　查 | 菱田淳子（行程管理担当） |
| | 調査第2班 | 事務職員 | 服部 寛（整理担当） |
| 整理技術嘱託員 | 増田麻子　吉田優子　喜多山好子　大前篤子　石野照代　早川亜紀子 蔵　幾子　島村順子　大仁克子　小寺恵美子　岡井とし子　蓬萊洋子 | | |

(2) 平成13年度の整理作業

整理作業内容 遺物の写真撮影から開始し、原稿執筆その他の報告書刊行までの全ての作業を行った。

平成13年度の整理作業の体制

| | | | |
|---------|--------------------------|------------|---------------|
| 整理担当職員 | 整理普及班 | 主　查 | 加古千恵子（保存処理担当） |
| | | 主　查 | 菱田 淳子（行程管理担当） |
| 調査第1班 | 事務職員 | 服部 寛（整理担当） | |
| 整理技術嘱託員 | 増田麻子　西野淳子　三好綾子　藤井光代　三島重美 | | |



第9図 整理作業状況

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

(1) 基本層序と遺構の検出

はじめに 調査地は、住吉川によって形成された扇状地帶上に立地することから、住吉川の氾濫に伴う北東方向からの土砂の供給を幾度となく受けて、複雑な堆積状況を呈している。

基本層序 土層は東から西へ緩やかに傾斜しており、調査した範囲では18層で形成されている。

調査地の基本的な層序は上流から供給される洪水起源の堆積層→その上層が土壤化した層→洪水起源の堆積層のパターンの繰り返しである。

土壤層 土壤層は、その層がある時点で地表面であった時期に形成されるものである。今回の調査では11層の土壤層を確認している。

遺構の検出 したがって、本来は土壤層上面が生活面で、土壤層上面で遺構が検出できるはずである。しかし、遺構の検出にあたっては、土壤層と遺構の埋土の区別が困難であったため、基本的には土壤層を除去した段階で遺構を検出した。

第1面 土壤層（第3層、第10図3に対応、以下同じ）を除去した段階で検出した遺構面で、第4層上面に対応する。ただし、B地区の調査区東半では第3層は存在せず、第2層を除去した段階で遺構を検出した。また、B地区の調査区中央では第4層が確認できず、遺構も検出されなかった。第1面上の包含層（第2層・第3層）は奈良時代～平安時代前半の遺物を包含する。第1面では掘立柱建物跡、土抗、溝、柱穴を検出した。

第2面 洪水起源の堆積層（第4層）を除去した段階で検出した遺構面で、土壤層（第7～9層）上面に対応する。特に第7層・第8層は土壤化が著しく、粘性も高いことから水田土壤層である可能性が考えられる。しかしながら、畦畔など積極的に水田面であったことを示す遺構は検出されなかった。第2面上を覆う第4層は、古墳時代後期の遺物を包含する。第2面では地震の痕跡を検出した。

第3面 包含層（第10～16層）を除去した段階で検出した遺構面で、第17層上面に対応する。第10～16層は弥生時代中期～古墳時代前期の遺物を包含する。第3面では竪穴住居跡、土抗、溝、柱穴を検出した。

(2) 基本層序の形成

基本層序の形成を復元すると以下の通りである。

第1段階 土壤層（第18層）が形成される。

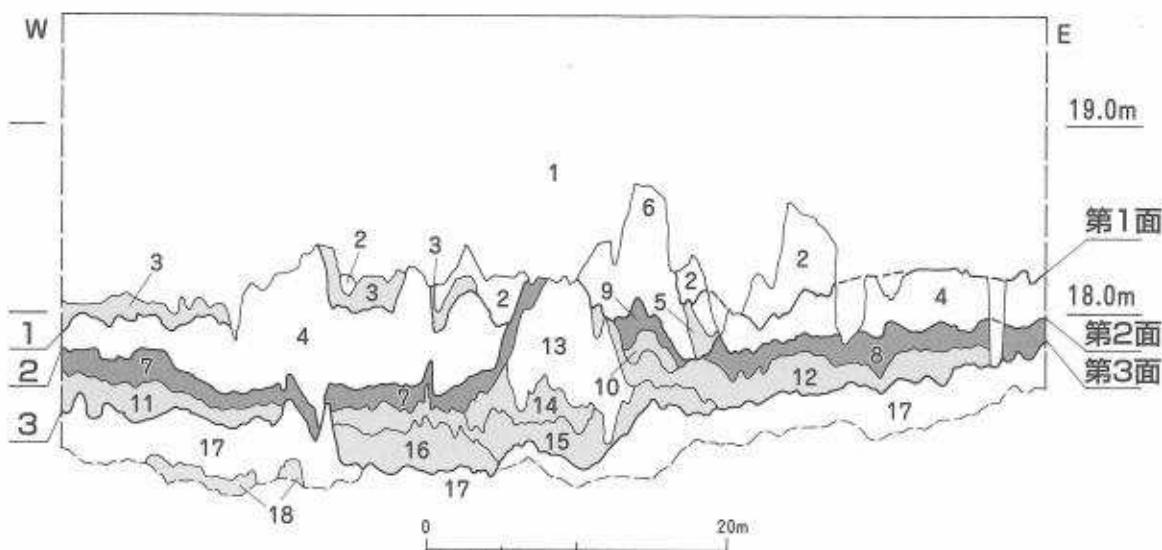
第2段階 洪水起源の堆積物（第17層）が堆積する。比較的淘汰の良い砂粒からなり、調査区全域に認められる。第17層は、南流する住吉川からオーバーフローした洪水流によって運ばれた溢流氾濫起源の堆積物であると考えられる。

第3段階 土壤層（第14～16層）が形成される。前段階に堆積した第17層は、中央付近が両端と比較して低い浅い谷状地形を呈するため、その谷状地形の範囲にのみ認められる。

第4段階 洪水起源の堆積物（第13層）が堆積する。拳大から人頭大の礫を包含する土石流起源の

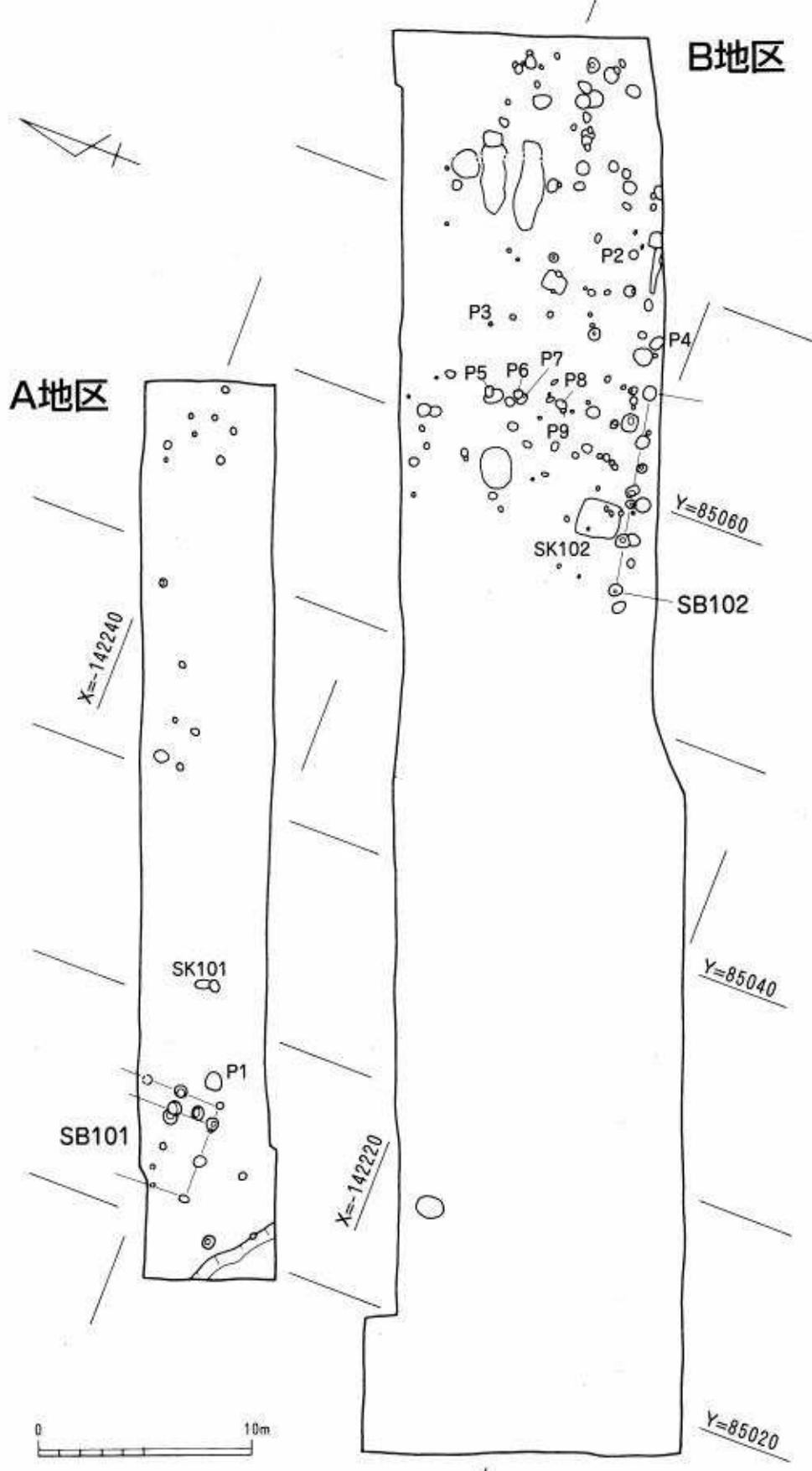
堆積物である。第2段階に形成された谷状地形を埋没させるように堆積していた。この堆積により調査区中央に南北方向の舌状の微高地（ロープ）が形成される。

- 第5段階** 土壌層（第11層・第12層）が形成される。弥生時代中期～終末期の遺物を包含する。土壤化が著しい。
- 第6段階** 洪水起源の堆積物（第10層）が堆積する。第4段階で形成された中央部の微高地の東側でのみ確認され、この堆積により微高地は東側へ拡大する。
- 第7段階** 土壌層（第7～9層）が形成される。古墳時代前期の遺物を包含する。第7層・第8層は土壤化が特に著しく、また粘性も高いことから水田土壌であった可能性が考えられる。
- 第8段階** 洪水起源の堆積物（第6層）が堆積し、微高地はさらに東側へ拡大する。
- 第9段階** 土壌層（第5層）が形成される。
- 第10段階** 洪水起源の堆積物（第4層）が堆積する。古墳時代後期の遺物を包含する。第8段階までに形成された中央部の微高地両端の低い部分が埋没し、調査地全域が平坦化する。
- 第11段階** 土壌層（第3層）が形成される。奈良時代～平安時代前半の遺物を包含する。
- 第12段階** 洪水起源の堆積物（第2層）が堆積する。溢流氾濫起源の堆積物であると考えられる。以後、近年まで堆積と土壤化を繰り返してきたものと考えられるが、建物の基礎のため、調査地では現地表下1.2～1.5mまで破壊されており詳細は不明である。



| | 色 調 | 粒 度 | 備 考 |
|----|-------|--------------------|--------------------|
| 1 | 橙 | シルト混じり細砂～粗砂 | 現地表土・盛土・搅乱土層 |
| 2 | 褐灰 | シルト混じり細砂～粗砂 | 洪水起源の堆積層 |
| 3 | 明褐 | 細砂～粗砂 | 土壌層 |
| 4 | 黒褐 | シルト混じり細砂～粗砂 | 洪水起源の堆積層、上面で第1面を検出 |
| 5 | 明黄褐 | シルト混じり細砂～粗砂 | 土壌層 |
| 6 | 黒褐 | 細砂混じりシルト | 洪水起源の堆積層 |
| 7 | 黒褐 | 粗砂混じりシルト | 土壌層、上面で第2面を検出 |
| 8 | 暗褐 | シルト質細砂～粗砂 | 土壌層、上面で第2面を検出 |
| 9 | 明黄褐 | 細砂～粗砂 | 土壌層、上面で第2面を検出 |
| 10 | 灰黄褐 | シルト質細砂～粗砂 | 洪水起源の堆積層 |
| 11 | 灰黄褐 | シルト質細砂～粗砂 | 土壌層 |
| 12 | 灰黄褐 | シルト質細砂～細礫 | 土壌層 |
| 13 | にぶい黄橙 | 細砂～粗砂（拳大～人頭大の礫混じり） | 洪水（土石流）起源の堆積層 |
| 14 | 灰黄褐 | 粗砂混じりシルト | 土壌層 |
| 15 | 黒褐 | シルト混じり粗砂～細礫 | 土壌層 |
| 16 | 褐灰 | 細砂混じりシルト（細礫を多く含む） | 土壌層 |
| 17 | 褐 | シルト混じり細砂～粗砂 | 洪水起源の堆積層、上面で第3面を検出 |
| 18 | 灰黄褐 | シルト混じり細砂～粗砂 | 土壌層 |

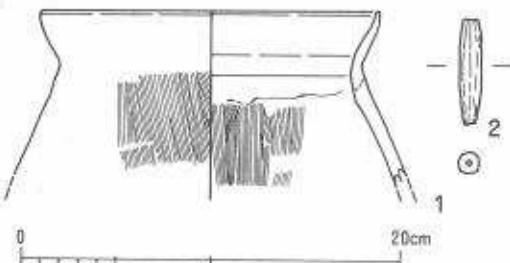
第10図 基本層序



第11図 第1面平面図

第2節 第1面の調査

| | |
|------|---|
| 概要 | A・B両地区で遺構を検出した（第11図）。 |
| A地区 | 検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、柱穴約30基である。遺構は調査区全域で検出されたが、密度は薄い。 |
| B地区 | 検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑7基、溝1条、柱穴約130基である。遺構は調査区東半でのみ検出された。調査区中央から西半分は削平されて存在しない。 |
| 出土土器 | B地区から土師器の壺（1）と土鍤（2）が出土している（第12図）。 1は体部の内・外面とも縦方向のハケ調整で仕上げられている。2は小型の管状土鍤で、重さ7.6gを測る。 |
| 時期 | 出土土器から判断して、奈良時代～平安時代前半と考えられる。 |



第12図 第1面包含層出土土器

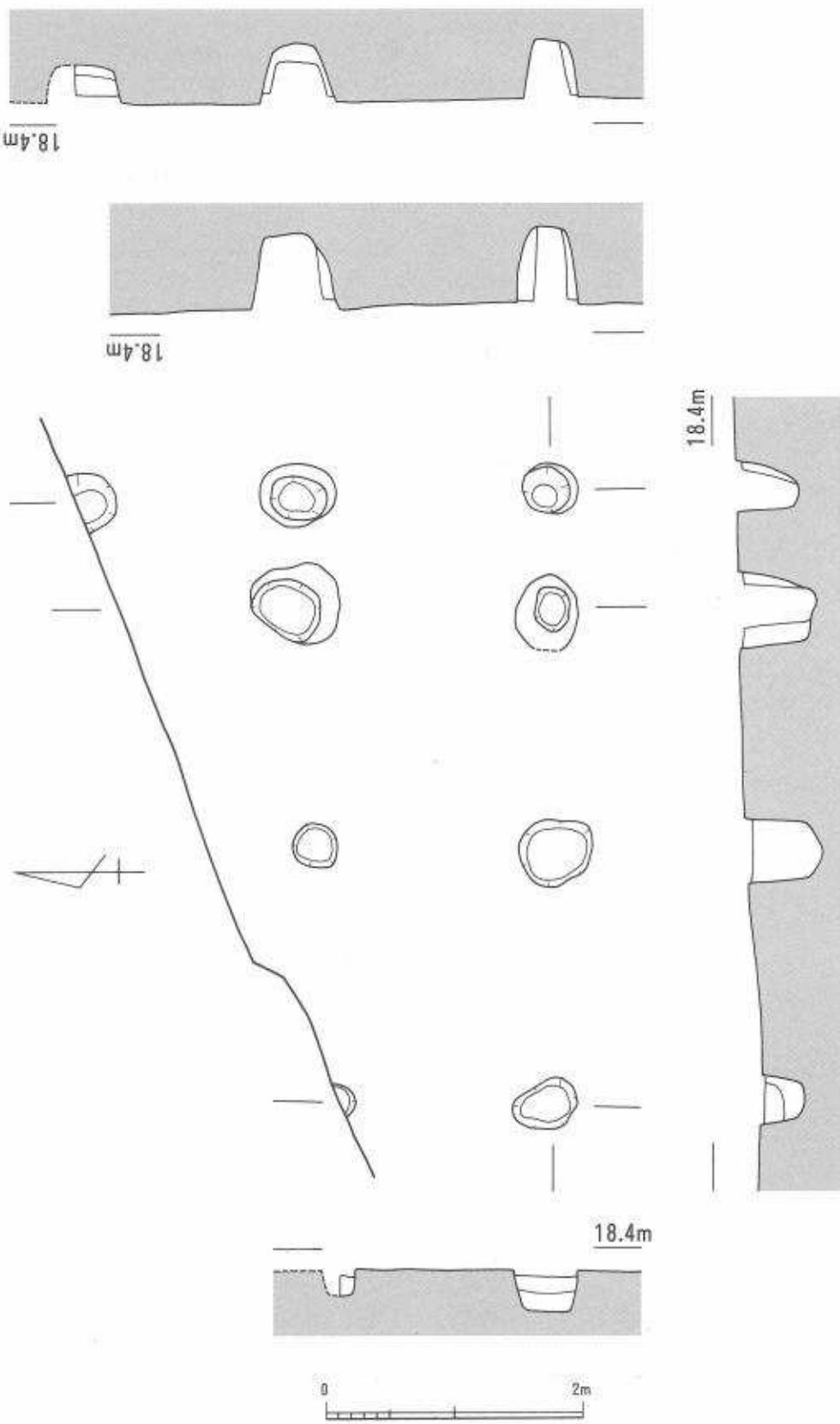
(1) 掘立柱建物跡 (S B101・102)

S B101 (第14図)

| | |
|-------|---|
| 検出状況 | A地区西半に位置する。北側は調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。 |
| 形状・規模 | 主軸は真北を示す。桁行2間（3.5m）以上、梁行2間（3.8m）の総柱建物である。東側に庇が付く。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行1.8m、梁行1.9mである。 |
| 柱穴 | 掘り方の平面形は不整形な円形または橢円形を呈する。直径は30～70cm、検出面からの深さは25～60cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕の直径は30～50cm、深さは50～60cmを測る。柱根は残存していないかった。 |
| 出土遺物 | 柱穴内から須恵器の杯身が出土しているが、小片のため図化できなかった。古墳時代後期のものであるが、下層からの混入遺物であると考える。 |
| 時期 | 埋土の特徴や当遺構面出土土器から判断して、奈良時代～平安時代前半と考えられる。 |



第13図 第1面の調査



第14図 SB101

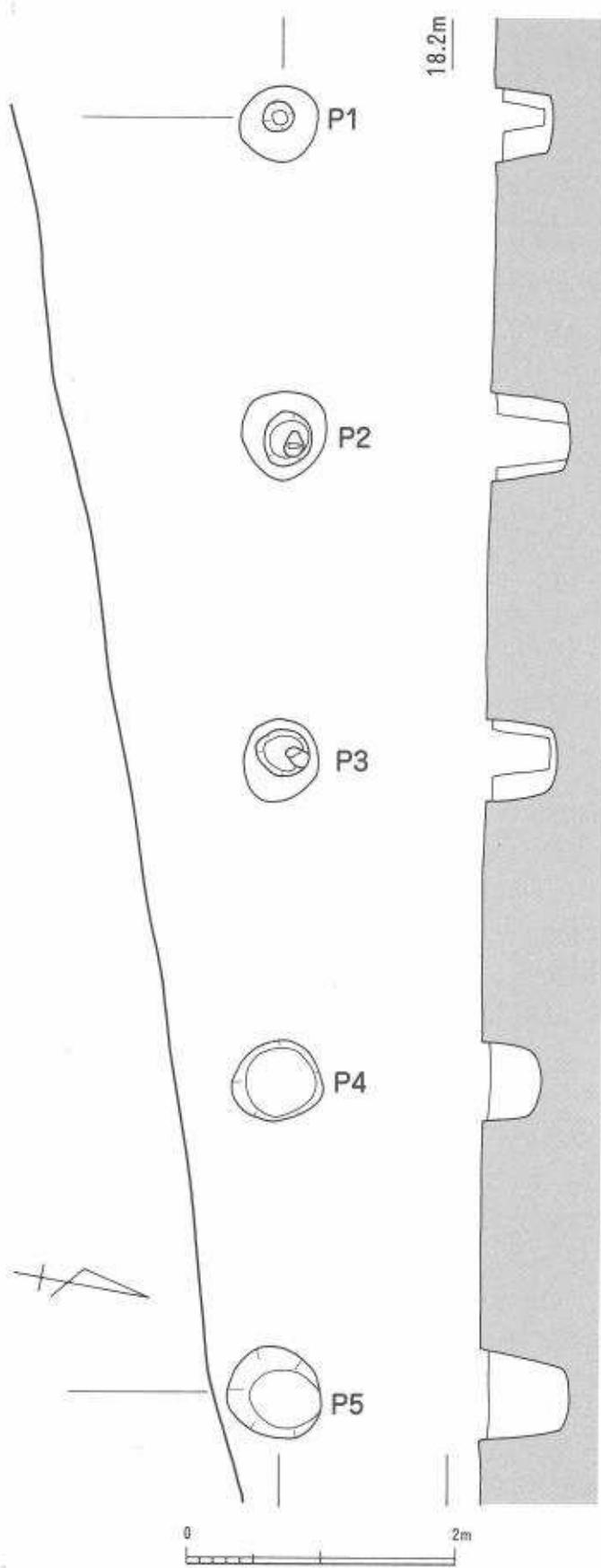
S B 102 (第15図)

検出状況 B地区東半の南端に位置する。南側は調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。

形状・規模 主軸はN79°Eを示す。桁行4間(9.5m)、梁行1間以上に推定される掘立柱建物である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行2.4mである。

柱穴 堀り方の平面形は円形または稍円形を呈する。直径は60~70cm、検出面からの深さは45~70cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕の直径は25~40cm、深さは30~60cmを測る。柱根がP 2とP 3で残存していた。柱根の直径は13~18cm、残存長は26~36cmである。

出土遺物 P 4から須恵器の杯A、土師器の杯・皿・甕が、P 5から須恵器の蓋杯・甕、土師器の杯Aが出土しているが、



第15図 S B 102



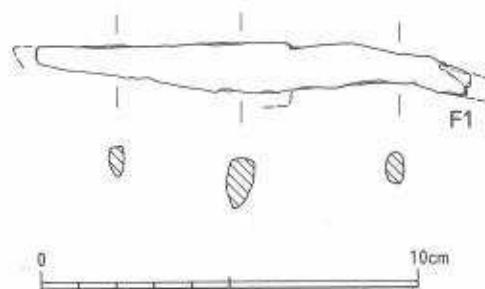
第16図 SB 102P 2



第17図 SB 102P 3

小片のため図化できなかった。須恵器は古墳時代後期のものであるが、下層からの混入遺物と考える。また、P 5 から鉄器（F 1）が出土している（第18図）。F 1 は刀子で、両端は欠損している。残存長で11.5cm、刀部は最大幅1.3cm、刃背0.5cmを測る。鋸彫れによる変形が著しく、茎部はねじれている。

時期 球土の特徴や当遺構面出土土器から判断して、奈良時代～平安時代前半と考えられる。



第18図 SB 102柱穴出土鉄器

(2) 土抗

概要 検出した土抗は8基である。不整形なものが大半で、削平のため残存状況が悪く、概して浅い。以下に図化できる遺物の出土した土抗とその遺物についてのみ報告する。

SK 101

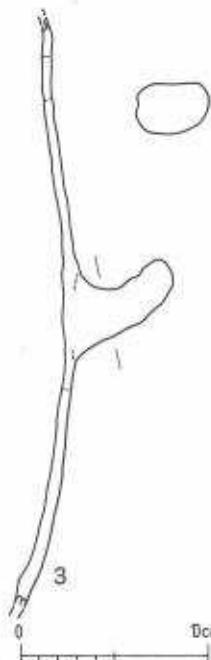
検出状況 A地区中央やや西側に位置する。南端を柱穴に切られる。

形状・規模 平面形は長楕円形を呈する。長軸方向で残存長75cm、その直交方向で50cmを測る。横断面は浅い皿形を呈する。検出面からの深さは最深部で14cmを測る。

埋没状況 黒色シルト混じり細砂から粗砂が堆積していた。炭が若干混じる。

出土遺物 土師器の瓶（3）と須恵器の壺などが出土している（第19図）。3の体部は内外面とも縦方向の板ナデ調整で仕上げられている。牛舌状の把手を持つ。胴部が直線的なことから壺であると判断した。

時期 奈良時代～平安時代前半と考えられる。



第19図 SK 101出土土器

SK 102 (第20図)

検出状況 B地区中央やや東側に位置する。柱穴に切られるが、ほぼ完存する。

形状・規模 平面形は長方形を呈する。長軸方向で2.0m、その直交方向で1.7mを測る。横断面は逆台形を呈する。検出面からの深さは最深部で15cmを測る。

埋没状況 上層に黒褐色シルト混じり細砂(炭混じり)、下層ににぶい黄褐色シルト混じり粗砂が堆積していた。また、下層直上で遺物が出土している。杯については重ねて伏せられた状態で検出されている。

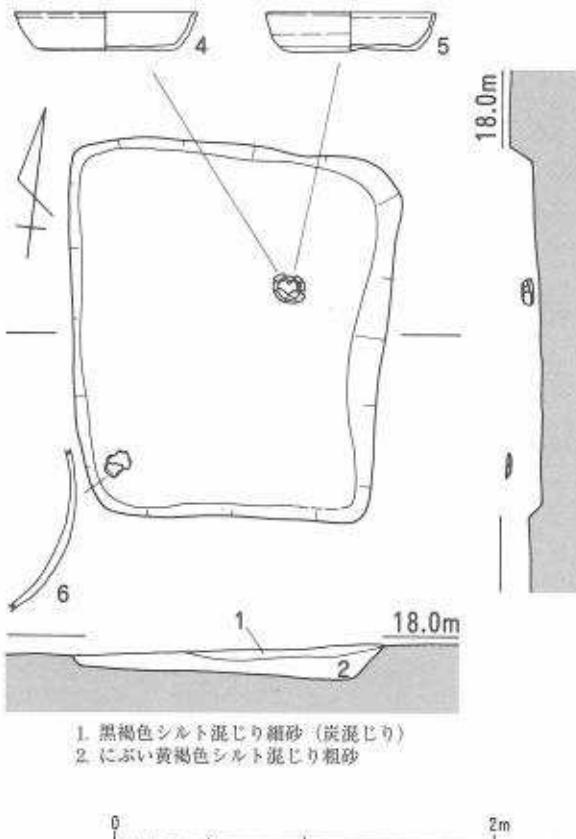
出土遺物 土器と鉄器が出土している。(第21・22図)。

土器 杯(4・5)は形態・法量・調整のいずれもほぼ同じである。口縁端部は強くナデて外面がやや窪む。甕(6)は外面をハケ調整、内面を板ナデ調整で仕上げられている。

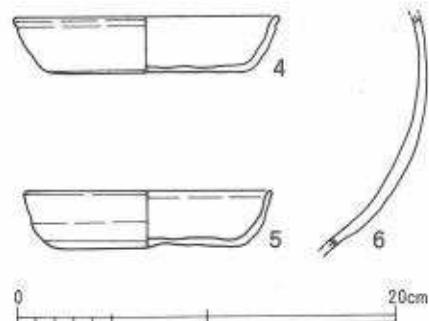
鉄器 鉄器(F2)は、極度の鎧膨れのため基部が中空になっており、ベンシリキヤップ状を呈する。しかしながら、断面が二等辺三角形を呈することと、F1と同様の大きさであることから、刀子である可能性が考えられる。

時期 出土土器から判断して奈良時代のものと考えられる。

小結 調査区東隣の第11次調査でも同様に、土坑内から土師器の杯が重ねて伏せられた状態で出土している。掘立柱建物跡のすぐ脇からの出土で、建物の地鎮遺構であると判断されており、当遺構も同様の性格であると考える。



第20図 SK 102



第21図 SK 102出土土器



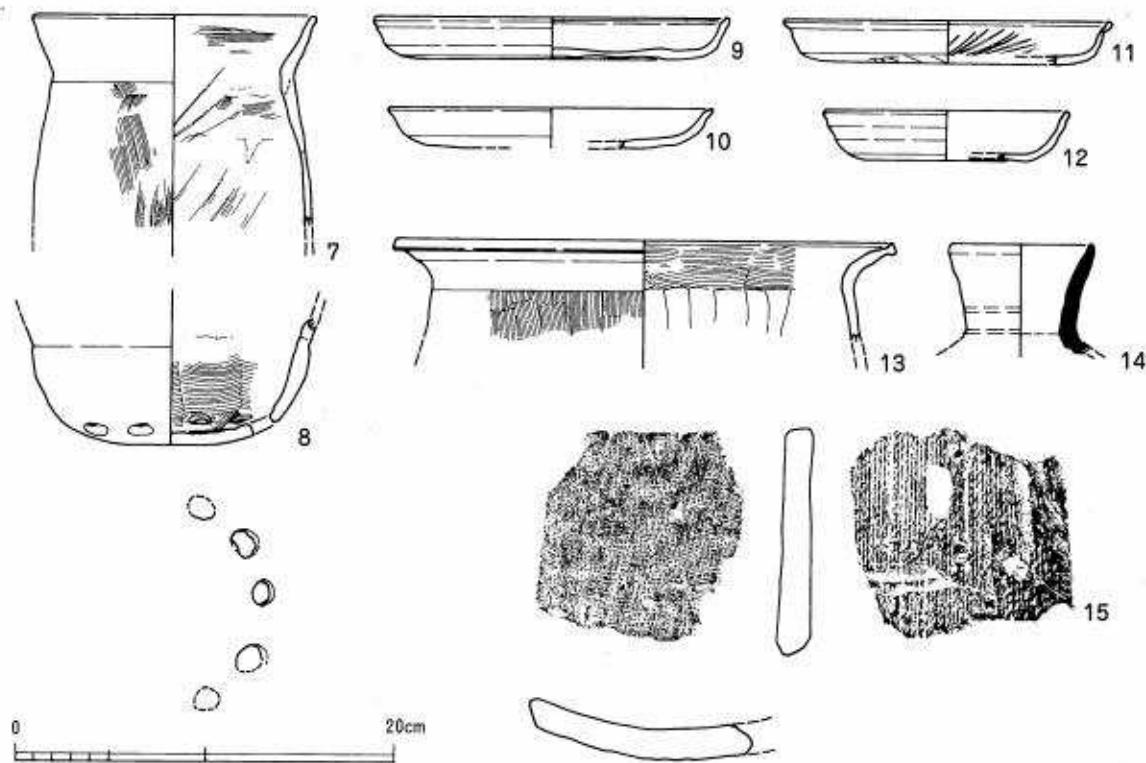
第22図 SK 102出土鉄器

(3) 柱穴

概要

A地区全域で約30基、B地区東半で約130基検出した。建物を構成する柱穴であると考えられるが、復元できたのはSB101・102の2棟のみである。平面形は不整形な円形が大半で、直径は20~60cmである。埋土は主に褐灰色と灰黄褐色を呈する。以下に図化できる遺物の出土した柱穴とその遺物についてのみ報告する（第23図）。

- P 1 A地区西半に位置する。直径80cmを測り、埋土は黒褐色を呈する。
土師器の長胴甕（7）が出土している。内外面ともハケ調整で仕上げてある。
- P 2 B地区西半の南側に位置する。直径45cmを測り、埋土は褐灰色を呈する。
土師器の皿（11）が出土している。外面の底部にはヘラ削りが、内面には1条の放射状の暗文が認められる。奈良時代のものである。
- P 3 B地区西半に位置する。直径25cmを測り、埋土は褐灰色を呈する。
土師器の甕（8）が出土している。底部に5つの穿孔が認められる。復元すると10程度穿孔されていたものと推定される。外面は被熱およびススの付着のため、調整は不明である。内面はハケ調整により仕上げられている。
- P 4 B地区西半の南端に位置する。直径50cmを測り、埋土は灰黄褐色を呈する。
平瓦（15）が出土している。凹面に布目痕、凸面に繩目痕が残る。焼成は悪い。
- P 5 B地区西半に位置する。柱穴を切る。直径50cmを測り、埋土は褐灰色を呈する。
須恵器の壺（14）の口頸部が出土している。
- P 6 B地区西半中央に位置する。P 7を切る。直径40cmを測り、埋土は灰黄褐色を呈する。
土師器の皿（10）が出土している。内外面とも回転ナデで仕上げられている。
- P 7 B地区西半中央に位置する。P 6に切られる。直径40cmを測る。埋土は灰黄褐色を呈する。

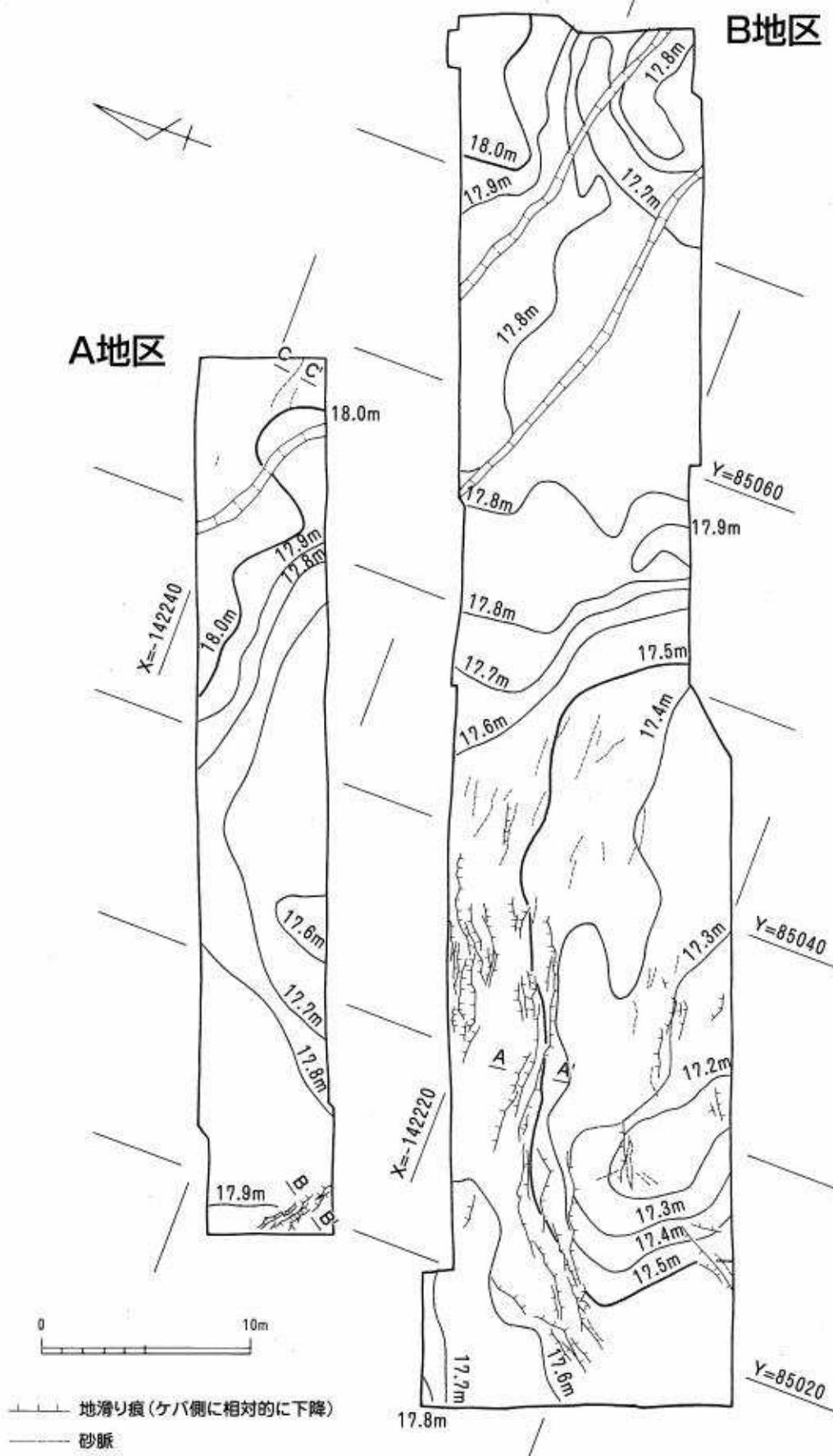


第23図 第1面柱穴出土土器

| | |
|-----|---|
| | 土師器の甕（13）が出土している。口縁端部上端をつまみあげ、外側に面をなす。体部外面と口頸部内面はハケ調整、体部内面は板ナデにより仕上げられている。 |
| P 8 | B地区西半中央に位置する。P 9に切られる。直径50cmを測る。埋土は褐灰色を呈する。土師器の杯（12）が出土している。内外面ともナデにより仕上げられている。 |
| P 9 | B地区西半中央に位置する。P 8を切る。直径25cmを測る。埋土は褐灰色を呈する。土師器の皿（9）が出土している。内外面とも回転ナデで仕上げる。底部外面に指頭圧痕が残る。 |
| 時期 | 上記の出土遺物から、概ね奈良時代～平安時代前半と考える。 |

(4) 小結

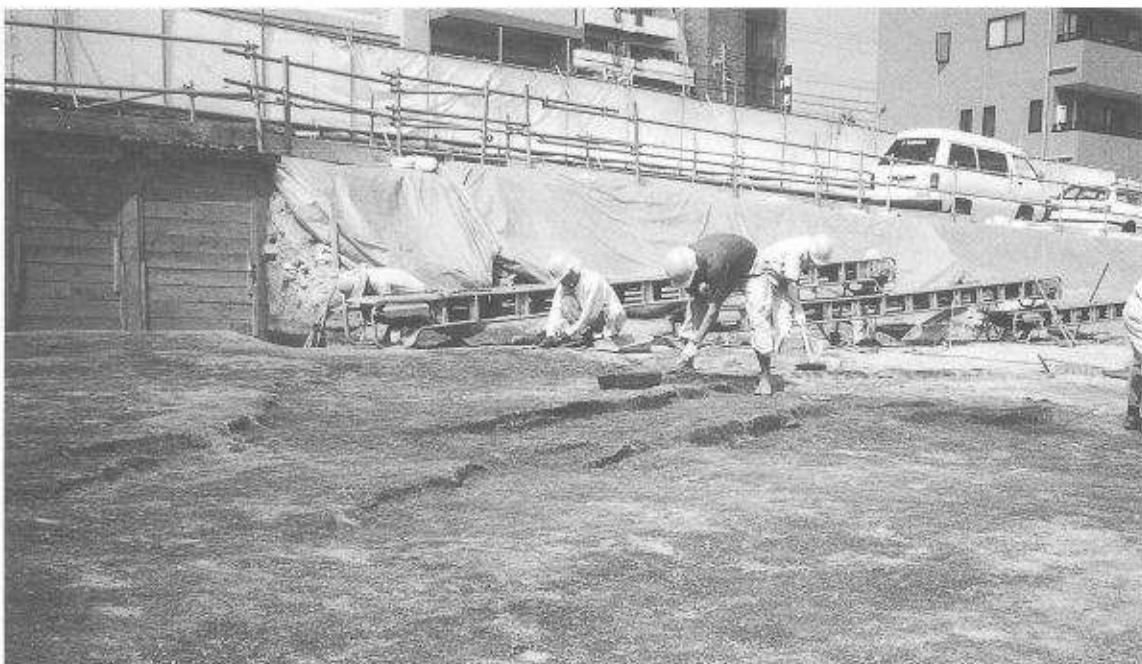
| | |
|--------|---|
| 遺構面 | 隣接する第11次調査では、平安時代前期末と同後期の2面で掘立柱建物跡を検出してい る。しかしながら、今回の調査では、搅乱による削平のため1面でしか平安時代の遺構は 検出されなかった。本来は複数面存在したものと考えられる。 |
| 掘立柱建物跡 | 第1面では奈良時代～平安時代前半の掘立柱建物跡2棟を検出した。なかでも、住吉宮 町遺跡の調査で初めて検出された庇付き建物（S B101）は、全体の規模は未確定ではあるが、主軸を磁北に向か、集落の中でも中心的な建物であった可能性が考えられる。また、 同じく全体の規模は未確定であるが、S B102についても桁行が4間以上の大型の建物に なるものと考えられる。 |
| 地鎮遺構 | 杯を2個体重ねて伏せた状況で検出された長方形土抗（S K102）は、第11次調査でも 同様の土抗が検出されており、建物に伴う地鎮遺構と考えられている。しかしながら、今 回検出したものは、土抗の平面形が長方形であること、炭が混じること、さらに刀子状の 鉄製品が出土することから墓である可能性も考えられる。 |
| 建物の時期 | 柱穴から鉄器以外図化できる遺物は出土していないが、柱穴埋土の特徴や検出面の出土 土器から、掘立柱建物跡は奈良時代～平安時代前半のものと判断した。しかしながら、S B102の主軸方向（N79°E）は、隣接する第11次調査のS B01-1（N82°E）・S B01-2（N 79°E）と同一方向を指向することから、それらの柱穴出土遺物から判断される平安時代 後期にまで時期の下る可能性も考えられる。 |



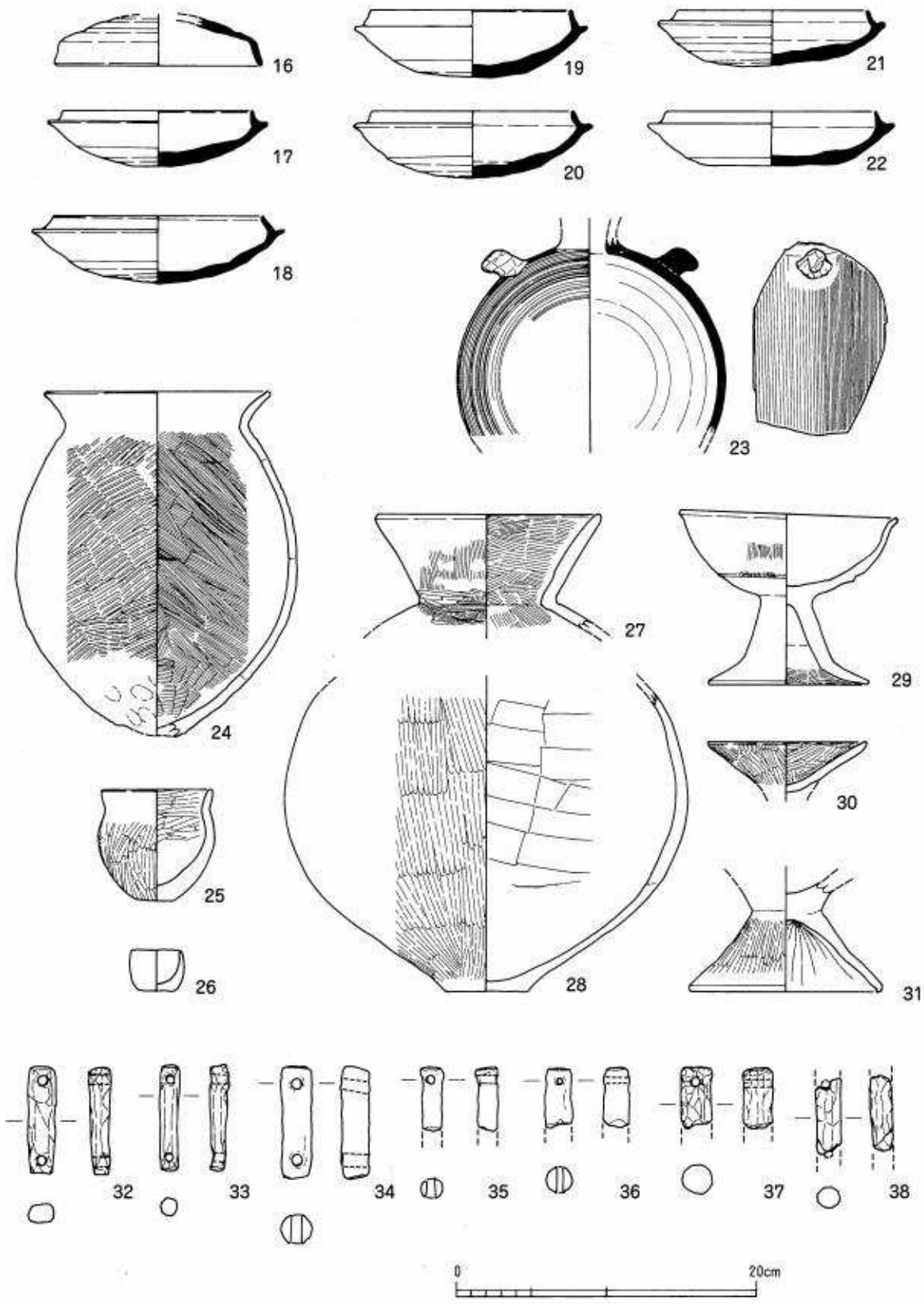
第24図 第2面平面図

第3節 第2面の調査

- 概要** 洪水起源の堆積層を除去した段階で検出された遺構面である。A・B両地区で明確な遺構は検出されなかったが、当面では多数の地震の痕跡を検出した（第24図）。
- 出土土器** A・B両地区で第2面を覆う洪水砂から主に古墳時代後期の土器が出土している。
- A 地区** 須恵器、弥生土器、土師器、および土製品が出土している（第26図）。
- 須恵器** 蓋杯と提瓶が出土している。杯蓋（16）の天井部は尖り気味で、口縁部はやや開きながら端部に至る。天井部の回転ヘラ削りの範囲は約1/2である。杯身はいずれもたちあがりが短く内傾するものである。底部には尖り気味のもの（17-20）と扁平なもの（21・22）が認められる。底部の回転ヘラ削りの範囲は1/4-1/2である。提瓶（23）の体部は扁平な球体で、体部全面にカキ目調整を施されている。体部側面には鍵状の把手が付く。
- 弥生土器** 壺、壺、高杯、器台、脚付き鉢が出土している。壺（24）は外面をタタキ整形、内面をハケ調整により仕上げられている。V様式系の壺に分類されるものである。小型の壺（25）は平底で、器壁は厚い。内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。壺は直線的に開く口縁部（27）と平底で球形の体部（28）を図化したが、別個体である。27の口縁部は内外面ともにハケ調整により仕上げられている。28の体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面を板ナデで仕上げられている。高杯（29）は椀形の杯部を持つ古墳時代後期のものである。器台（30）は受け部のみで、内外面をヘラミガキで丁寧に仕上げられている。脚付き鉢（31）は脚部のみで、外面はヘラミガキで仕上げられている。
- 土製品** ミニチュア土器と土錐が出土している。ミニチュア土器（26）は手づくね成形で、器高2.8cmである。土錐（32-38）は、いわゆる両端穿孔棒状土錐と呼称されるもので、紐を通すため両端を穿孔する。完存するもので、長さ7.1-7.5cm、重さ13.7-34.4gを測る。両端穿孔棒状土錐は瀬戸内を中心に分布し、主に海での漁労に使用される。弥生時代後期から鎌倉時代までの遺跡で出土する。

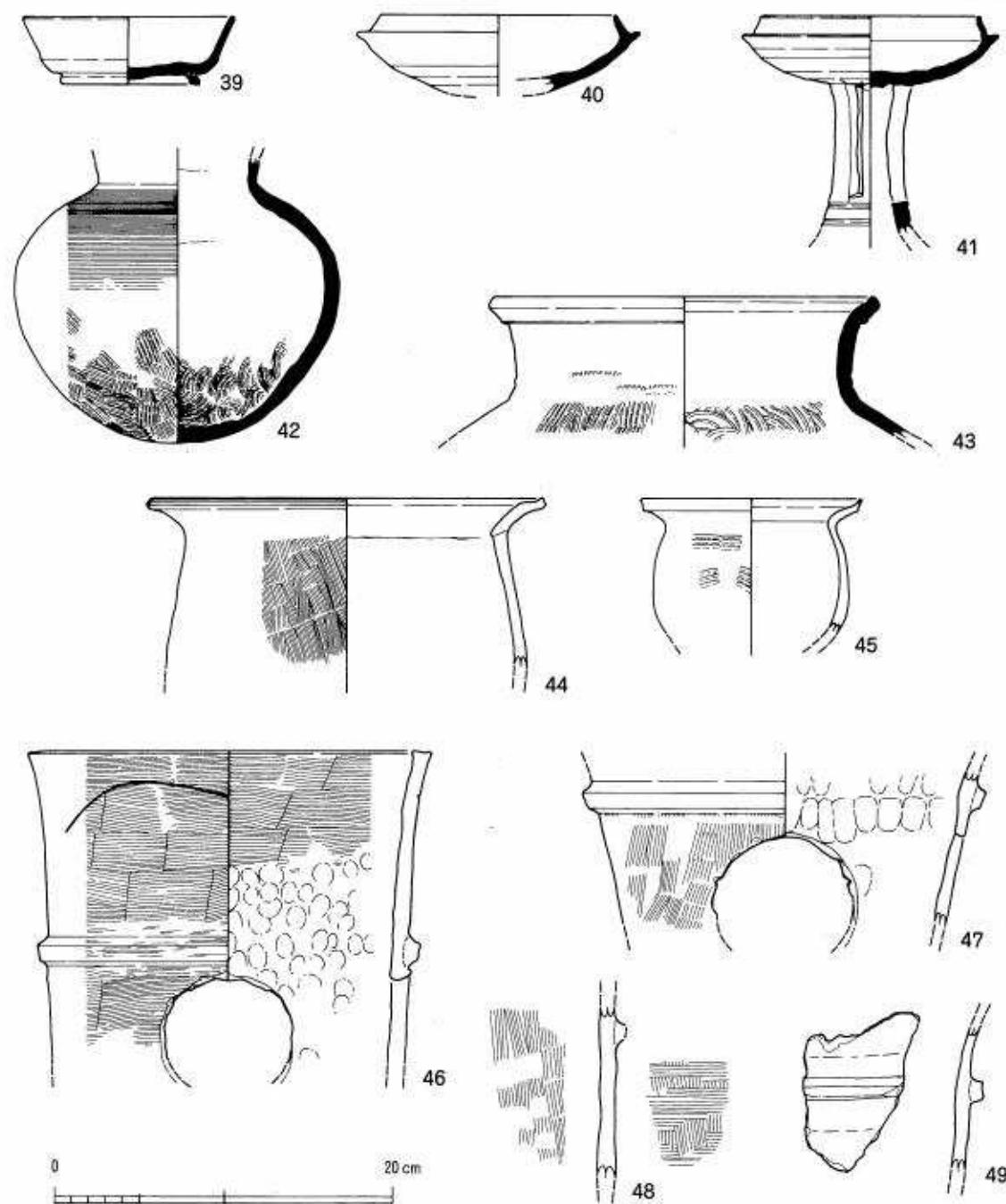


第25図 第2面の調査

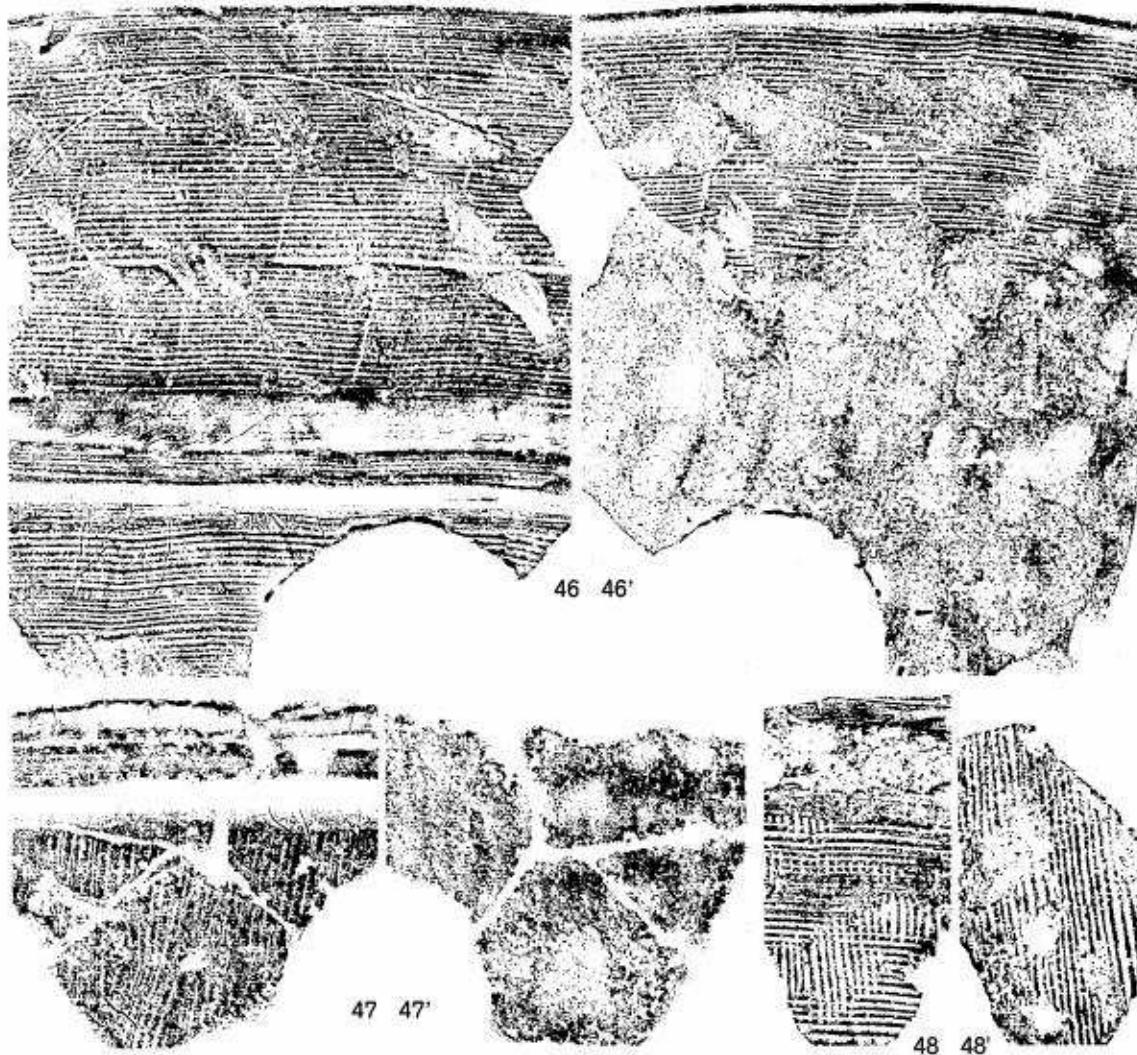


第26図 A地区第2面包含層出土土器

- B 地区 須恵器、土師器、埴輪が出土している（第27図）。
- 須恵器 杯身、蓋杯、高杯、壺、甕が出土している。杯身（39）は奈良時代のものであるが、他は古墳時代後期のものである。蓋杯の杯身（40）、高杯（41）とともにたちあがりは短く内傾する。壺（42）は広口壺で、肩部から体部上半にかけてカキ目がめぐる。甕（43）は口縁端部を断面方形に肥厚させた口縁を持つ。
- 弥生土器・土師器 甕を2個体図化した。45は弥生土器で、受け口状の口縁を持つ。44は土師器で、外面をハケ調整で仕上げられている。
- 埴輪 円筒埴輪が出土している（第28図）。46は須恵質で、口径21.9cmに復元できる。直立気味の口縁部の端部は面をなす。最上段のタガ直下に円形の透かし穴を持つ。外面および内面上部は、B種ヨコハケによる2次調整が認められる。ハケ調整は、タガおよび口縁端



第27図 B地区第2面包含層出土土器



第28図 増輪の表面調整（拓本）

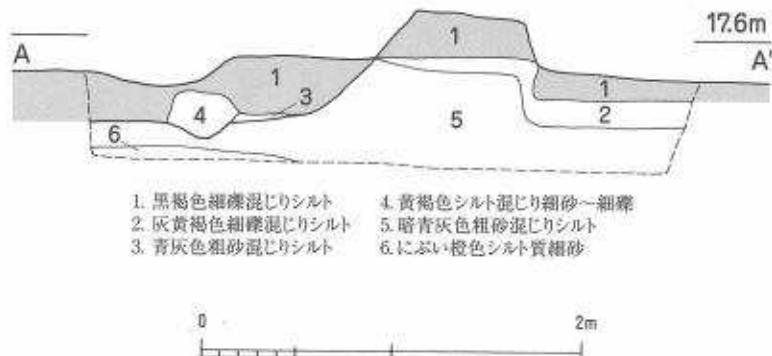
部にも施す。最上段には弧状の線刻が認められる。47は口縁部が大きく上方へ開くタイプで、円形の透かし穴を持つ。外面はタテハケによる調整が認められる。内面はタガの後ろを中心ユビオサエ痕が残る。48は体部の破片で、外面はタテハケののち、C種ヨコハケによる2次調整が認められる。内面はタテハケとユビオサエ痕が認められる。49も体部の破片で、外面はヨコナデにより仕上げられている。タガは比較的突出する。

時期 第2面を埋没させた洪水砂に含まれる出土土器、特に須恵器から判断して、第2面は古墳時代後期の地表面であると判断する。

(1) 地震痕跡

検出した地震の痕跡は、液状化現象に伴う砂脈と地滑りによる段差である。

砂脈 砂脈は、地震に伴う液状化現象によって噴砂が上昇する際に通り道となった割れ目である。A地区では調査区西端で、B地区では調査区西半で集中して検出された。検出した方位は、A地区では北西—南東方向、B地区では主に東西方向を指向する。砂脈の検出面での幅は1~2cmである。砂脈内には中粒砂~粗粒砂が詰まっていた。



第29図 地滑り痕断面

今回砂脈を第2面で検出したが、厳密には、砂脈は第1面でも一部認められた。しかしながら、第1面では非常に部分的で、また検出が困難であったこともあり、基本的には第2面で検出した。

地滑り痕 地震に伴って生じた地盤の食い違いである。近くに崖や急斜面がある場合、これらに沿って重力方向に滑り落ちる形で正断層が生じ、「地滑り」が起こる。調査区西半を中心に列状に段差として検出された。

検出した方位は、A地区では北西—南東方向、B地区では調査区中央近くのものは東西方向、調査区西端のものは北東—南西方向を指向する。検出した範囲では、最長約9m、段差の比高差は最大約30cmを測る(第29図)。

地震の時期 砂脈は、平安時代前半の遺構面(第10図第4層上面)にまで達している。これらの砂脈や地滑り痕を通商産業省技術院地質調査所の寒川旭氏に現地で観察していただいた結果、慶長元(1596)年に今日の京阪神地域を中心に大きな被害をもたらした慶長伏見地震に伴うものと御教示を得た。

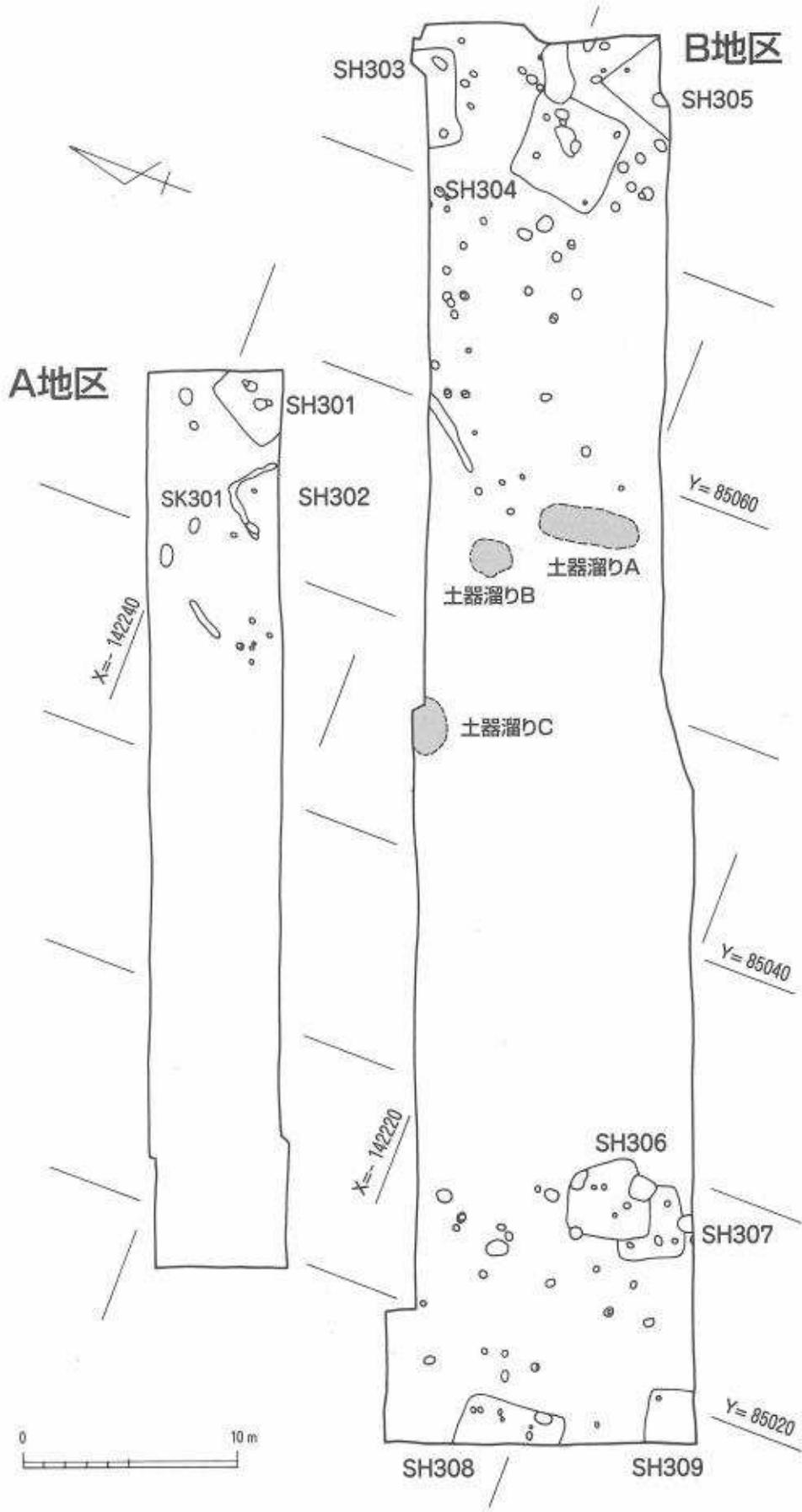
(2) 小結

洪水砂 第2面は前述のように古墳時代後期の洪水砂によって埋没している。この洪水砂は、住吉宮町遺跡全域で認められており、同遺跡の古墳群をほぼ完全に埋没させている。今回の調査で洪水砂から埴輪などの遺物が出土しているが、国道2号を挟んだ北側の同遺跡第1・2・4次調査で検出された古墳群が供給源である可能性が大いに考えられる。

第2面 また、第2面を構成する土壤層(第10図第7・8層)は特に土壤化が著しく、粘性も高い。更に、周辺の調査(住吉宮町遺跡第1・2・4・11次調査、第6・7図)で検出された同時期に埋没した遺構面と比較して調査地は相対的に低い(0.2~2.0m)。したがって、第2面は耕作地であった可能性が高いものと考えられる。しかしながら、畦畔、水路などを積極的に支持する遺構は検出されなかった。



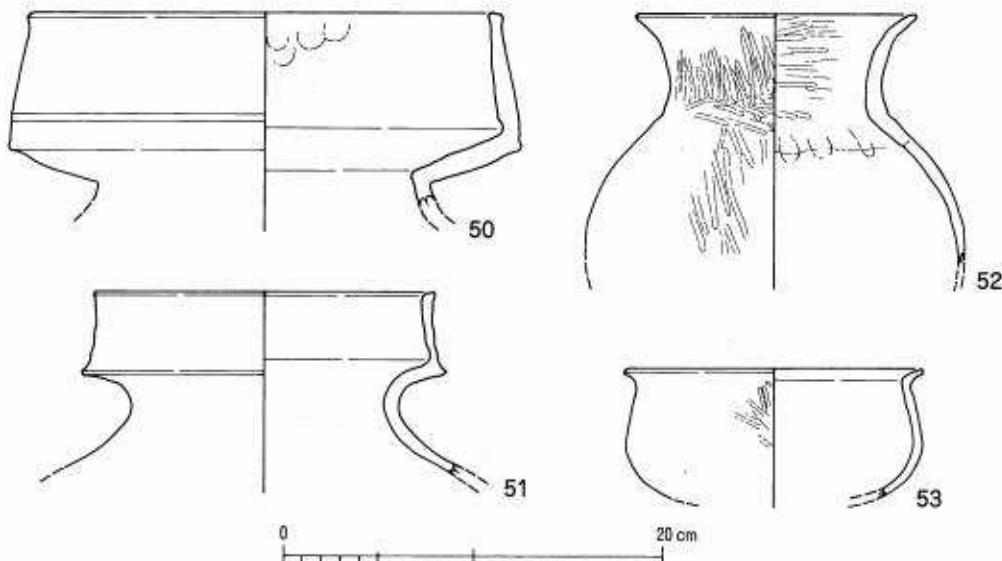
第30図 寒川先生による現地指導



第31図 第3面平面図

第4節 第3面の調査

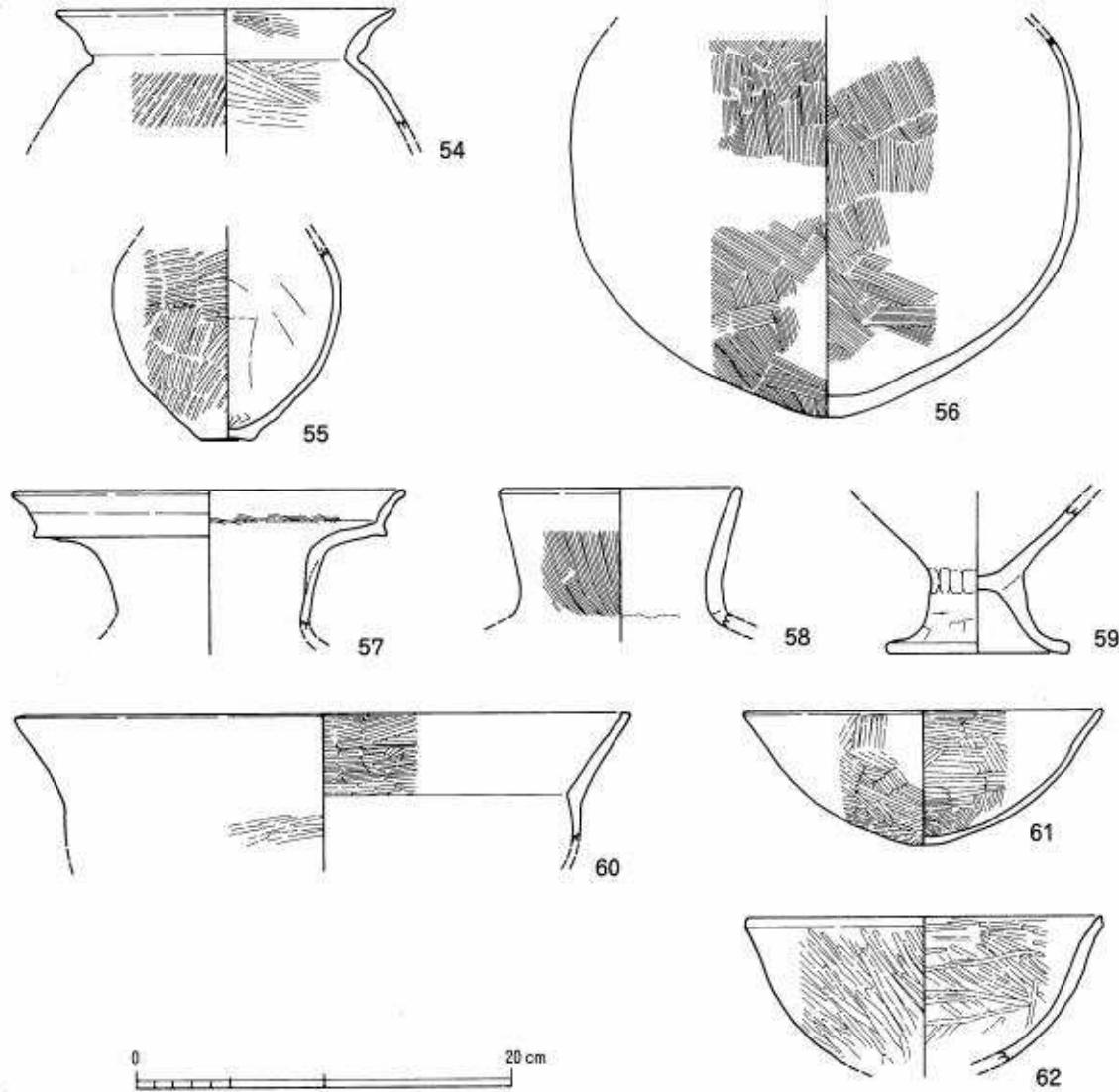
- 概要** A・B両地区で遺構を検出した（第31図）。
- A地区** 検出した遺構は、竪穴住居跡2棟、土坑3基、柱穴約10基である。遺構は調査区東半のみ検出された。
- B地区** 検出した遺構は、竪穴住居跡7棟、土坑9基、溝1条、柱穴約60基、土器溜まり3箇所である。遺構は主に調査区の両端で検出された。
- 出土土器** A・B両地区で第3面検出時に土器が出土している。
- A地区** 壺と鉢が出土している（第32図）。壺には、二重口縁壺（50・51）と広口壺（52）がある。50は大型の二重口縁壺で、いったん大きく開いたのち再び内傾する口縁部を持つ。胎土は、いわゆるチョコレート色で、角閃石を多く含む。讃岐産に特徴的な胎土である。土器棺に使用されることが多い個体である。51もいったん外反したのち再び直立する口縁部を持つ。52は内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。鉢（53）は、中型の深鉢で、胴の張った体部と短く外反する口縁を持つ。外面はヘラミガキで仕上げられている。



第32図 A地区第3面包含層出土土器

- B地区** 壺、壺、台付鉢、鉢が出土している（第33図）。大型の壺（54）は口縁部が肥厚し、端部をわずかにつまみあげるように仕上げられている。中型の壺（55）は平底で、外面はタタキ整形で仕上げられている。二重口縁壺（57）の口縁部はいったん強く外反したのち、小さく外反する。直口壺（58）は頸部のみで、外面はハケ調整で仕上げられている。球形の体部と尖り気味の底部を持つ壺（56）は内外面とも細かいハケ調整で丁寧に仕上げられている。台付鉢（59）の脚部と杯部の接合部分にはエビオサエ痕が明確に残る。鉢には、大型のもの（60）と中型のもの（61・62）があり、いずれの内外面もヘラ磨きにより仕上げられている。62は61同様の底部は丸底を呈するものと考えられる。

時期 出土遺物から判断して、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。



第33図 B地区第3面包含層出土土器

(1) 土器溜まり

B地区の調査区中央で土器溜まりを3箇所検出した(第31図)。第3面を検出したベース層(第10図17層)は、調査区中央が両端と比較して低く、谷状を呈する。したがって、第3面ベース層が埋没するのに、調査区中央でより厚く堆積した結果、土器溜まりが調査区中央部でのみ形成されたものと考えられる。

検出した土器溜まりは、東から土器溜まりA、同B、同Cと呼称する。以下に出土遺物を中心報告する。

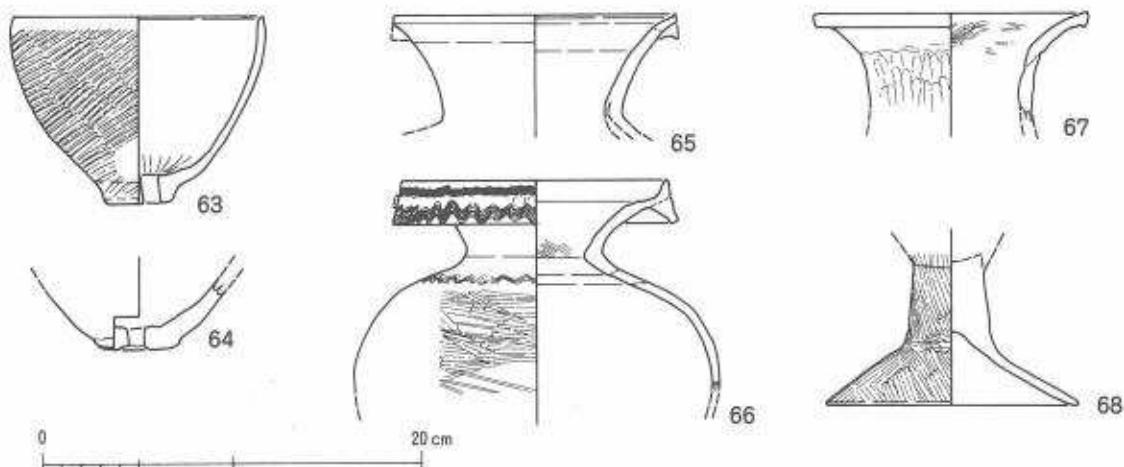
土器溜まりA 約5×2mの平面形が長楕円形を呈する範囲で認められた(第34図)。鉢、壺、高杯が出土している(第35図)。

出土土器 鉢(63・64)はともに有孔鉢である。63は底部に径1cmの穿孔が施され、外面はタタキ整形で仕上げられている。64は上半が不明であるため、甕である可能性もある。壺はいずれも広口壺であるが、口縁端部を拡張するものと(65・66)とそうでないもの(67)がある。65は口縁端部に下方に拡張した痕跡を残す。66は口縁端部を上下に拡張し、拡張した

端面に2列の波状文を巡らせる。また、2個1単位の円形浮文を貼り付けた痕跡が残る。体部外面はヘラミガキにより仕上げられており、肩部にも波状文を1列巡らせる。67は筒状の頸部と外反する口縁部を持つ。内外面ともヘラミガキにより仕上げられる。高杯(68)の脚柱部から脚部にかけての外面は、細かいヘラミガキによって仕上げられる。



第34図 土器溜まりA 検出状況



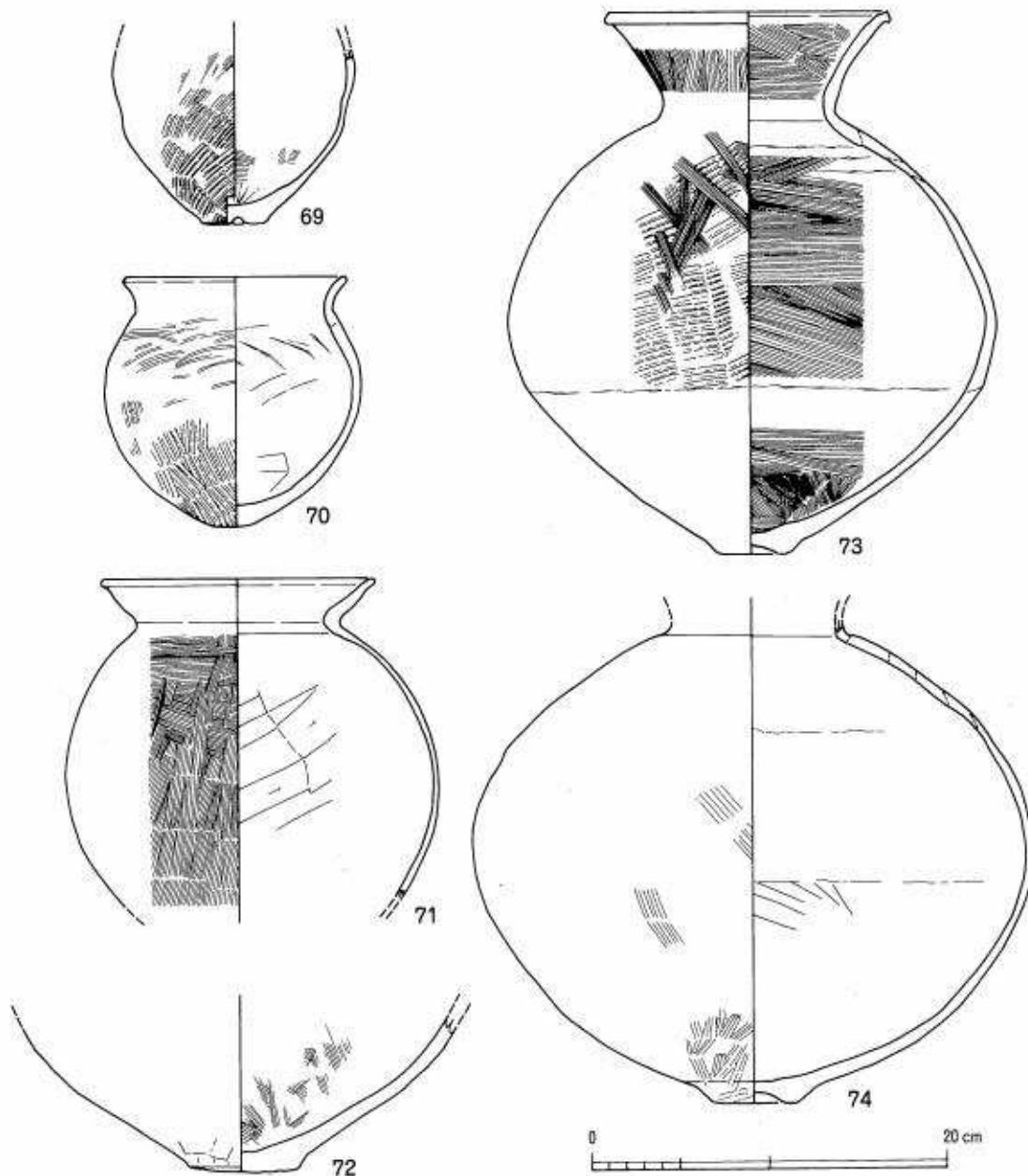
第35図 土器溜まりA 出土土器

土器溜まりB 直径約2mの平面形が不整形な円形を呈する範囲で認められた(第36図)。甕、壺が出士している(第37図)。

出土土器 甕(69~71)は3個体出土している。V様式系の甕には底部が平底のもの(69)と尖り気味のもの(70)がある。布留式系の甕(71)は、内湾気味に立ち上がる口縁部と球形の体部を持つ。外面は細かいハケ調整により仕上げられている。口縁端部が明確に肥厚しな



第36図 土器溜まりB 検出状況



第37図 土器溜まりB出土土器

いことから、より古い様相を呈するものと考えられる。壺(72~74)はいずれも広口壺で、胴部中位が強く張った扁球形の体部と、小さな平底を持つ。73は二分割成形で、外反した口縁部の端部は外側に面をなす。外面はタタキ整形のちハケ調整で、内面はハケ調整で仕上げられる。74は輪高台風の小さな底部を持つ。

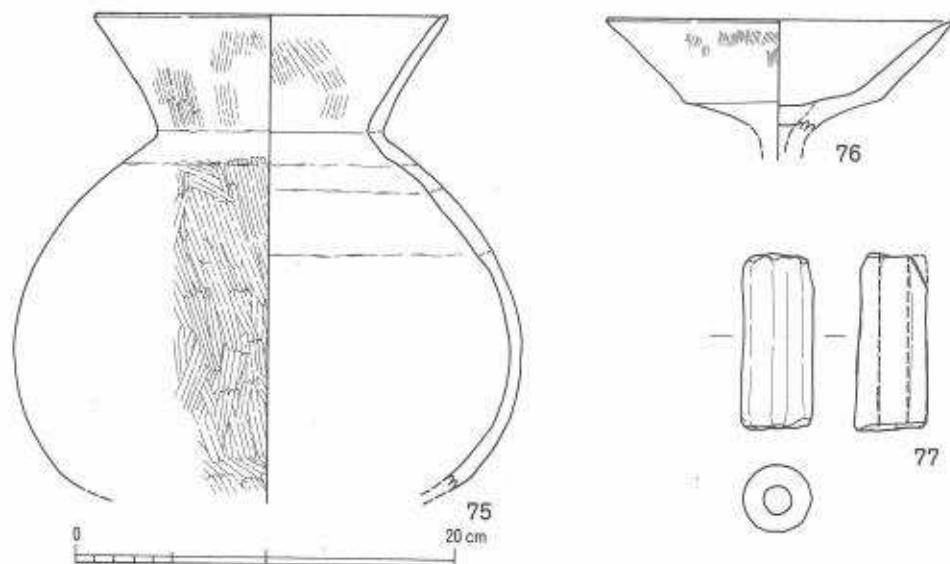
土器溜まりC 東西方向が約3m、南北方向が検出長で1.5mの範囲で認められた(第38図)。北側は調査区外に広がる。壺、高杯、土錐が出土している(第39図)。

出土土器 広口壺(75)は、扁球形の体部と直線的に開く口縁部を持つ。内外面はヘラミガキにより丁寧に仕上げられている。高杯(76)は杯部のみで、外面にはハケ調整の痕跡が認められる。大型の管状土錐(77)は、径1.5cmの孔があけられている。重さは122.1gを測る。

時期 出土遺物から判断して、弥生時代終末期~古墳時代前期と考えられる。



第38図 土器溜まりC検出状況



第39図 土器溜まりC出土土器

(2) 壺穴住居跡 (SH301~309)

SH301 (第40図)

検出状況 A地区南東隅に位置する。東半分は調査区外に延びる。1辺を完全に検出できたのは、西辺のみである。

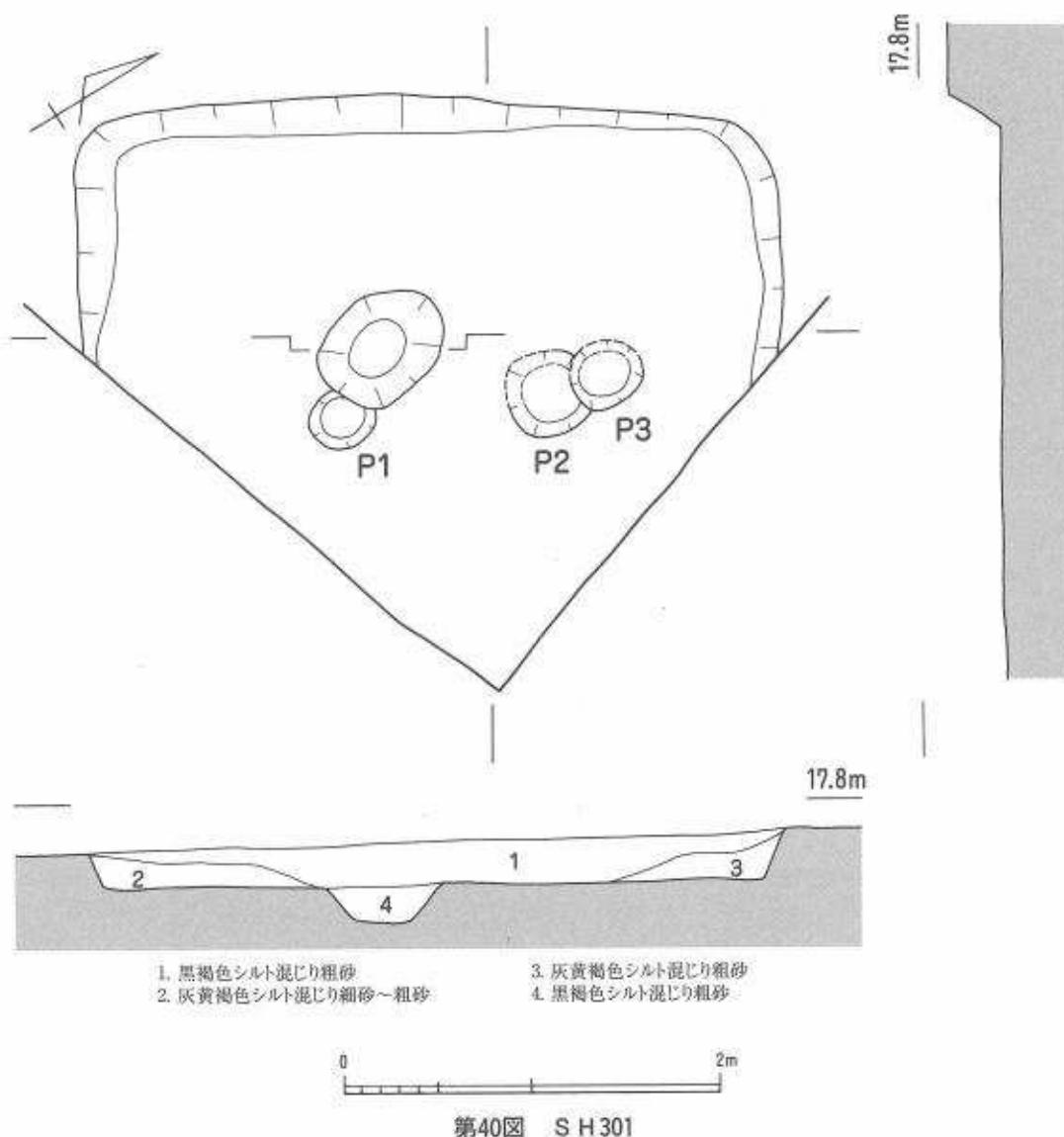
形状・規模 平面形は方形を呈するものと考えられる。方位は西辺でN30°Eを示す。

規模は、西辺で3.8m、東西方向で残存長3.1mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で28cmを測る。床面の標高は17.4m前後である。検出した範囲での床面積は約8.6m²である。

埋没状況 上層に黒褐色シルト混じり粗砂、下層に灰黄褐色シルト混じり細砂～粗砂が堆積していた。下層は自然に埋没したものと考えられるが、上層については白石や拳大の礫が放り込まれたような状況で検出されていることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

屋内施設 土抗と柱穴を検出した。

土坑 床面の中央やや西側で検出された。P1を切る。平面形は橢円形を呈する。規模は主軸方向で70cm、その直交方向で55cmを測る。横断面は皿形を呈し、床面からの深さは最深部で24cmを測る。埋土には黒褐色シルト粗砂が堆積していた。

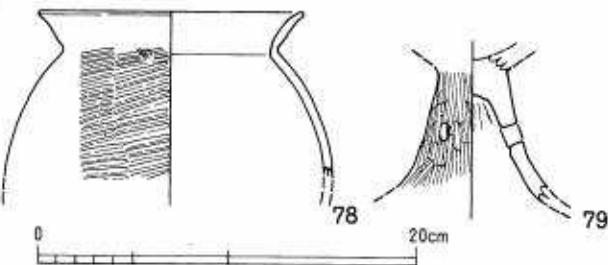


第40図 SH 301

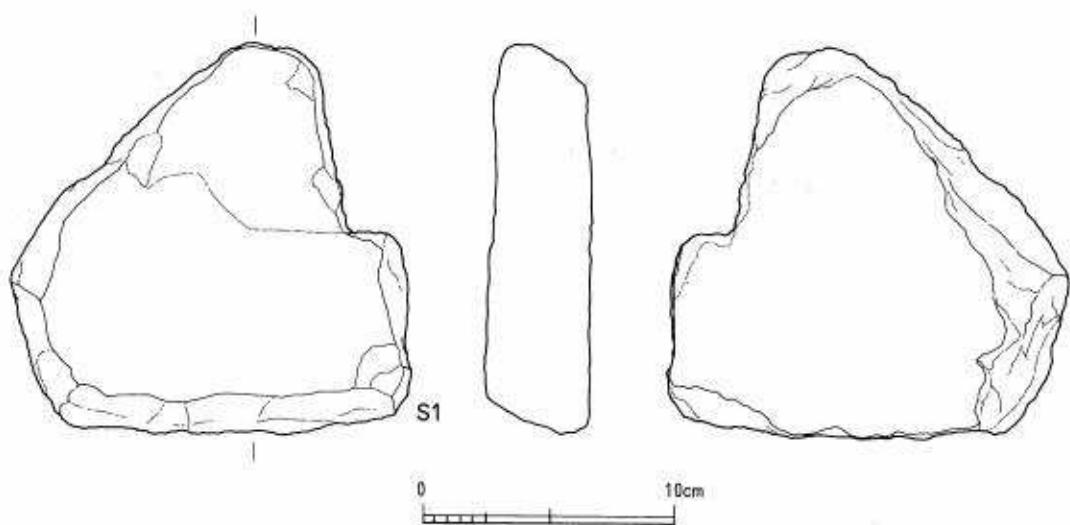


第41図 SH 301の調査

- 柱穴** 3基検出した。主柱穴になる可能性が考えられる。掘り方の径は40cm前後で、柱痕はいずれも認められなかった。床面からの深さは7~12cmを測る。土抗とP1、P2とP3は切り合う。P2とP3については建替えの可能性が考えられる。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。
- 土器** 壺と高杯が出土している(第42図)。壺(78)はV様式系に分類されるものである。口縁部はいわゆる「口縁タタキ出し手法」により作られている。高杯(79)は脚柱部で、外面は細かい縦方向のヘラミガキで丁寧に仕上げられている。
- 石器** 台石(S1)が出土している(第43図)。扁平な花崗岩で、平面形は三角形を呈する。
- 時期** 出土土器から判断して、弥生時代終末期と考えられる。



第42図 S H 301出土土器

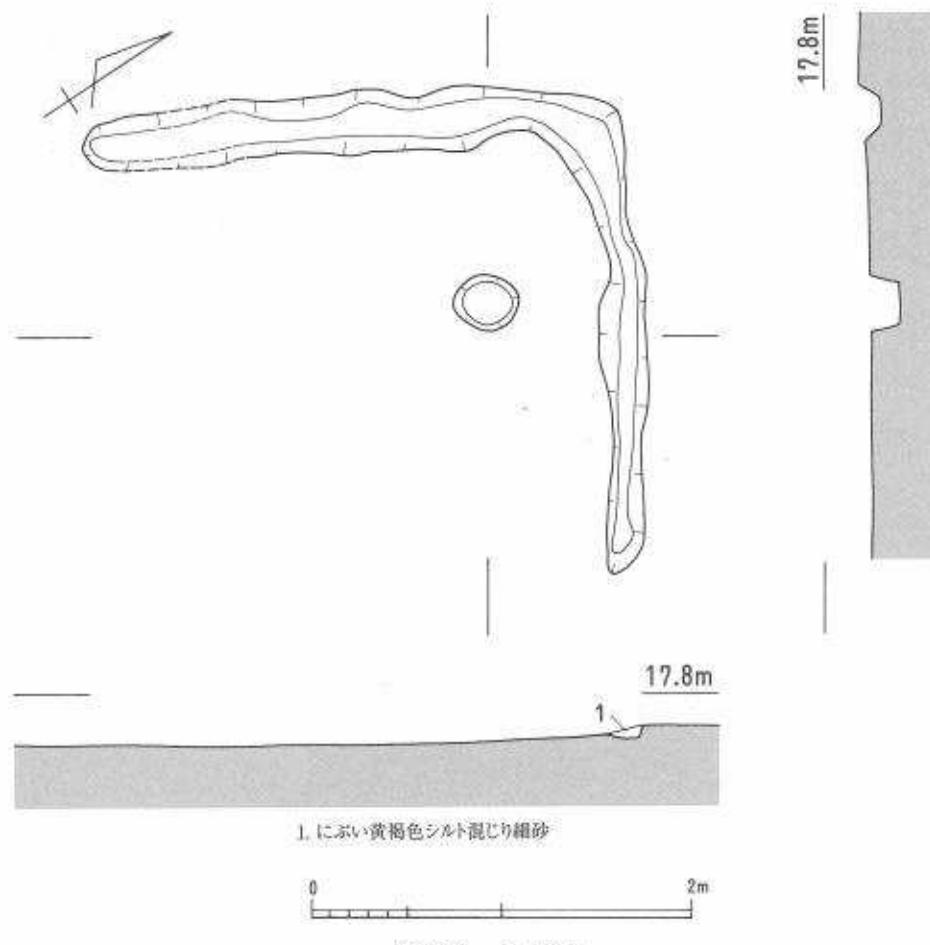


第43図 S H 301出土石器

S H 302(第44図)

- 検出状況** A地区東側に位置する。南半分は調査区外に延びる。北辺と西辺の一部を検出した。周壁溝のみ検出された。
- 形状・規模** 平面形は方形を呈するものと考えられる。方位は東辺でN48°Wを示す。規模は残存長で、西辺2.9m、北辺2.5mを測る。床面の標高は17.5m前後である。検出した範囲での床面積は約7.3m²である。
- 埋没状況** にぶい黄褐色シルト混じり細砂が堆積していた。自然に埋没したものと考えられる。
- 屋内施設** 周壁溝と柱穴を検出した。
- 周壁溝** 北辺と西辺の2辺検出され、L字状に巡る。床面での幅は20~36cmを測る。横断面は逆台形を呈し、床面からの深さは最深部で12cmを測る。埋土には、にぶい黄褐色シルト混じり細砂が堆積していた。

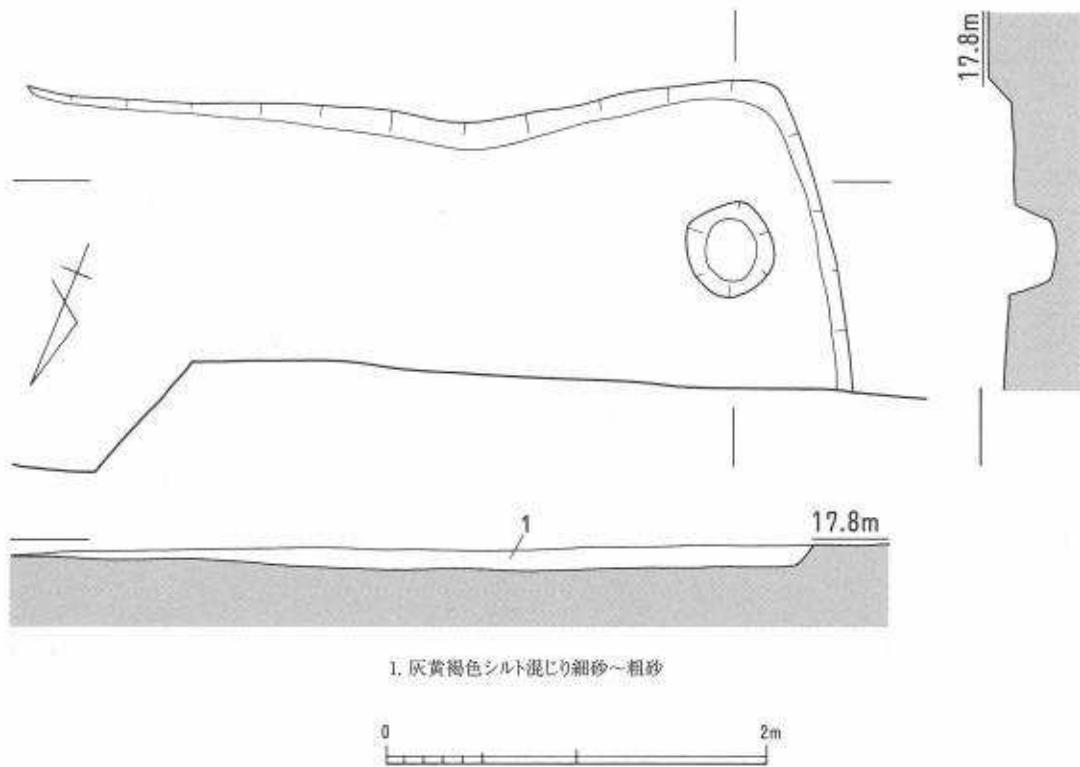
- 柱穴** 1基検出した。主柱穴になると考えられる。掘り方の径は約30cm、柱痕は認められなかつた。床面からの深さは約16cmを測る。
- 出土遺物** 遺物は全く出土しなかった。
- 時期** 出土遺物がないため時期は不明であるが、周壁溝の埋土の特徴が隣接するS H 301のものに類似する点、周辺の検出時に出土した土器から弥生時代終末期のものと考える。



第44図 S H 302

S H 303（第45図）

- 検出状況** B地区北東端に位置する。北半分は調査区外に延びる。南西隅部分のみ検出できた。
- 形状・規模** 平面形は方形を呈するものと考えられる。方位は南辺の直交方向でN25°Wを示す。規模は、南辺で残存長4.2m、南北方向で残存長2.0mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で16cmを測る。床面の標高は17.7m前後である。検出した範囲での床面積は約6.48m²である。
- 埋没状況** 灰黄褐色シルト混じり細砂～粗砂が堆積していた。自然に埋没したものと考えられる。
- 屋内施設** 柱穴を検出した。
- 柱穴** 南西隅に1基検出した。主柱穴になる可能性が考えられる。掘り方の径は約30cmで、柱痕は認められなかった。床面からの深さは11cmを測る。
- 出土遺物** 墓（80）が出土している（第46図）。倒錐形の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面



第45図 SH 303

は縦方向のハケ調整、内面上半は縦方向のユビナデにより仕上げられている。底部には葉脈痕が残る。また、小片のため図化できなかったが、V様式系の壺の破片が出土している。

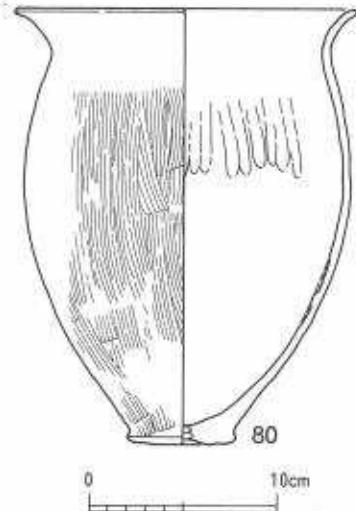
時期 80は弥生時代中期初頭のものであるが、床面より上位の遺構検出面で出土したものである。したがって、V様式系の壺が共伴することから、住居跡は弥生時代終末期のもので、土器のみが流れ込んだものと考えたい。ただし、隣接する第11次調査で中期初頭の住居跡が検出されている点を留意しておきたい。

S H 304 (第47図)

検出状況 B地区東端に位置する。北東隅を溝状遺構に切られるが、ほぼ完存する。

形状・規模 平面形は方形を呈する。方位は西辺でN 8°Eを示す。規模は、南北方向で4.65m、東西方向で4.4mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で28cmを測る。床面の標高は17.3m前後である。検出した範囲での床面積は約20.46m²である。

埋没状況 上層に灰黄褐色シルト混じり細砂～粗砂、下層に黄褐色シルト混じり細砂～粗砂が堆積



第46図 SH 303出土土器

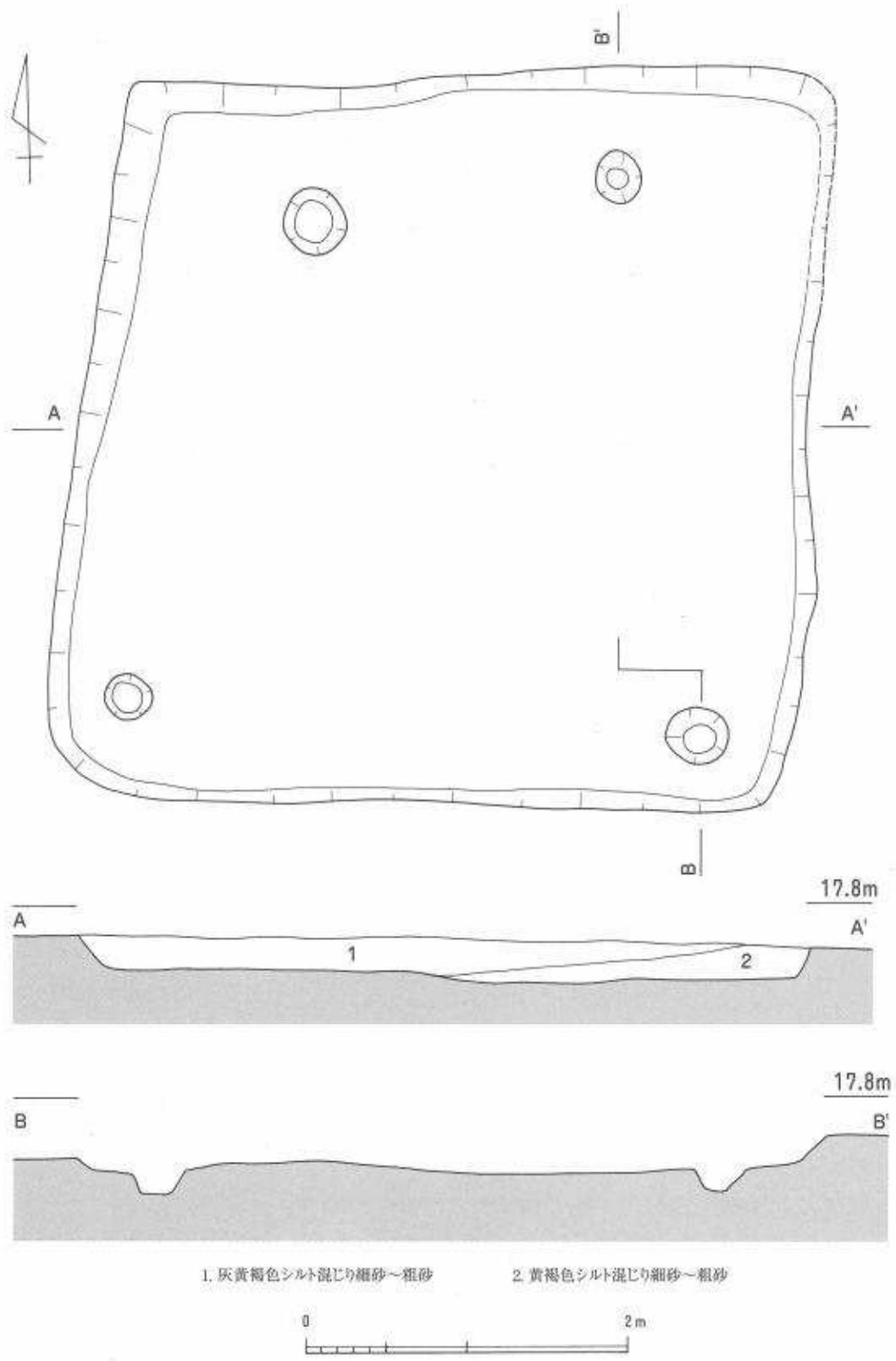
していた。自然に埋没したものと考えられる。

屋内施設

柱穴を検出した。

柱穴

4基検出した。配置はやや不整形だが、主柱穴を構成するものと考える。掘り方の径は

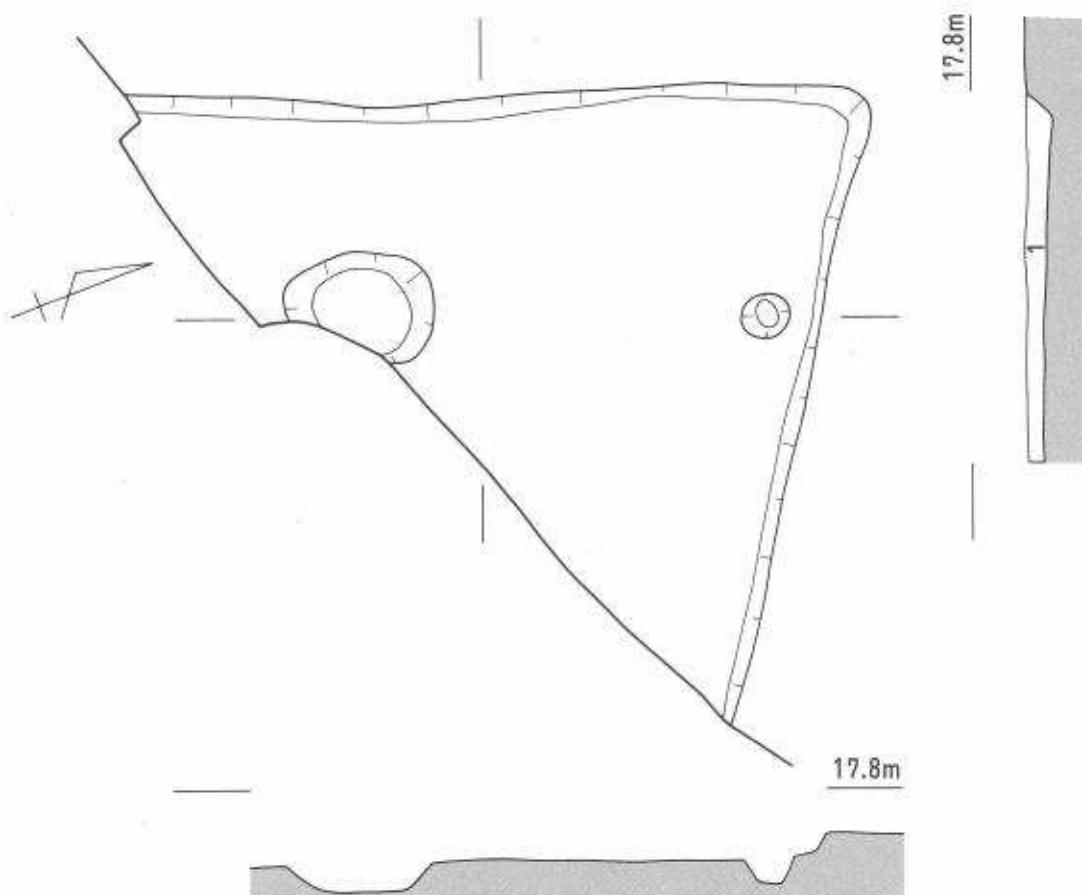


第47図 S H 304

- 20~30cmで、柱痕はいずれにも認められなかった。床面からの深さは9~13cmを測る。
- 出土遺物** V様式系の甕の頸部と体部が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 時期** 出土遺物から判断して、弥生時代終末期と考えられる。

S H 305 (第48図)

- 検出状況** B地区南東隅に位置する。南半分は調査区外に延びる。北西隅部分のみ検出できた。
- 形状・規模** 唯一確認できる北西隅部分の平面形はやや鋭角をなすが、平面形は方形を呈するものと考えられる。方位は西辺でN21°Eを示す。
- 規模は、西辺で残存長4.0m北辺で残存長3.4mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で12cmを測る。床面の標高は17.4m前後である。検出した範囲での床面積は約16.8m²である。
- 埋没状況** 灰黄褐色シルト混じり細砂~中砂が堆積していた。自然に埋没したものと考えられる。
- 屋内施設** 土坑と柱穴を検出した。
- 土坑** 平面形は橢円形を呈する。規模は主軸方向で70cm、その直交方向で55cmを測る。横断面は皿形を呈し、床面からの深さは最深部で24cmを測る。埋土はにぶい灰黄褐色シルト混じり粗砂が堆積していた。



第48図 S H 305

柱穴 1基検出した。住居跡の埋土除去後に確認された柱穴ではあるが、当住居跡に伴う柱穴であるか判断し難い。掘り方の径は約25cmで、柱痕は認められなかった。床面からの深さは12cmを測る。

出土遺物 遺物は全く出土しなかった。

時期 出土遺物がないため時期は不明であるが、埋土の特徴が隣接するS H304のものに類似する点、検出時に出土した土器から弥生時代終末期の可能性が高いものと考える。

S H306（第50図）

検出状況 B地区西半に位置する。南辺の一部を土抗に切られ、S H307を切る。ほぼ完存する。

形状・規模 平面形は不整形な隅丸方形を呈する。方位は北辺と南辺の中軸線でN24°Wを示す。

規模は、南北方向で3.9m、北辺で2.3m、南辺で3.9mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で14cmを測る。床面の標高は16.9m前後である。床面積は約14.82m²である。

埋没状況 上層に黒褐色細礫混じりシルト、下層に褐灰色シルト質粗砂が堆積していた。自然に埋没したものと考えられる。

屋内施設 土抗と柱穴を検出した。

土抗 床面の北東隅で検出された。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸方向で約105cm、その直交方向で約60cmを測る。横断面は浅い皿形を呈し、床面からの深さは最深部で6cmを測る。埋土には上層に褐灰色細砂～粗砂、下層に同色のシルト混じり細砂が堆積していた。

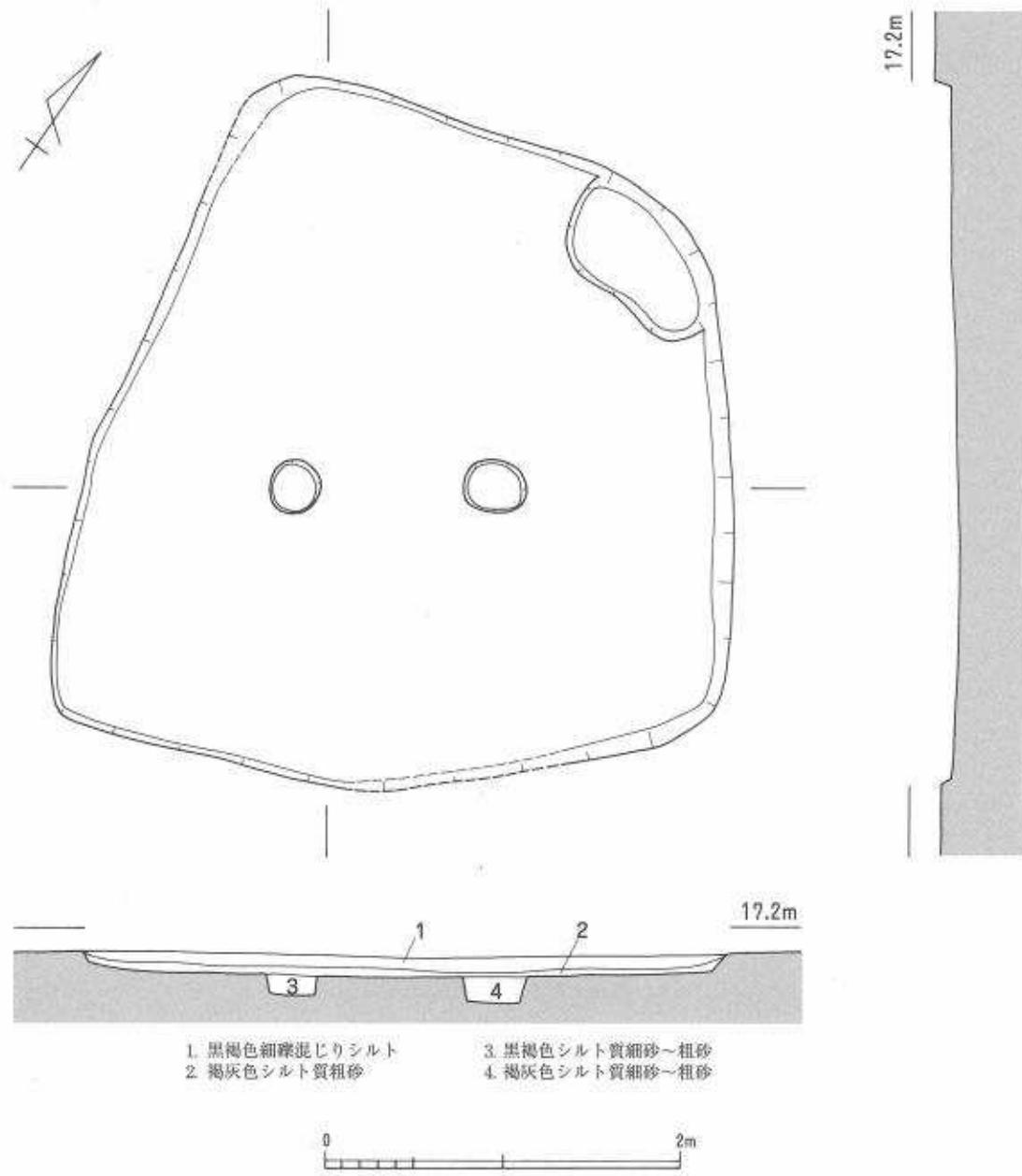
柱穴 2基検出された。床面中央に位置し、柱穴の心心間の距離は1.2mを測る。2本柱で主柱穴を構成するものと考えられる。掘り方の径は30～40cmで、柱痕はいずれも認められなかった。床面からの深さは10cmと17cmを測る。

出土遺物 V様式系の甕の口縁部と体部が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 出土遺物から判断して、弥生時代終末期と考えられる。



第49図 S H306・307の調査



第50図 S H 306

S H 307 (第51図)

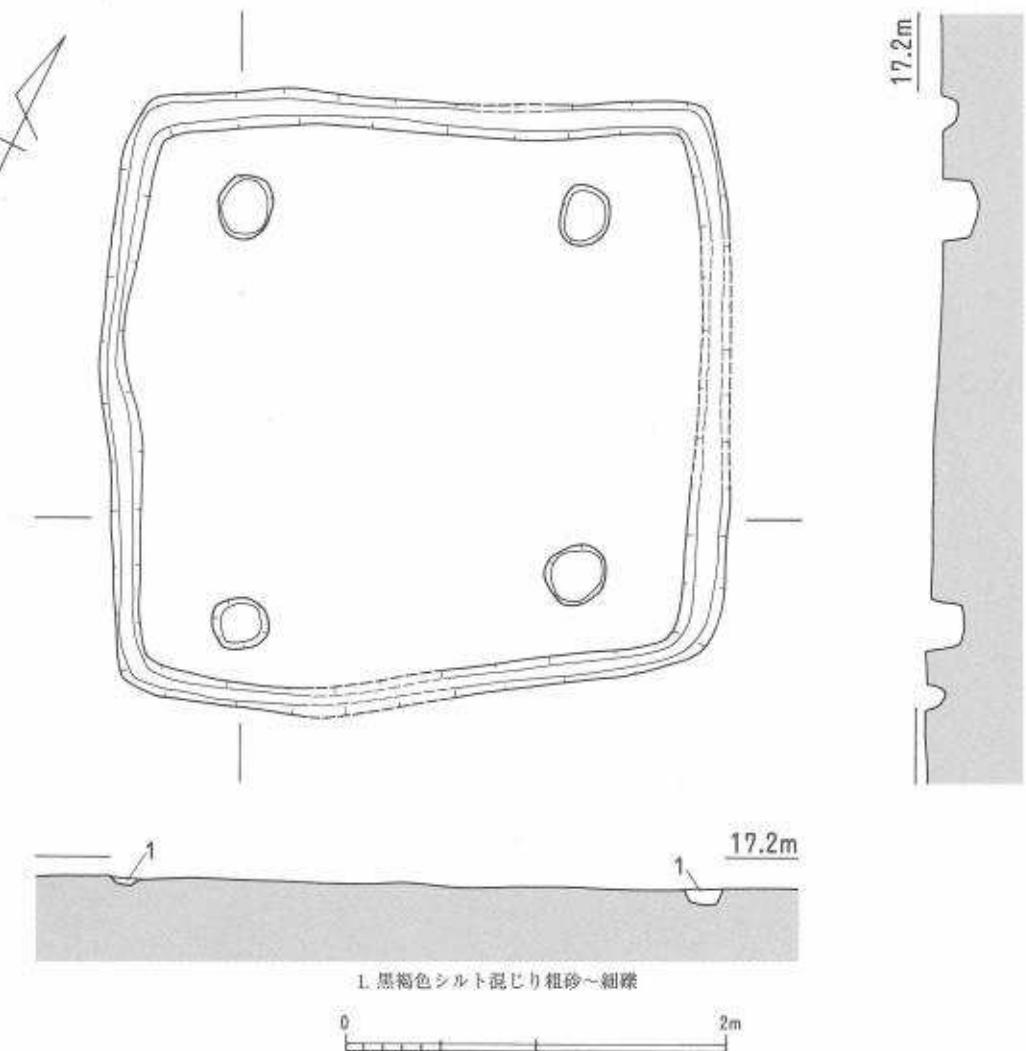
検出状況 B地区西半に位置する。北西隅をS H 306に、南辺の一部を土抗に切られる。周壁溝のみ検出された。

形状・規模 平面形は方形を呈する。方位は西辺でN25°Wを示す。
規模は、南北方向で3.2m、東西方向で3.3mを測る。検出した標高は16.9m前後である。
床面積は約9.92m²である。

埋没状況 削平のため周壁溝しか残存せず、埋没状況は不明である。

屋内施設 周壁溝と柱穴を検出した。

周壁溝 平面形が方形に検出された。全周する。横断面はU字形を呈する。幅は検出面で20m前後、床面からの深さは最深部で14cmを測る。埋土には黒褐色シルト混じり粗砂～細砂が



第51図 SH 307

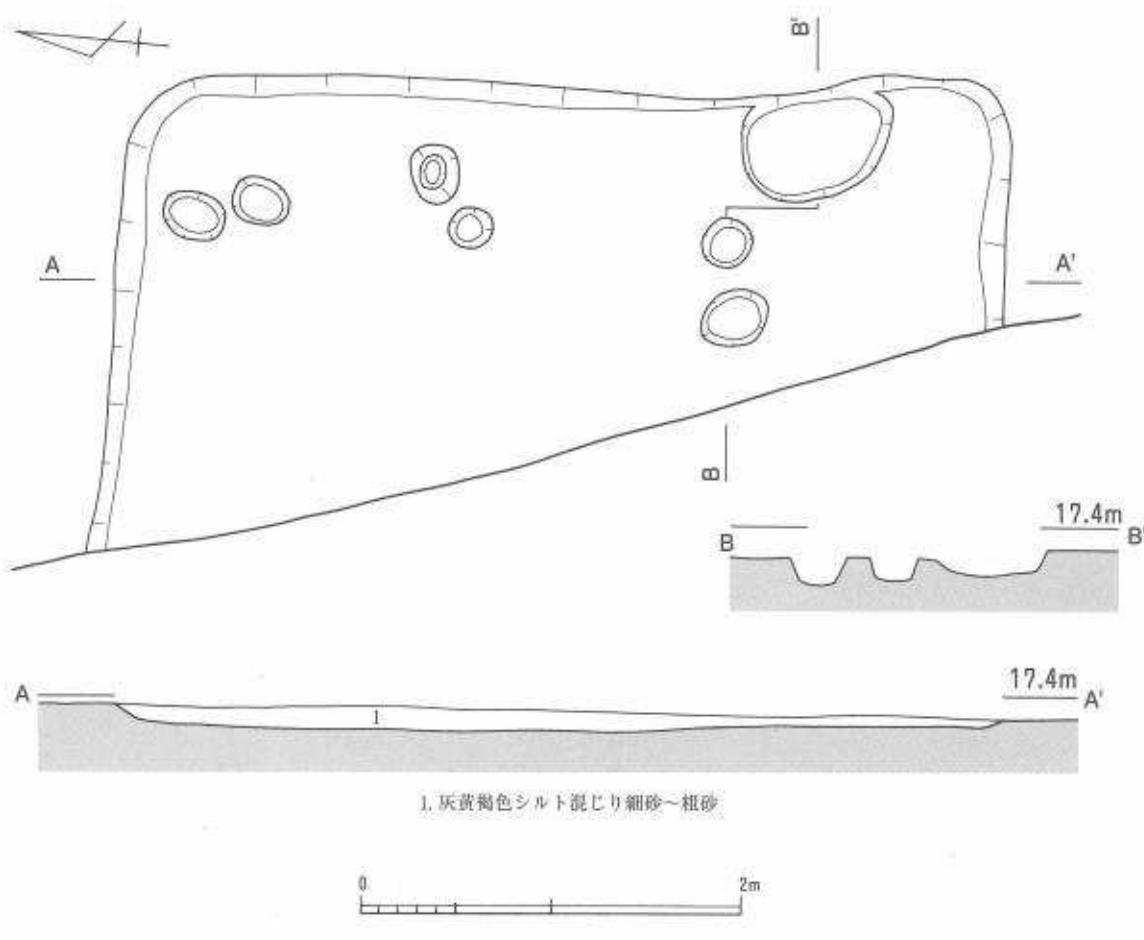
堆積していた。

- 柱穴** 4基検出された。主柱穴であると考えられる。掘り方の径は30cm前後で、柱痕はいずれも認められなかった。床面からの深さは13~17cmを測る。
- 出土遺物** V様式系の甕の体部が出土しているが、小片のため図化できなかった。
- 時期** 出土遺物から判断して、弥生時代終末期と考えられる。

S H 308 (第52図)

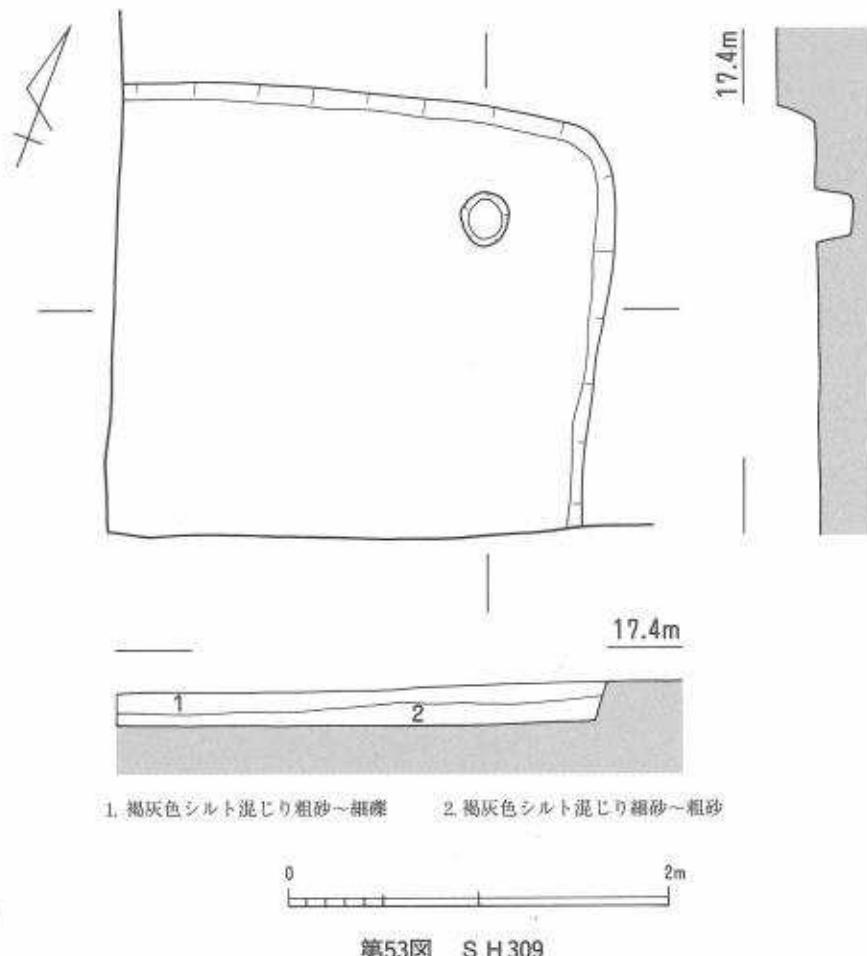
- 検出状況** B地区西端に位置する。西半分は調査区外に延びる。1辺を完全に検出できたのは、東辺のみである。
- 形状・規模** 平面形は方形を呈するものと考えられる。方位は東辺でN 6°Wを示す。規模は、東辺で4.6m、北辺で残存長2.6mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で12cmを測る。床面の標高は17.2m前後である。検出した範囲での床面積は約8.97m²である。
- 埋没状況** 灰黄褐色シルト混じり細砂～粗砂が堆積していた。自然に埋没したものと考えられる。
- 屋内施設** 土抗と柱穴を検出した。

- 土坑** 床面の東端の東南隅付近で検出された。平面形は橢円形を呈する。規模は主軸方向で約85cm、その直交方向で約50cmを測る。横断面は浅い皿形を呈し、床面からの深さは最深部で7cmを測る。埋土には褐灰色シルト混じり細砂～粗砂が堆積していた。
- 柱穴** 6基検出した。住居跡の埋土除去後に確認されたものではあるが、柱穴の配置状況から当住居跡に伴う柱穴であったのか判断し難い。2本1単位のようにも見える。掘り方の径は20～30cm前後で、1基だけ柱痕が認められた。床面からの深さは6～10cmを測る。
- 出土遺物** V様式系の甕の体部などが出土地しているが、小片のため図化できなかった。
- 時期** 出土遺物から判断して、弥生時代終末期と考えられる。



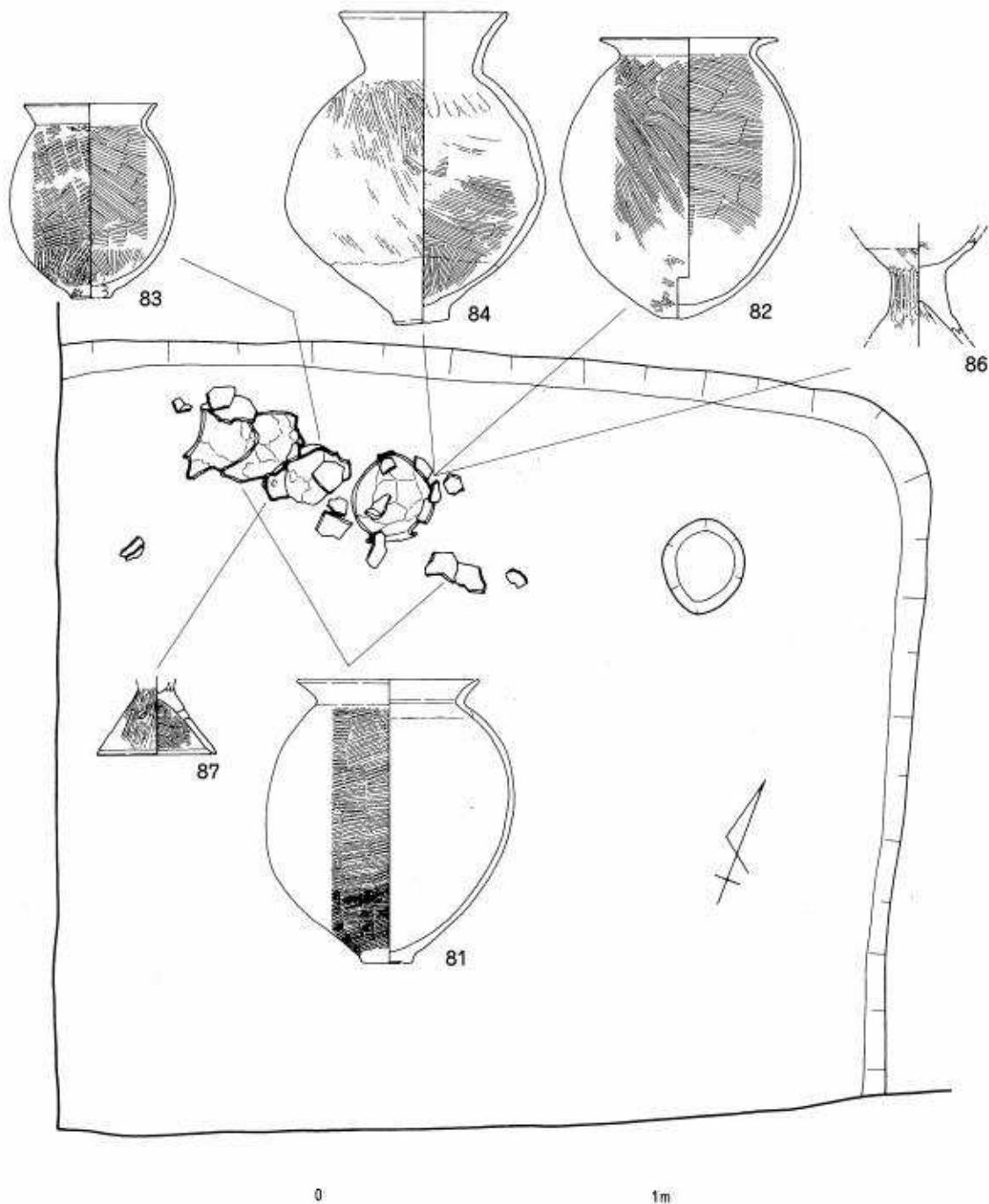
S H 309（第53図）

- 検出状況** B地区南西隅に位置する。大半は調査区外である。北東隅部分のみ検出できた。
- 形状・規模** 平面形は方形を呈するものと考えられる。方位は東辺でN17°Wを示す。規模は、北辺で残存長2.6m、東辺で残存長2.2mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で24cmを測る。床面の標高は17.0m前後である。検出した範囲での床面積は約5.72m²である。
- 埋没状況** 上層に褐灰色シルト混じり粗砂～細砂、下層に褐灰色シルト混じり細砂～粗砂が堆積していた。自然に埋没したものと考えられる。



第53図 SH 309

- 屋内施設** 柱穴を検出した。
- 柱穴** 1基検出した。主柱穴になる可能性が考えられる。掘り方の径は約25cmで、柱痕は認められなかった。床面からの深さは18cmを測る。
- 出土遺物** 壺、壺、高杯が出土している（第55図）。
- 出土状況** 住居跡内北側の床面直上ではほぼ直線状に並んで検出された（第54図）。住居跡全体を検出したわけではないが、4本の主柱穴うちの北辺の2本の柱の間に土器を並べていたような状況が復元される。
- 壺** V様式系の壺には大型のもの（81・82）と中型のもの（83）がある。81は2分割成形で、球形の体部と小さな平底を持つ。82は底部が尖尻化しており、もはや自立できない。また、外面はタタキ目を丁寧にハケ調整で消している。81と比較してより新しい傾向を示している。83は81をひとまわり小型にしたもので、同様に2分割成形である。
- 壺** 広口壺（84）は、球形の体部から単純に外形する口縁部を持つ。外面はヘラミガキ、内面はハケ調整により仕上げられている。
- 管玉状土製品** この壺の特記すべき点は、胎土に管玉状土製品が混入することである。管玉状土製品は、穿孔された円筒状の土製品で、全長8mm、直徑4mm、孔径2mmを測る。壺の底部やや外よりも長軸方向を上に向けた状態で混入していた。この壺の特徴として、胎土が粗雑なことで、砂粒や棒状～長楕円形のくさり礫が多く混入している。管玉状土製品もこうした混和



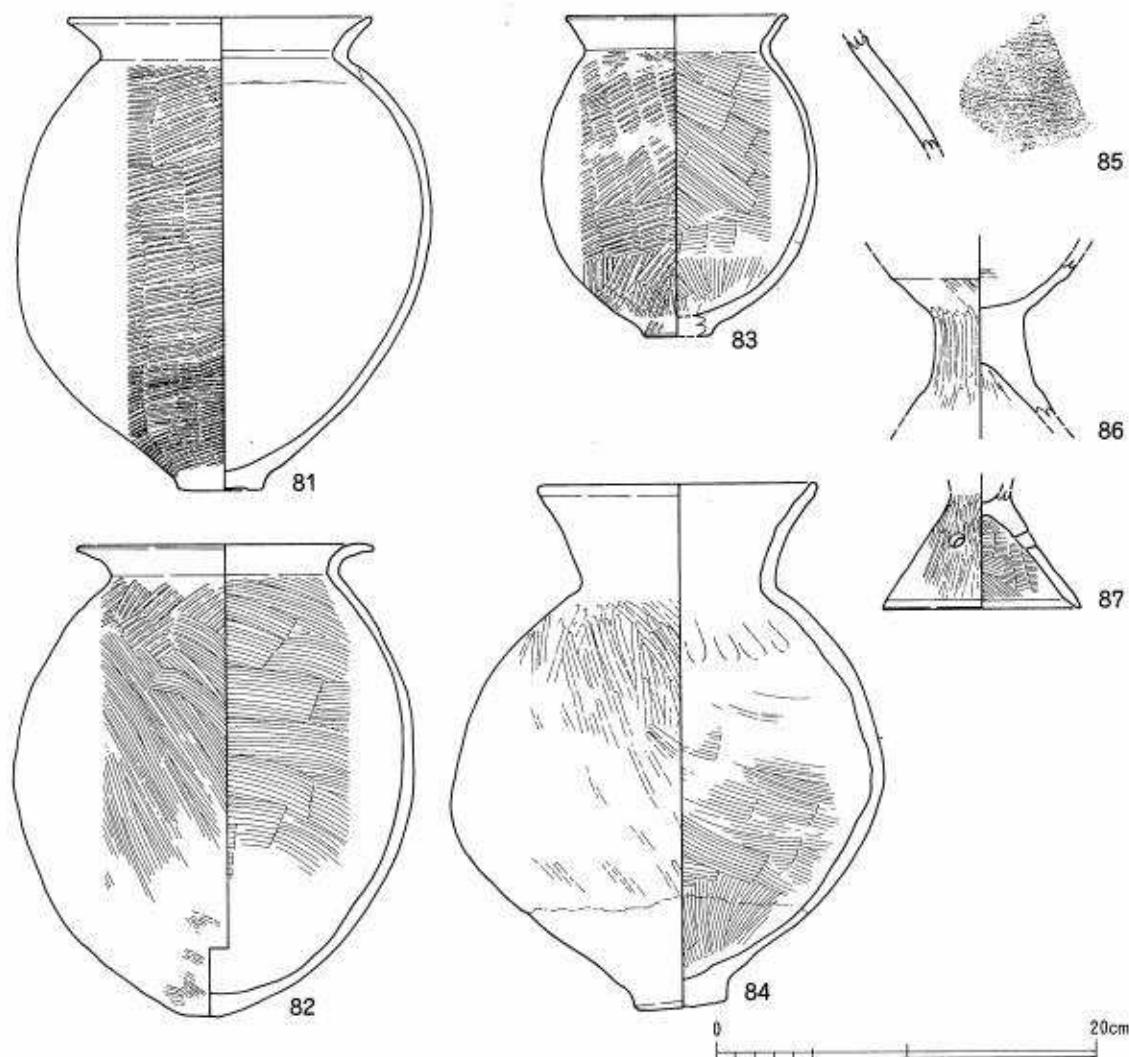
第54図 S H 309土器出土状況

材のひとつとして、混入したものと現時点では考えている。しかしながら、管見ではこのような類例がなく、今後類例の検索および増加を待って再度検討したい。

その他、肩部に横描直線文と波状文を巡らす壺の肩部（85）も出土している。

高杯 脚柱部（86）と脚部（87）が出土している。87は器台の可能性も考えられる。ともに外
面は縦方向のヘラミガキで丁寧に仕上げられている。

時期 出土遺物から判断して、弥生時代終末期と考えられる。



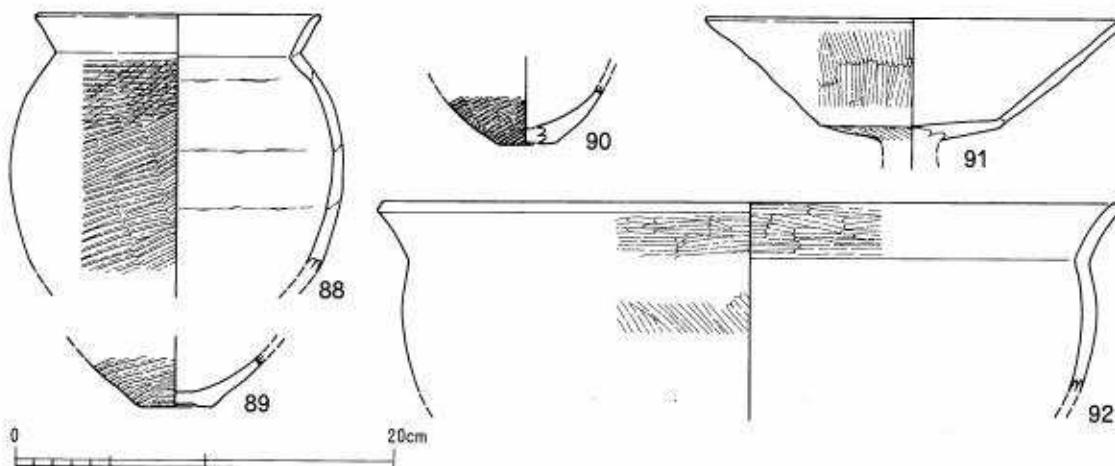
第55図 S H 309出土土器

(3) 土坑

概要 検出した土坑は9基である。平面は不整形なものが多く、残存状況もあまりよくない。以下に図化できる遺物の出土した土坑とその遺物についてのみ報告する。

SK 301

- 検出状況** A地区東側に位置する。切り合い関係はなく、ほぼ完存する。
- 形状・規模** 平面形は長楕円形を呈する。長軸方向で80cm、その直交方向で40cmを測る。横断面は浅い皿形を呈する。検出面からの深さは最深部で8cmを測る。
- 埋没状況** 黒褐色シルト混じり細砂（炭混じり）が堆積していた。
- 出土遺物** 壺、高杯、鉢が出土している（第56図）。壺（88～90）はV様式系のもので、球形化した体部に小さな平底を持つ。有稜高杯（91）の杯部は、小さな底部に直線的に大きく開く口縁部を持つ。大型の鉢（92）は内外面をヘラミガキによって仕上げられている。
- 時期** 弥生時代終末期のものと考えられる。



第56図 SK 301出土土器

(4) 小結

住居跡の立地 B地区では、調査区両端で住居跡が検出されたが、中央では遺構は全く検出されなかつた。このことは、調査区両端は微高地上で、調査区中央が両端と比較して低い谷状地形であったことに起因する。

土器溜まり 第3面が埋没する時、相対的に低い中央の谷状地形から土砂は堆積していった（第10図14～16の堆積）。そこで、この谷状地形の埋没過程で土器が投棄され、土器溜まりとして検出されたものと考えられる。さらにこれらの土器は、包含層出土土器も含め、壺形土器の比率が高いことから、谷状地形で水際の祭祀が行われ、その際使用されたものである可能性も考えたい。したがって、谷状地形が埋没するとき投棄された土器なので、第3面で検出された遺構と土器溜まりとは時期差が認められる。具体的には、前者は弥生時代終末期（庄内式土器併行期、以下庄内期）、後者は古墳時代前期のものである。

庄内期の土器 第3面で検出された土器は、庄内期でも後半のものである。いわゆる「庄内甕」は出土していないが、V様式系の甕が庄内期を通じて認められる西摂地方通有のありかたを示している。

第II様式の土器 今回、検出した住居跡は全て弥生時代終末期のものである。しかしながら、SH303上層埋土で検出された土器（80）は弥生時代中期初頭（第II様式）のものである。これまでも隣接する第11次調査SB12から中期初頭の土器が確認されており、当該期に周辺が居住域として開発され始めたものと考えられる。しかし、今回検出された土器は、V様式系の甕と共に伴することから、周辺から流入したものと判断した。

管玉状土製品 最後に、SH309で検出された土器（84）の胎土に混入したと考えられる管玉状土製品は管見で類例がなく、今後類例の検索および増加を待って検討したい。

第4章 自然科学分析

住吉宮町遺跡第33次調査で検出された地震の痕跡

産業技術総合研究所活断層研究センター 主任研究員 寒川 旭

はじめに

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が神戸市東灘区の住吉宮町遺跡で行った、第33次調査で地震の痕跡が検出されたので紹介したい。

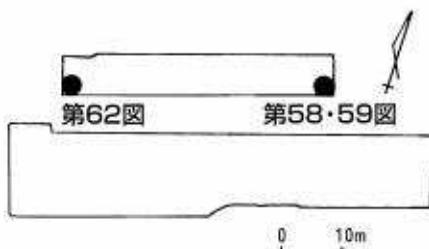
地震跡の形状

まず、小規模ながら液状化現象に伴う砂脈が検出された（第57図）。第58図はその平面形を示したものである。礫（最大径1cm）を含むシルト質の粗粒砂層を引き裂きながら東西方向にのびる最大幅2cmの砂脈が、少なくとも1.5m以上の長さで認められたが、砂脈の内部は淘汰の良い中～細粒砂で構成されていた。

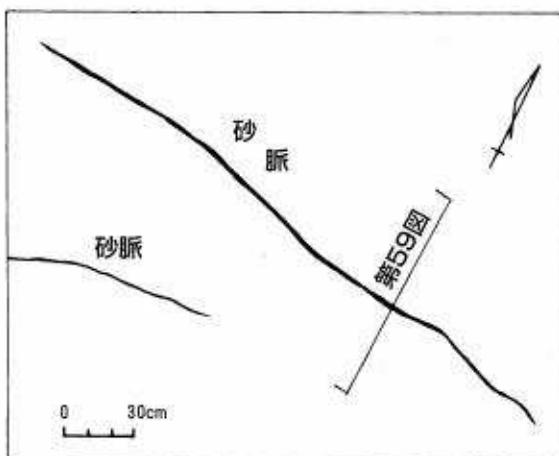
第59図は砂脈の中央部の断面形態を示したものである。説明の便宜上、I～V層に区分したが、I層は礫を含むうす褐色の粗粒砂層、II層は厚さ最大5cmのうす褐色シルト層、III層は最大径5mmの礫を含む黒褐色シルト層、IV層は最大径5mmの礫を含む黒褐色の細粒砂層、V層は最大径5mmの礫を僅かに含むうす褐色の細粒砂層でIV層との境界は明瞭でない。

第59図の中央に示したように、I～IV層を引き裂きながら最大幅2cmの砂脈が上昇していた。砂脈内はV層から供給された細粒砂で満たされていたが、最上部には粗粒砂が含まれている。恐らく、I層が他の地層に比べてもろいため、この層を構成する粗粒砂を少し取り込みながら噴砂が上昇したのであろう。第59図の左にも砂脈が見られたが、III層の最下部に達した段階で水平方向（図の左方向）に移動し、III層の内部に上昇してから消滅している。地震発生当時、IV層に比べてIII層の固結度が高くて引き裂き難かったのであろう。

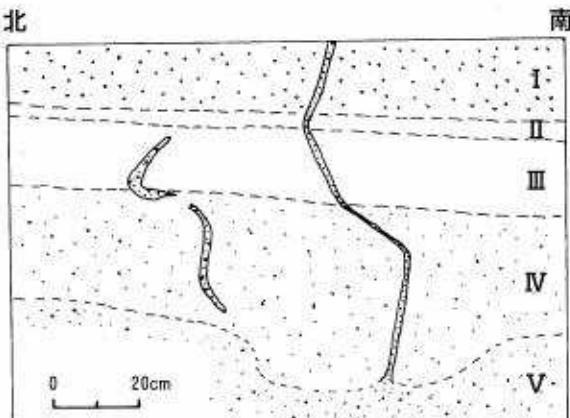
砂脈の他に、地層が垂直方向に変位した地滑りの痕跡も認められた（第60～62図）。まず、



第57図 位置図



第58図 砂脈の平面図



第59図 砂脈の断面図



第60図 地滑り跡の平面形態

第60図に示したように、北西～南東方向の線を境にして、両側の地層が異なる状態が認められ、この位置で第61～62図のようなトレンチを掘削した。

第62図について、便宜上 I'～V' 層に区分したが、I' 層は細長い凹地に堆積した地層で、下部が粗粒砂、上部が粗～細粒砂である。II' 層は褐色の細粒砂、III' 層は黒灰色の粗粒～細粒砂、IV' 層は灰褐色の粗粒～細粒砂、V' 層は灰褐色の細粒～極細粒砂である。

図の右端に示したように、II'～IV' 層が北東方向に向かって12～14cm低下し、滑り面はV' 層中で消滅していた。V' 層で液状化現象が生じて砂粒が水平方向に移動し、上位に堆積していた地層の地滑りを促した可能性が高い。

考察とまとめ

第59図に関して、I層は古墳時代後期の洪水砂（上面が奈良時代～平安時代前半の遺構検出面）、II層は古墳時代後期の地層、III層は古墳時代前期の地層、IV層は弥生時代終末期の竪穴住居の埋土、V層は弥生時代以前の洪水に伴う地層である（地層の年代は服部氏よりご教示いただいた）。砂脈はすべての地層を引き裂いているので、地震に伴う液状化現象は古墳時代後期以後に生じたことになる。また、第62図のIII' 層は古墳時代前期の地層である。

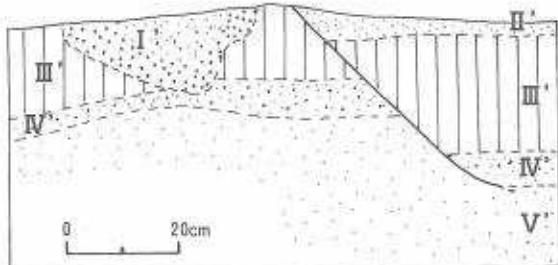
このため、地滑り跡に関しては古墳時代前期以後に生じたことになる。

当遺跡周辺においては、有史以降に生じた最大規模の大地震として、1596（文禄5・慶長元）年9月5日に発生した伏見地震があげられる。

この地震は、活断層のトレンチ調査の結果から、大阪平野の北縁を限る有馬～高槻構造線活断層系や淡路島の東浦断層・野田尾断層・先山断層などが活動して引き起こしたことがわかっている。そして、第64図に示したように、京阪神・



第61図 地滑り跡の断面形態



第62図 地滑り跡の断面図(図の右方向がN60°E)



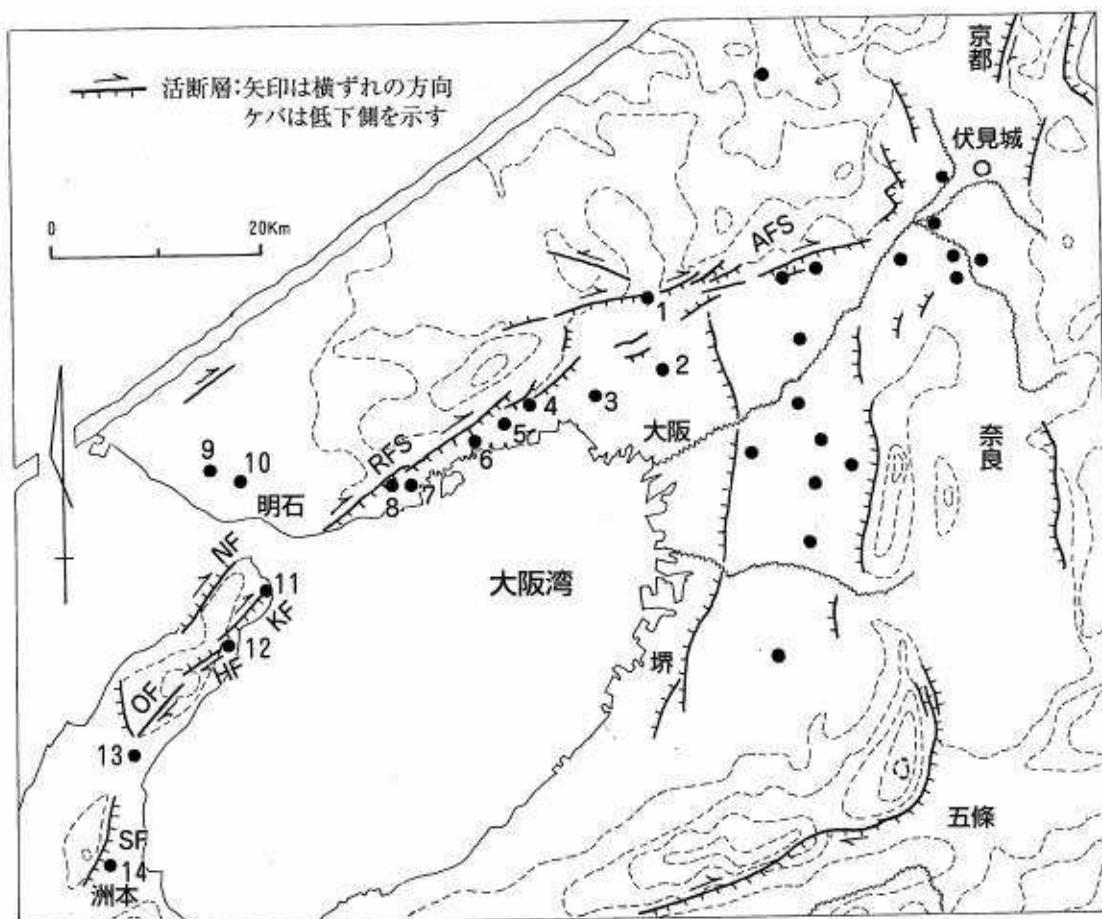
第63図 井戸枠の変形（神戸市教育委員会調査）

（奈良時代の井戸枠の上半分が左方向に1.9m移動）

淡路地域の遺跡から伏見地震による可能性の高い地震の痕跡が数多く認められている。

また、これまでに実施された住吉宮町遺跡の発掘調査においては、伏見地震に伴う液状化の痕跡の他に、第63図に示したような井戸枠の変形跡などが認められている。これは激しい地震動にともなう地盤の側方流動の痕跡で、井戸枠が変形した部分の砂層が液状化したことが考えられる。当遺跡では、第62図に示したような小規模な地滑りの痕跡が複数認められており、これらが第63図の変形と同じ地震で生じた可能性がある。

阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸市周辺地域では、遺跡の発掘調査で多くの地震跡が見いだされている。これらは将来の地震に対する被害軽減を考える上で重要な資料である。



第64図 大阪平野周辺の活断層と伏見地震の痕跡跡を検出した遺跡

AFS：有馬一高槻構造線活断層系 RFS：六甲断層系 NF：野島断層

KF：楠木断層 HF：東浦断層 OF：野田尾断層 SF：先山断層

●印は伏見地震によると思われる地震跡を検出した遺跡。兵庫県の遺跡名は、1：栄根

2：田能高田 3：高松町 4：芦屋廃寺 5：住吉宮町 6：西求女塚古墳 7：兵庫津

8：長田神社 9：玉津田中 10：新方 11：塙壠 12：佃 13：志筑廃寺 14：下内膳

謝辞

本稿をまとめるに当たり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の鐵 英記氏・服部 寛氏に多くのご教示を頂きました。

参考文献

- 工業技術院地質調査所編（1996）平成7年度活断層研究調査概要報告書98p.
理文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会（1996）発掘された地震痕跡.826p.
寒川 旭（1992）地震考古学 遺跡が語る地震の歴史.中公新書, 251p.
寒川 旭（2001）阪神・淡路大震災と地震考古学、「震災を越えて：阪神・淡路大震災と埋蔵文化財に関するシンポジウムの記録」.エピック社, 148-153.
寒川 旭（2001）地震 なまずの活動史.大巧社, 173p.
寒川 旭・菅本宏明・齋木 嶽・内藤俊哉・藤井太郎（1999）阪神・淡路大震災以後に神戸市内で検出された地震の痕跡.日本考古学協会第65回総会研究発表要旨, 161-164.
宇佐美龍夫（1996）新編日本被害地震総覧.東京大学出版会, 493p.

第5章 まとめ

第1節 住吉宮町遺跡第33次調査のまとめ

はじめに 住吉宮町遺跡第33次調査の調査の成果について以下に要点を箇条書きし、本報告のまとめとしたい。

第1面 奈良時代～平安時代前半の遺構面である。掘立柱建物跡、土抗、溝、柱穴を検出した。庇付き建物が今回初めて住吉宮町遺跡で検出され、当地点周辺が律令期の集落の中心であった可能性も考えられるようになった。

第2面 古墳時代後期の遺構面である。明確な遺構は検出されていないが、地震による痕跡を検出した。地震の痕跡は砂脈と地滑り痕で、慶長元（1596）年に発生した伏見地震に伴うものであると判明した。

第3面 弥生時代終末期の遺構面である。竪穴住居跡、土抗、溝、柱穴、土器溜まりを検出した。調査区中央の谷状地形を挟んで9棟の住居跡を検出した。また、弥生時代中期初頭の土器が検出され、当該期から周辺が開発され始めることが判明した。また、土器の胎土内に混入していた管玉状土製品については、類例の増加をもって再度検討する必要がある。

第2節 住吉川右岸の遺跡分布の様相

はじめに 住吉川右岸の遺跡分布の様相を時期別に概観したい。具体的には住吉宮町遺跡と郡家遺跡の既往の調査を見直し概観することとする。この試みは以前に古川氏によって行われているが（古川1995）、その後震災に伴う発掘調査の件数が増大したため、資料も増加し新知見も加わったことから、今回あらたにまとめることとする。

時期区分 両遺跡を概観するにあたって、（Ⅰ期）弥生時代後期～古墳時代前期、（Ⅱ期）古墳時代中期～同後期末、（Ⅲ期）奈良時代～平安時代、（Ⅳ期）中世前半の4時期に大別する。両遺跡は住吉川右岸の同様な地形上に立地するため、ともによく似た遺跡（遺構）の消長を示す。また、この時期区分は、先の古川氏の分類を踏襲するものもある。

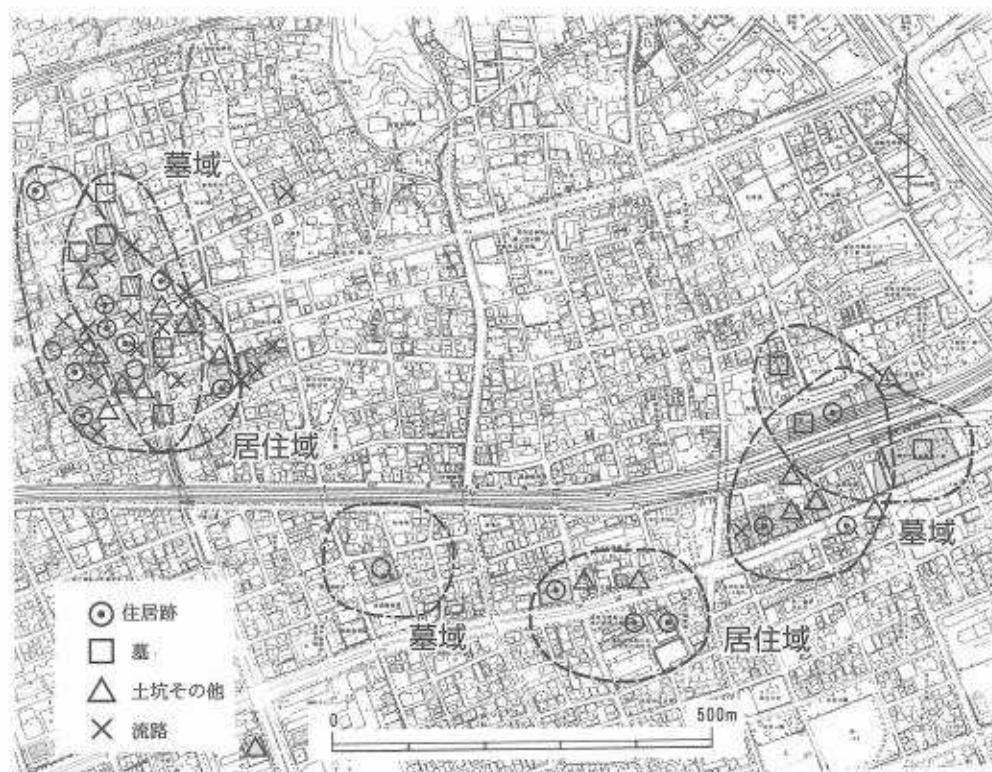
地区の設定 住吉宮町遺跡を東西に分割して、住吉宮町遺跡（東半）、同（西半）と呼称する。現在の本住吉神社付近の埋没河道（谷部）を挟んで古墳時代までは遺跡を東西に分割でき、有効な区分である。ただし、谷部の埋没した奈良時代以降は、東西の境界は不明瞭でもはや線引きできない。郡家遺跡については、これまでに神戸市教育委員会が用いている郡家遺跡（城ノ前地区）など小字による地区名称をそのまま使用する（第65図）。

I期（弥生時代後期～古墳時代前期）（第66図）

遺構 主な遺構は竪穴住居跡、墓（周溝墓、土器棺墓）、土抗、流路などである。

居住域 居住域は、住吉宮町遺跡（東半）、同（西半）、郡家遺跡（城ノ前地区）で検出されている。住吉宮町遺跡を東西で二分したのは、第32次調査で検出された調査区西端の南北方向の谷地形ないし流路で埋没微地形が大きく分断されるためである。





第66図 住吉川右岸の遺跡の様相（I期）

墓域 墓域は住吉宮町遺跡（東半）、郡家遺跡（御影中町地区）、同（城ノ前地区）で検出されている。検出された墓は周溝墓で、円形周溝墓、方形周溝墓の両方が検出されている。また、明確な区画を持たない土器棺墓も検出されている。

流路 郡家遺跡全域で流路が検出されている。洪水の多い不安定な地形と考えられるが、居住域（城ノ前地区）と重複している。住吉宮町遺跡では第32次調査で埋没微高地を分断する大規模な流路が検出されている。

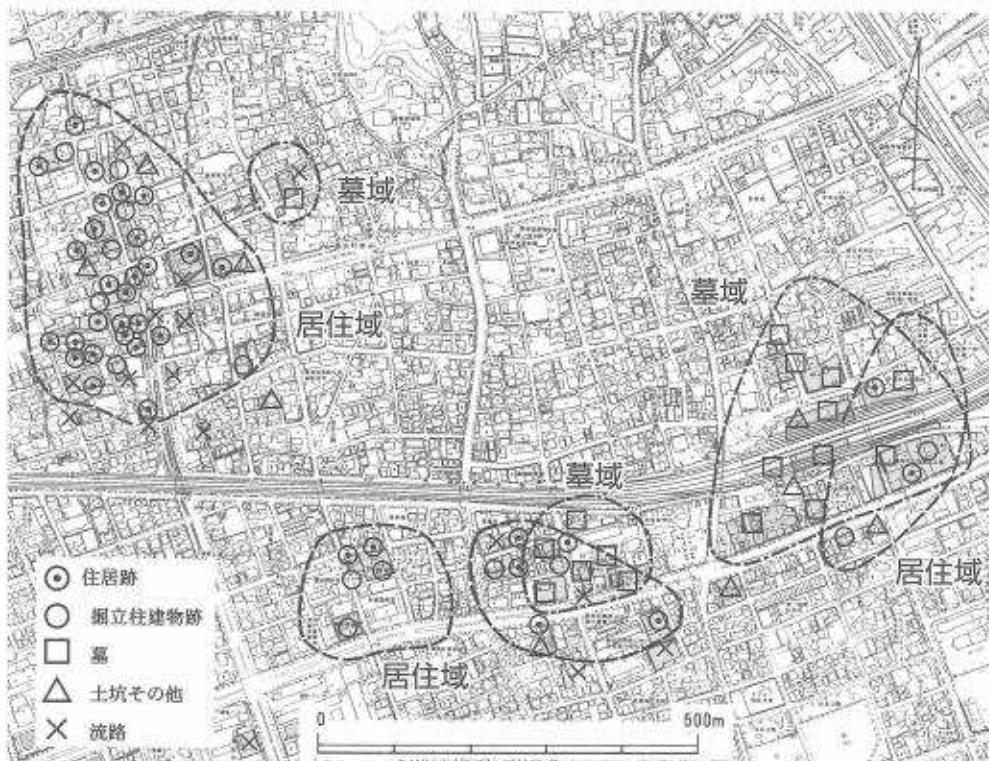
特徴 住吉宮町遺跡（東半）、郡家遺跡（城ノ前地区）では居住域に近接して墓域が形成されている。弥生時代の通有のあり方であろう。住吉宮町遺跡（西半）の墓域は確認されていないが、あるいは郡家遺跡（御影中町地区）の墓がそうである可能性も考えたい。

II期（古墳時代中期～後期末）（第67図）

遺構 主な遺構は堅穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳、土坑、流路などである。

居住域 居住域は、住吉宮町遺跡（東半）、同（西半）、郡家遺跡（城ノ前・岸本・篠ノ坪・地蔵元・大蔵地区）、同（御影中町地区）で検出されている。あるいは住吉宮町遺跡（西半）と御影遺跡（御影中町地区）をまとめてひとつの居住域と考えられるかもしれない。住吉宮町遺跡（東半）の居住域は東へ移動し、同（西半）はI期の範囲を踏襲するが、住居跡の数は倍増する。郡家遺跡（城ノ前地区その他）についてはI期に網の目状に流れていた流路の多くが埋没し、居住域が拡大する。御影遺跡（御影中町地区）は住吉宮町遺跡（西半）から拡大したものとも考えられる。

墓域 古墳が住吉宮町遺跡（東半）、同（西半）、郡家遺跡（下山田地区）で検出されている。「住吉宮町古墳群」は、1985年以降新たに判明してきた埋没古墳群である。坊ヶ塚古墳（前方



第67図 住吉川右岸の遺跡の様相（Ⅱ期）

後円墳、推定全長57m）を古墳群造営の契機とするもので、住吉東古墳（帆立貝形古墳、全長23m）をはじめ、方墳群と墳丘を持たない石棺墓群で構成されている。方墳群の埋葬施設は木棺および石棺を直接埋葬するものである。古墳の空白地帯を挟んで、古墳群を東半と西半に二分できる。国道2号より南では検出されないことから、国道2号付近が当該期の扇状地末端の傾斜変換点であったものと推定される。古墳時代中期から後期前半に盛行する。ただし、郡家遺跡（下山田地区）の古墳群は横穴式石室を埋葬施設とするもので、古墳時代後期後半のものである。

なお、住吉宮町遺跡の古墳群については、近年安田氏によってまとめられており（安田2001）、個々の古墳の詳細はそちらを参照されたい。

生産域 郡家遺跡（御影中町地区）で水田跡が検出されている。今回の調査の結果、第2面が水田跡であった可能性を既に述べた。国道2号付近に当時の傾斜変更点が復元されることから、当該期は現国道2号以南に生産域が展開していた可能性が考えられる。

特徴 居住域と墓域が分化する。また、当該期に両遺跡で居住域は大きく拡大し、六甲山地南麓でも拠点的な集落となる。墓域は、中期から住吉宮町遺跡で造営され始め、周辺の墓域は当遺跡に集約される。その後、後期前半には造墓活動は終息する。そして、後期後半以後、六甲山地南麓の丘陵から段丘域にかけて築かれた横穴式石室を埋葬施設とする古墳群（野寄群集墳など）に墓域は移行する。ただし、近年、郡家遺跡（下山田地区）や住吉宮町遺跡第18・32地点でも横穴式石室が検出されており、両地域が並存する移行期を経て、北方の六甲山地南麓の丘段から段丘域へ墓域が移動したものと考えられる。六甲山地南麓地域では、芦屋川流域でも同様に後期後半に丘陵域で横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が新たに造営され始める。石室を構築する石材を求めての移動と理解される。



第68図 住吉川右岸の遺跡の様相（Ⅲ期）

Ⅲ期（奈良時代～平安時代）（第68図）

遺構

主な遺構は、掘立柱建物跡、井戸、土坑、流路などである。

居住域

居住域は、住吉宮町遺跡と郡家遺跡のほぼ全域で検出されているが、JR 神戸線を挟んで南北2地域に分けることができる。南側地域は住吉宮町遺跡と郡家遺跡（御影中町地区）をあわせた範囲で、当該期では一連の遺跡と考えたい。北側地域はⅡ期の郡家遺跡（城ノ前地区その他）の範囲の東半分に規模を縮小したので、下山田・大蔵地区にその中心は移動する。

特徴

居住域は、住吉宮町遺跡と郡家遺跡のほぼ全域で検出される。

菟原郡衙

律令期、当地域は摂津国菟原郡の範囲にあたり、中でも郡家遺跡は「郡家」「大蔵」といった地名などから菟原郡衙に比定されている。しかし、近年住吉宮町遺跡（第23次調査）で井戸、瓦、硯、墨書き土器（「橘東家」「免」）などが検出されており、むしろ住吉宮町遺跡のほうがより官衙的な様相を呈してきた。今回の調査で検出された庇付きの建物もそれを補強する材料となろう。

Ⅳ期（中世前半）（第69図）

遺構

主な遺構は、掘立柱建物跡、井戸、土坑、流路、採石遺構などである。

居住域

居住域は、住吉宮町遺跡（東半）、郡家遺跡（城ノ前・地蔵元・下山田地区）と同（御影中町地区）で検出されている。Ⅲ期に比べやや散在する。

採石遺構

当該期には、花崗岩の採石遺構が住吉宮町遺跡（第11次調査）、郡家遺跡（城ノ前38次調査）で検出されている。当該地一帯で認められる洪水起源の堆積層に含まれる1辺1m以上もある花崗岩を利用したもので、花崗岩を石材として掘り起こし、加工した痕跡であ



第69図 住吉川右岸の遺跡の様相（IV期）

る。のちの近世初頭には採石地は北方の六甲山山麓に移動し、その花崗岩の集積・加工地として住吉川の西を南流する石屋川下流域に石材加工業者が集住するようになる。当地域で産出する花崗岩は、御影石の名で近世以降特産品となる。

特徴 当該地は早くから市街化した地域であり、上層については既に搅乱を受け削平されていることが多い、資料的な制約があるため単純に前段階と比較できない。このことは、前段階ほど洪水による土砂の堆積が減少し、より現地形に近い地形になったことをも意味する。

小結

以上の検討結果から、当地域の遺跡群は洪水や土石流など自然災害のたびに地形環境が変化し、それに応じた土地利用を展開していった。したがって、住吉川右岸という大きく括られた範囲内に立地する住吉宮町遺跡と郡家遺跡は同様の遺跡（遺構）の消長を示し、補完関係にある一連の遺跡群として理解できる。したがって、現行政区により括られた遺跡の範囲にとらわれず、両遺跡を巨視的にみる必要があろう。

さらに予察として、これまで調査の実施されていない住吉宮町遺跡北側、郡家遺跡東側の範囲は、住吉川右岸でも低位段丘面上（段丘化する以前の扇状地でも特に扇央部）にあたることから、未周知の遺跡が埋没しており、住吉宮町遺跡・郡家遺跡と同様の補完関係にある一連の遺跡となる可能性も考えられる。

第3表 郡家遺跡調査一覧表(1)

| 総次数 | 地区 | 地区次数 | 年度 | 調査概要 | 備考 | 文献 |
|-----|------|----------|------|---------------------------------|--------|----|
| 1 | 大蔵 | OR 1次 | 1979 | I期流路、III期掘立柱建物跡 | | 3 |
| 2 | 御影中町 | MN 1次 | 1981 | II期柱穴群・祭祀土坑、III期柱穴群 | | 4 |
| 3 | 天神川 | TJ 1次 | 1982 | I期方形周溝墓・流路、III期柱穴 | | 5 |
| 4 | 城ノ前 | SM 1次 | 1983 | I期土坑・柱穴・流路 | | 6 |
| 5 | 地蔵元 | JM 1次 | 1983 | IV期土坑・柱穴・流路 | | 6 |
| 6 | 城ノ前 | SM 2次 | 1983 | | | 6 |
| 7 | 地蔵元 | JM 2次 | 1983 | | | 6 |
| 8 | 城ノ前 | SM 3次 | 1983 | I期方形周溝墓・流路 | 旧TJ 2次 | 6 |
| 9 | 天神川 | TJ 3次 | 1983 | | | 6 |
| 10 | 城ノ前 | SM 4次 | 1983 | | | 6 |
| 11 | 城ノ前 | SM 5次 | 1984 | I~IV期流路 | 旧TJ 4次 | 7 |
| 12 | 天神川 | TJ 5次 | 1984 | | | 7 |
| 13 | 千本田 | TF 1次 | 1984 | | | 7 |
| 14 | 城ノ前 | SM 6次 | 1984 | I期周溝墓・土坑、II期竪穴住居跡、IV期土坑・柱穴群 | | 7 |
| 15 | 城ノ前 | SM 7次 | 1984 | I~IV期流路、II期竪穴住居跡・掘立柱建物跡、IV期柱穴 | | 7 |
| 16 | 城ノ前 | SM 8次 | 1984 | | | 7 |
| 17 | 城ノ前 | SM 9次 | 1984 | | | 7 |
| 18 | 城ノ前 | SM 11次 | 1984 | II期竪穴住居跡・土坑・溝・柱穴、IV期土坑・溝 | | 7 |
| 19 | 城ノ前 | SM 12次 | 1985 | I期土器棺墓、II期竪穴住居跡、IV期掘立柱建物跡 | | 8 |
| 20 | 城ノ前 | SM 13次 | 1985 | II期竪穴住居跡・土坑・柱穴群 | | 8 |
| 21 | 城ノ前 | SM 14次 | 1985 | I期竪穴住居跡、II期竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑墓 | | 8 |
| 22 | 城ノ前 | SM 15次 | 1985 | II期竪穴住居跡・土坑・溝・柱穴 | | 8 |
| 23 | 城ノ前 | SM 16次 | 1985 | II期掘立柱建物跡・土坑、IV期土坑・溝・柱穴 | | 8 |
| 24 | 岸本 | KM 1次 | 1985 | II期竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝、IV期溝 | | 8 |
| 25 | 下山田 | SY 1次 | 1986 | II~III期掘立柱建物跡 | | 9 |
| 26 | 城ノ前 | SM 17次 | 1986 | II期竪穴住居跡・溝、III~IV期柱穴群 | | 9 |
| 27 | 城ノ前 | SM 18次 | 1986 | II期竪穴住居跡、IV期溝 | | 9 |
| 28 | 城ノ前 | SM 19次 | 1986 | I期竪穴住居跡 | | 9 |
| 29 | 城ノ前 | SM 20次 | 1986 | I期流路 | | 9 |
| 30 | 城ノ前 | SM 21次 | 1986 | II期竪穴住居跡、IV期掘立柱建物跡 | | 9 |
| 31 | 城ノ前 | SM 22次 | 1986 | II期竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝 | | 9 |
| 32 | 城ノ前 | SM 23次 | 1986 | I期掘立柱建物跡、II期竪穴住居跡、IV期掘立柱建物跡 | | 9 |
| 33 | 上山田 | UY 1次 | 1986 | なし | | 9 |
| 34 | 下山田 | SY 2次 | 1987 | II~III期掘立柱建物跡 | | 10 |
| 35 | 城ノ前 | SM 24次 | 1987 | I期集石墓、II期竪穴住居跡・掘立柱建物跡、IV期掘立柱建物跡 | | 10 |
| 36 | 下山田 | SY 3次 | 1987 | | | 10 |
| 37 | 城ノ前 | SM 25次 | 1987 | II期竪穴住居跡・柱穴群、II~III期溝・流路 | | 10 |
| 38 | 大蔵 | OR 2次 | 1987 | I期流路、II期掘立柱建物跡 | | 10 |
| 39 | 城ノ前 | SM 26次 | 1987 | I期流路、II期竪穴住居跡 | | 10 |
| 40 | 大蔵 | OR 3次 | 1987 | I期竪穴住居跡・土坑、III期掘立柱建物跡 | | 10 |
| 41 | 城ノ前 | SM 27次 | 1987 | I期流路、IV期掘立柱建物・土坑 | | 10 |
| 42 | 城ノ前 | (SM 28次) | 1987 | なし | | 10 |
| 43 | 岸本 | KM 2次 | 1987 | I期竪穴住居跡、II~III期土坑 | | 10 |
| 44 | 地蔵元 | JM 3次 | 1987 | II期竪穴住居跡・土坑、IV期溝 | | 10 |
| 45 | 城ノ前 | SM 28次 | 1988 | I期竪穴住居跡、II期竪穴住居跡 | | 11 |
| 46 | 御影中町 | MN 2次 | 1988 | II期竪穴住居跡・掘立柱建物跡・祭祀土坑、III期柱穴群 | | 11 |
| 47 | 御影中町 | MN 3次 | 1988 | II期水田跡 | | 12 |
| 48 | 大蔵 | OR 4次 | 1989 | I期流路、II~III区土坑・柱穴 | | 13 |
| 49 | 御影中町 | MN 4次 | 1989 | I期周溝墓、II期竪穴住居跡・掘立柱建物跡、IV期掘立柱建物跡 | | 14 |
| 50 | 篠ノ坪 | ST 1次 | 1989 | I~II期流路 | | 13 |
| 51 | 城ノ前 | SM ①次 | 1990 | II期竪穴住居跡・溝、IV期石垣遺構・柱穴群 | | 15 |
| 52 | 城ノ前 | SM ②次 | 1990 | | | 16 |
| 53 | 城ノ前 | SM ③次 | 1990 | | | |
| 54 | 城ノ前 | SM 30次 | 1990 | II期土坑・柱穴、IV期土坑・溝・柱穴・流路 | | 17 |

第4表 郡家遺跡調査一覧表(2)

| 総次数 | 地区 | 地区次数 | 年度 | 調査概要 | 備考 | 文献 |
|-----|------|---------|------|-----------------------------|----|----|
| 55 | 城ノ前 | SM④次 | 1991 | I期掘立柱建物跡・土抗・溝・柱穴 | | 18 |
| 56 | 篠ノ坪 | S T 2次 | 1991 | I期堅穴住居跡・溝・柱穴・流路 | | 18 |
| 57 | 篠ノ坪 | S T 3次 | 1991 | I期流路・IV期土抗 | | 18 |
| 58 | 御影中町 | MN 5次 | 1991 | II期堅穴住居跡・土抗・流路、III期土抗・溝 | | 18 |
| 59 | 篠ノ坪 | S T 4次 | 1991 | I期溝 | | 18 |
| 60 | 篠ノ坪 | S T 5次 | 1992 | I期堅穴住居跡・土抗・溝・流路、II期堅穴住居跡・流路 | | 19 |
| 61 | 篠ノ坪 | S T 6次 | 1992 | I期流路、II期堅穴住居跡、IV期柱穴 | | 19 |
| 62 | 篠ノ坪 | S T 7次 | 1992 | II期流路 | | 19 |
| 63 | 篠ノ坪 | S T 8次 | 1992 | I期流路、II期土抗 | | 19 |
| 64 | 篠ノ坪 | S T 9次 | 1992 | | | 19 |
| 65 | 篠ノ坪 | S T 10次 | 1993 | I期溝、II期掘立柱建物跡・流路 | | 20 |
| 66 | 下山田 | S Y 4次 | 1993 | I～II期柱穴・流路、II期古墳、IV期掘立柱建物跡 | | 21 |
| 67 | 篠ノ坪 | S T 11次 | 1993 | I期流路、II期溝・流路 | | 21 |
| 68 | 篠ノ坪 | S T 12次 | 1993 | I期溝 | | 21 |
| 69 | 岸本 | KM 3次 | 1994 | II期掘立柱建物跡・土抗・溝 | | 22 |
| 70 | 篠ノ坪 | S T 13次 | 1995 | II期掘立柱建物跡・溝・柱穴、II～III期柱穴・流路 | | 23 |
| 71 | 大蔵 | O R 5次 | 1995 | II期柱穴、IV期溝・柱穴 | | 23 |
| 72 | 城ノ前 | SM32次 | 1995 | I～IV期流路 | | 23 |
| 73 | 城ノ前 | SM33次 | 1995 | I期堅穴住居跡、II期堅穴住居跡・掘立柱建物跡・溝 | | 23 |
| 74 | 城ノ前 | SM34次 | 1995 | II～IV期流路 | | 23 |
| 75 | 御影中町 | MN 6次 | 1996 | IV期土抗・柱穴 | | 24 |
| 76 | 篠ノ坪 | S T 14次 | 1996 | II期堅穴住居跡 | | 24 |
| 77 | 城ノ前 | SM35次 | 1997 | I期堅穴住居跡、II期堅穴住居跡・掘立柱建物跡 | | 25 |
| 78 | 城ノ前 | SM36次 | 1997 | I～IV期土抗・落ち込み・柱穴 | | 25 |
| 79 | 城ノ前 | SM37次 | 1997 | II期堅穴住居跡、III期掘立柱建物跡 | | 25 |
| 80 | 城ノ前 | SM38次 | 1997 | I期土抗・溝・柱穴、II期流路、IV期探石跡 | | 25 |
| 81 | 大蔵 | O R 6次 | 1997 | II～IV期流路 | | 25 |

参考文献

- (1) 古川久雄 1995「住吉川右岸扇状地における遺跡分布の様相」六甲山麓遺跡調査会『郡家遺跡—篠坪地区第10次調査』
- (2) 安田滋 2001「まとめ 「住吉宮町古墳群」について」神戸市教育委員会『住吉宮町遺跡第24次・第32次調査報告書』
- (3) 神戸市立考古館1980『地下にねむる神戸の歴史展—発掘現場からの報告』
- (4) 神戸市教育委員会 1983『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (5) 神戸市教育委員会 1985『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (6) 神戸市教育委員会 1986『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (7) 神戸市教育委員会 1987『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (8) 神戸市教育委員会 1988『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (9) 神戸市教育委員会 1989『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (10) 神戸市教育委員会 1990『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (11) 神戸市教育委員会 1994『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (12) 神戸市教育委員会 1990『郡家遺跡』
- (13) 神戸市教育委員会 1992『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (14) 大手前女子大学史学研究所 1992『郡家遺跡—御影中町地区第4次調査』
- (15) 淡神文化財協会 1990『淡神文化財協会ニュース』創刊号
- (16) 淡神文化財協会 1990『淡神文化財協会ニュース』2～5号
- (17) 神戸市教育委員会 1993『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (18) 神戸市教育委員会 1994『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (19) 神戸市教育委員会 1995『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (20) 六甲山麓遺跡調査会 1995『郡家遺跡—篠坪地区第10次調査』
- (21) 神戸市教育委員会 1996『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (22) 神戸市教育委員会 1997『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (23) 神戸市教育委員会 1998『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (24) 神戸市教育委員会 1999『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』
- (25) 神戸市教育委員会 2000『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』

第5表 住吉宮町遺跡土器観察表(1)

| 番号 | 地区 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存率 | 色調 |
|----|----|--------|------|---------|--------|--------|--------|------------------|----------|
| 1 | B | 第1面包含層 | 土師器 | 甕 | (17.8) | (9.2) | — | 口縁部～頸部1/4、体部一部 | にぶい黄橙～褐灰 |
| 2 | B | 第1面包含層 | 土製品 | 土錐 | 1.1 | 5.0 | — | 完存 | 灰黄～暗灰黄 |
| 3 | A | SK101 | 土師器 | 甕 | (31.4) | (15.5) | — | 体部1/6 | にぶい橙 |
| 4 | B | SK102 | 土師器 | 杯 | 13.8 | 3.0 | 10.8 | 完存 | にぶい橙 |
| 5 | B | SK102 | 土師器 | 杯 | 12.9 | 3.1 | 10.8 | 完存 | 橙 |
| 6 | B | SK102 | 土師器 | 甕 | — | (13.5) | — | 体部破片 | にぶい橙 |
| 7 | A | P1 | 土師器 | 壺 | (14.7) | (11.1) | — | 口縁部3/8、体部1/4 | にぶい橙 |
| 8 | B | P3 | 土師器 | 甕 | — | (6.7) | — | 体部1/6、底部1/4 | 灰黄褐 |
| 9 | B | P9 | 土師器 | 皿 | (18.5) | 2.3 | (15.8) | 口縁部～体部1/4 | 橙 |
| 10 | B | P6 | 土師器 | 皿 | (16.9) | (2.1) | (15.0) | 1/8残存 | にぶい橙 |
| 11 | B | P2 | 土師器 | 皿 | (16.9) | 2.3 | 15.5 | 1/4残存 | 橙 |
| 12 | B | P8 | 土師器 | 杯A | (12.7) | 2.7 | 10.3 | 1/6残存 | 橙 |
| 13 | B | P7 | 土師器 | 甕 | (26.1) | (5.2) | — | 口縁部1/4 | にぶい黄橙 |
| 14 | B | P5 | 須恵器 | 壺 | (7.3) | (5.8) | — | 口縁部1/2、頸部3/4 | 灰白～灰 |
| 15 | B | P4 | 瓦 | 平瓦 | — | — | — | — | 灰～浅黄 |
| 16 | A | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯蓋 | (13.5) | (3.2) | — | 口縁部～体部1/4 | にぶい黄 |
| 17 | A | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯H | 12.6 | 3.7 | — | ほぼ完存 | 綠灰 |
| 18 | A | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯H | (13.9) | 4.5 | — | 口縁部1/3、体部1/2 | 灰 |
| 19 | A | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯H | 13.3 | 4.6 | — | ほぼ完存 | 灰 |
| 20 | A | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯H | 13.3 | 4.55 | — | ほぼ完存 | 灰 |
| 21 | A | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯H | 12.5 | 3.8 | — | 口縁部～体部3/4 | 黄灰 |
| 22 | A | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯H | (13.9) | 3.6 | — | 口縁部極一部、体部から底部7/8 | 灰 |
| 23 | A | 第2面包含層 | 須恵器 | 提瓶 | — | (13.0) | — | 体部1/4 | 灰 |
| 24 | A | 第2面包含層 | 弥生土器 | 甕 | (14.8) | (23.0) | — | 1/2残存 | にぶい橙 |
| 25 | A | 第2面包含層 | 弥生土器 | 甕 | 7.3 | 7.5 | 2.6 | 口縁部1/2、その他の完存 | にぶい黄橙 |
| 26 | A | 第2面包含層 | 土製品 | ミニチュア土器 | (3.2) | 2.8 | 2.4 | ほぼ完存 | にぶい黄橙 |
| 27 | A | 第2面包含層 | 弥生土器 | 壺 | (14.6) | (7.6) | — | 口縁部3/4 | にぶい橙 |
| 28 | A | 第2面包含層 | 弥生土器 | 壺 | — | (20.0) | (5.6) | 体部～底部1/3 | 浅黄橙 |
| 29 | A | 第2面包含層 | 土師器 | 高杯 | (14.4) | 11.4 | (10.5) | 杯部ほぼ完存、脚部2/3 | 明赤褐～浅黄橙 |
| 30 | A | 第2面包含層 | 弥生土器 | 器台 | 10.5 | (3.5) | — | 体部3/4 | にぶい橙 |
| 31 | A | 第2面包含層 | 弥生土器 | 脚付鉢 | (12.7) | (7.3) | (6.4) | 体部1/4、脚部1/2 | にぶい黄橙 |
| 32 | A | 第2面包含層 | 土製品 | 土錐 | 2.0 | 7.2 | — | 完存 | 橙 |
| 33 | A | 第2面包含層 | 土製品 | 土錐 | 1.2 | 7.1 | — | 完存 | にぶい橙 |
| 34 | A | 第2面包含層 | 土製品 | 土錐 | 1.9 | 7.5 | — | 完存 | 黄灰 |
| 35 | A | 第2面包含層 | 土製品 | 土錐 | 1.5 | (4.3) | — | 1/2残存 | にぶい黄橙 |
| 36 | A | 第2面包含層 | 土製品 | 土錐 | 1.9 | (4.1) | — | 1/2残存 | にぶい黄橙 |
| 37 | A | 第2面包含層 | 土製品 | 土錐 | 2.1 | (4.1) | — | 1/2残存 | 灰黄～黒 |
| 38 | A | 第2面包含層 | 土製品 | 土錐 | 1.4 | (5.2) | — | 1/2残存 | にぶい黄橙 |
| 39 | B | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯B | (12.5) | 4.1 | 8.0 | 口縁部2/3、体部完存 | 明オリーブ灰 |
| 40 | B | 第2面包含層 | 須恵器 | 杯H | (14.0) | (4.7) | — | 口縁部～体部1/4 | 灰 |
| 41 | B | 第2面包含層 | 須恵器 | 有蓋高杯 | (12.8) | (13.0) | — | 体部～脚柱部ほぼ完存 | 灰白～灰 |
| 42 | B | 第2面包含層 | 須恵器 | 壺 | — | (16.9) | — | 体部～底部1/2 | 灰～灰白 |
| 43 | B | 第2面包含層 | 須恵器 | 壺 | (22.2) | (8.3) | — | 口縁部1/8、頸部1/4 | 灰黄～灰白 |
| 44 | B | 第2面包含層 | 土師器 | 甕 | (23.2) | (10.1) | — | 口縁部～体部1/4 | にぶい黄橙～黄褐 |
| 45 | B | 第2面包含層 | 弥生土器 | 甕 | (13.0) | (8.2) | — | 口縁部～体部1/8 | 橙～褐灰 |
| 46 | B | 第2面包含層 | 埴輪 | 円筒 | (21.9) | (18.5) | — | 1/4残存 | にぶい橙 |

| 番号 | 調 整 ・ 技 法 | 備 考 | 挿図番号 |
|----|--|----------|------|
| 1 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整／内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整 | | 第12図 |
| 2 | | 7.6g | 第12図 |
| 3 | 外面：縦方向の板ナデ／内面：板ナデ | | 第19図 |
| 4 | 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指頭圧痕残る／内面：回転ナデ・1方向の仕上げナデ | | 第21図 |
| 5 | 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指頭圧痕残る／内面：回転ナデ | | 第21図 |
| 6 | 外面：ハケ調整／内面：板ナデ | | 第21図 |
| 7 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケ調整／内面：口縁部～体部ハケ調整 | | 第23図 |
| 8 | 外面：調整不明／内面：ハケ調整 | 底部外面スス付着 | 第23図 |
| 9 | 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・指頭圧痕残る／内面：回転ナデ・底部多方向仕上げナデ | | 第23図 |
| 10 | 外面：体部回転ナデ、底部ナデ／内面：回転ナデ | | 第23図 |
| 11 | 外面：体部回転ナデ、底部ヘラ削り／内面：回転ナデ・ヘラミガキ | | 第23図 |
| 12 | 外面：体部回転ナデ、底部ナデ／内面：回転ナデ | | 第23図 |
| 13 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整／内面：口縁部ハケ調整、体部板ナデ | | 第23図 |
| 14 | 外面：回転ナデ／内面：回転ナデ | | 第23図 |
| 15 | 外面：布目痕／内面：繩目タタキ | | 第23図 |
| 16 | 外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ／内面：回転ナデ、天井部多方向の仕上げナデ | | 第26図 |
| 17 | 外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ／内面：回転ナデ、底部一方向の仕上げナデ | | 第26図 |
| 18 | 外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ／内面：回転ナデ、底部一方向の仕上げナデ | | 第26図 |
| 19 | 外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ／内面：回転ナデ、底部一方向の仕上げナデ | | 第26図 |
| 20 | 外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ／内面：回転ナデ、底部一方向の仕上げナデ | | 第26図 |
| 21 | 外面：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ／内面：回転ナデ、底部多方向の仕上げナデ | | 第26図 |
| 22 | 外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ／内面：回転ナデ | | 第26図 |
| 23 | 外面：頸部回転ナデ、体部カキ目／内面：体部回転ナデ | | 第26図 |
| 24 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部上半タタキ、体部下半ユビナデ・ユビオサエ痕あり／内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整 | | 第26図 |
| 25 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、底部ナデ／内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ | | 第26図 |
| 26 | 外面：調整不明／内面：ヨコナデ？ | 手づくね成形 | 第26図 |
| 27 | 外面：口縁部ヨコナデ、口縁部ハケ調整のちヨコナデ、体部ヘラミガキ／内面：口縁部～体部ハケ調整 | | 第26図 |
| 28 | 外面：体部ヘラミガキ、底部ヨコナデ／内面：板ナデ | | 第26図 |
| 29 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整のちヨコナデ、脚部ヨコナデ／内面：体部ヨコナデ、脚部ヘラケズリのちハケ調整 | | 第26図 |
| 30 | 外面：受け部ヘラミガキ／内面：受け部ヘラミガキ | | 第26図 |
| 31 | 外面：体部～脚部ヘラミガキ、脚端部ヨコナデ／内面：体部ヘラミガキ、脚部ヨコナデ | | 第26図 |
| 32 | | 23.8g | 第26図 |
| 33 | | 13.7g | 第26図 |
| 34 | | 34.4g | 第26図 |
| 35 | | 10.4g | 第26図 |
| 36 | | 15.7g | 第26図 |
| 37 | | 19.7g | 第26図 |
| 38 | | 13.4g | 第26図 |
| 39 | 外面：回転ナデ／内面：回転ナデ、底部1方向の仕上げナデ | 貼り付け高台 | 第27図 |
| 40 | 外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ／内面：回転ナデ | | 第27図 |
| 41 | 外面：体部回転ナデ・回転ヘラ削り、脚柱部回転ナデ／内面：体部回転ナデ・1方向の仕上げナデ | | 第27図 |
| 42 | 外面：体部上半カキメ、体部下半～底部タタキ／内面：体部上半ナデ、体部下半～底部同心円文タタキ | | 第27図 |
| 43 | 外面：口縁部回転ナデ、体部タタキ／内面：口縁部回転ナデ、体部同心円文タタキ | | 第27図 |
| 44 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整／内面：口縁部ヨコナデ、体部調整不明 | | 第27図 |
| 45 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキのちハケ調整／内面：口縁部ヨコナデ、体部調整不明 | | 第27図 |
| 46 | 外面：体部ヨコハケ、タガヨコハケのちヨコナデ／内面：体部上部ヨコハケ、ユビオサエ痕 | | 第27図 |

第5表 住吉宮町遺跡土器観察表(2)

| 番号 | 地区 | 出土位置 | 種別 | 器種 | 口径 | 器高 | 底径 | 残存率 | 色調 |
|----|----|-----------|------|-------|--------|--------|--------|------------------|----------|
| 47 | B | 第2面包含層 | 埴輪 | 円筒 | — | (8.9) | — | 体部破片 | 浅黄橙 |
| 48 | B | 第2面包含層 | 埴輪 | 円筒 | — | (10.1) | — | 体部破片 | にぶい橙 |
| 49 | B | 第2面包含層 | 埴輪 | 円筒 | — | (8.7) | — | 体部破片 | にぶい黄橙 |
| 50 | A | 第3面包含層 | 土師器 | 二重口縁壺 | (24.1) | (10.3) | — | 口縁部1/12、頸部1/6 | にぶい褐 |
| 51 | A | 第3面包含層 | 土師器 | 二重口縁壺 | (17.8) | (9.7) | — | 口縁部1/4、頸部1/2 | にぶい橙 |
| 52 | A | 第3面包含層 | 土師器 | 壺 | (14.4) | (13.4) | — | 口縁部～頸部3/4、体部1/4 | にぶい橙 |
| 53 | A | 第3面包含層 | 弥生土器 | 鉢? | (15.5) | (6.9) | — | 口縁部～体部1/4 | 橙 |
| 54 | B | 第3面包含層 | 弥生土器 | 甕 | (17.8) | (6.4) | — | 口縁部～体部1/4 | にぶい黄橙 |
| 55 | B | 第3面包含層 | 弥生土器 | 壺 | — | (10.2) | 2.9 | 体部1/2、底部完存 | にぶい橙 |
| 56 | B | 第3面包含層 | 弥生土器 | 壺? | — | (20.3) | 1.2 | 体部～底部1/2 | にぶい黄橙～暗灰 |
| 57 | B | 第3面包含層 | 弥生土器 | 二重口縁壺 | 20.7 | (7.3) | — | 口縁部3/4、底部完存 | にぶい黄橙 |
| 58 | B | 第3面包含層 | 土師器 | 広口壺 | (12.5) | (7.5) | — | 口縁部～頸部1/4 | にぶい橙 |
| 59 | B | 第3面包含層 | 弥生土器 | 台付鉢 | — | (7.9) | (9.6) | 体部一部、脚部1/2 | にぶい黄橙 |
| 60 | B | 第3面包含層 | 弥生土器 | 鉢 | (32.0) | (7.1) | — | 口縁部1/4、体部一部 | にぶい褐 |
| 61 | B | 第3面包含層 | 弥生土器 | 鉢? | (19.0) | 7.2 | — | 1/4残存 | にぶい黄橙 |
| 62 | B | 第3面包含層 | 土師器 | 鉢か高杯 | (18.8) | (7.9) | — | 口縁部～体部3/8 | にぶい橙～橙 |
| 63 | B | 第3面土器溜まりA | 弥生土器 | 有孔鉢 | (13.2) | 9.9 | 2.9 | 1/2残存 | にぶい橙 |
| 64 | B | 第3面土器溜まりA | 弥生土器 | 甕か有孔鉢 | — | (3.9) | 4.3 | 底部完存 | にぶい黄橙～灰 |
| 65 | B | 第3面土器溜まりA | 弥生土器 | 壺 | (15.0) | (5.8) | — | 口縁部1/2、頸部ほぼ完存 | にぶい黄橙 |
| 66 | B | 第3面土器溜まりA | 弥生土器 | 壺 | (14.0) | (11.2) | — | 口縁部～体部1/2 | 明褐灰～褐灰 |
| 67 | B | 第3面土器溜まりA | 弥生土器 | 壺 | (14.2) | (5.7) | — | 口縁部～頸部1/4 | にぶい橙～浅黄橙 |
| 68 | B | 第3面土器溜まりA | 弥生土器 | 高杯 | — | 18.0 | 13.2 | 脚柱部～脚部2/3 | 明赤褐～橙 |
| 69 | B | 第3面土器溜まりB | 弥生土器 | 壺 | — | (9.8) | 3.8 | 体部1/4、底部完存 | にぶい橙～灰 |
| 70 | B | 第3面土器溜まりB | 土師器 | 甕 | 12.4 | 14.0 | — | 口縁部3/4、体部～底部2/3 | にぶい橙～褐灰 |
| 71 | B | 第3面土器溜まりB | 土師器 | 甕 | (13.2) | (18.5) | — | 口縁部2/3、体部1/3 | 灰～暗灰 |
| 72 | B | 第3面土器溜まりB | 弥生土器 | 壺? | — | (8.9) | (6.2) | 底部ほぼ完存 | にぶい橙 |
| 73 | B | 第3面土器溜まりB | 弥生土器 | 壺 | 15.7 | 30.5 | 3.8 | 体部2/3、底部完存 | にぶい橙 |
| 74 | B | 第3面土器溜まりB | 弥生土器 | 壺 | — | (27.2) | 3.4 | 体部3/4、底部完存 | にぶい橙～浅黄橙 |
| 75 | B | 第3面土器溜まりC | 弥生土器 | 壺 | (18.6) | (25.3) | — | 口縁部～頸部1/4、体部1/3 | にぶい黄橙 |
| 76 | B | 第3面土器溜まりC | 弥生土器 | 高杯 | (18.1) | (6.0) | — | 杯部ほぼ完存 | にぶい橙 |
| 77 | B | 第3面土器溜まりC | 土製品 | 土鍤 | 3.8 | 9.3 | — | ほぼ完存 | 浅黄橙 |
| 78 | A | S H301 | 土師器 | 甕 | (14.0) | (8.7) | — | 口縁部1/8、体部1/4 | にぶい黄橙 |
| 79 | A | S H301 | 弥生土器 | 高杯 | — | (7.6) | — | 脚柱部1/4 | にぶい黄橙 |
| 80 | B | S H303 | 弥生土器 | 甕 | 17.7 | 23.0 | (5.8) | 口縁部1/2、体部～底部1/4 | 褐灰 |
| 81 | B | S H309 | 弥生土器 | 甕 | (16.0) | 25.0 | 4.2 | 口縁部1/2、体部1/4 | にぶい橙 |
| 82 | B | S H309 | 土師器 | 甕 | 15.2 | 25.1 | 2.1 | 口縁部～体部3/4、底部ほぼ完存 | にぶい黄橙～褐灰 |
| 83 | B | S H309 | 弥生土器 | 甕 | 11.4 | 16.9 | (3.7) | 口縁部～体部1/2、底部1/6 | にぶい黄橙 |
| 84 | B | S H309 | 弥生土器 | 壺 | 14.4 | 27.7 | (5.0) | 口縁部1/2、頸部～底部完存 | にぶい黄橙 |
| 85 | B | S H309 | 弥生土器 | 壺? | — | (7.6) | — | 体部破片 | にぶい黄橙 |
| 86 | B | S H309 | 弥生土器 | 高杯 | — | (8.2) | — | 体部のみ | 浅黄橙 |
| 87 | B | S H309 | 弥生土器 | 高杯 | — | (6.1) | (10.5) | 脚部完存 | にぶい黄橙 |
| 88 | A | S K301 | 弥生土器 | 甕 | (14.8) | (13.6) | — | 口縁部1/2、体部1/3 | にぶい黄橙～褐灰 |
| 89 | A | S K301 | 弥生土器 | 壺? | — | (2.8) | (3.8) | 底部完存 | にぶい橙 |
| 90 | A | S K301 | 弥生土器 | 甕? | — | (3.2) | (3.0) | 底部完存 | にぶい赤褐 |
| 91 | A | S K301 | 弥生土器 | 高杯 | 22.0 | (6.5) | — | 杯部2/3 | にぶい橙 |
| 92 | A | S K301 | 弥生土器 | 甕か鉢 | (38.6) | (10.1) | — | 口縁部1/4 | 橙 |

※単位はcm、()の数値は口径が復元長、器高が残存長

※土鍤については口径が最大径、器高が全長

| 番号 | 調整・技法 | 備考 | 挿図番号 |
|----|---|-----------|------|
| 47 | 外面：タテハケ、タガヨコナデ／内面：ユビオサエ痕 | | 第27図 |
| 48 | 外面：タテハケのちヨコハケ／内面：タテハケ、ユビオサエ痕 | | 第27図 |
| 49 | 外面：ヨコナデ／内面：調整不明 | | 第27図 |
| 50 | 外面：口縁部～頸部ヨコナデ／内面：口縁部～頸部ヨコナデ、口縁部ユビオサエ痕あり | | 第32図 |
| 51 | 外面：口縁部～頸部ヨコナデ／内面：口縁部ヨコナデ | | 第32図 |
| 52 | 外面：口縁部ヨコナデ、頸部～体部ヘラミガキ／内面：口縁部～頸部ヘラミガキ、体部調整不明 | | 第32図 |
| 53 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ／内面：口縁端部ヨコナデ、体部調整不明 | | 第32図 |
| 54 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ／内面：口縁部～体部ヘラミガキ | | 第33図 |
| 55 | 外面：体部タタキ／内面：体部板ナデ？、底部紋込みの工具痕あり | | 第33図 |
| 56 | 外面：ハケ調整／内面：ハケ調整 | | 第33図 |
| 57 | 外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケ調整のちヨコナデ／内面：口縁部～頸部ハケ調整のちヨコナデ | | 第33図 |
| 58 | 外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケ調整／内面：口縁部ヨコナデ | | 第33図 |
| 59 | 外面：体部～胸部ヨコナデ、体部と脚部の間ユビオサエ／内面：体部調整不明、脚部縱方向のナデのちヨコナデ | | 第33図 |
| 60 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ／内面：口縁部ヘラミガキ、体部ナデ | | 第33図 |
| 61 | 外面：ヘラミガキ／内面：ヘラミガキ | | 第33図 |
| 62 | 外面：口縁端部ヨコナデ、体部ヘラミガキ／内面：底部ヘラミガキ | | 第33図 |
| 63 | 外面：口縁端部ヨコナデ、体部タタキ、底部ナデ／内面：調整不明、底部しづり込み工具痕 | | 第35図 |
| 64 | 外面：調整不明／内面：底部しづり込みの工具痕あり | 焼成前穿孔 | 第35図 |
| 65 | 外面：口縁部～頸部ヨコナデ／内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ？ | | 第35図 |
| 66 | 外面：口縁端部2列の波状文と円形浮文、頸部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、肩部波状文／内面：口縁部～頸部ヨコナデ | | 第35図 |
| 67 | 外面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ／内面：口縁部～頸部ヘラミガキ | | 第35図 |
| 68 | 外面：脚柱部～脚部ヘラミガキ／内面：脚部ヨコナデ | | 第35図 |
| 69 | 外面：体部タタキのち上半ハケ調整、底部ナデ／内面：体部下半～底部横ハケ、底部に工具痕あり | | 第37図 |
| 70 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部～底部タタキのち体部上半ヘラミガキ／内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ | | 第37図 |
| 71 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整、下半縱ハケ／内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ | | 第37図 |
| 72 | 外面：調整不明／内面：ハケ調整 | | 第37図 |
| 73 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキのちハケ調整／内面：口縁端部ヨコナデ、口縁部～体部ハケ調整 | | 第37図 |
| 74 | 外面：体部ヘラミガキ、底部ヨコナデ／内面：体部板ナデ | | 第37図 |
| 75 | 外面：口縁端部ヨコナデ、口縁部～体部ヘラミガキ／内面：口縁端部ヨコナデ、口縁部ヘラミガキ、体部板ナデ | | 第39図 |
| 76 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整／内面：調整不明 | | 第39図 |
| 77 | | 122.1g | 第39図 |
| 78 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキのちハケ調整／内面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ | | 第42図 |
| 79 | 外面：脚部ヘラミガキ／内面：脚部ナデ | | 第42図 |
| 80 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整／内面：口縁部ヨコナデ、体部上半指ナデ、下半調整不明 | | 第46図 |
| 81 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ、底部ナデ／内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ | | 第55図 |
| 82 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整／内面：口縁部ヨコナデ、体部横ハケ | 体部～底部スス付着 | 第55図 |
| 83 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ／内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整 | | 第55図 |
| 84 | 外面：口縁端部ヨコナデ、頸部調整不明、体部ヘラミガキ、底部ナデ／口縁部ヨコナデ、体部ハケ調整 | 管玉状土製品混入 | 第55図 |
| 85 | 外面：構描き直線文・波状文／内面：ナデ | | 第55図 |
| 86 | 外面：脚柱部～脚部ヘラミガキ／内面：体部ヘラミガキ、脚部ナデ | | 第55図 |
| 87 | 外面：ヘラミガキ／内面：ハケ調整 | | 第55図 |
| 88 | 外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ／内面：口縁部ヨコナデ、内面ナデ | | 第56図 |
| 89 | 外面：体部タタキ、底部ナデ／内面：体部板ナデ？ | | 第56図 |
| 90 | 外面：体部タタキ、底部ナデ／内面：体部板ナデ？、底部ナデ | | 第56図 |
| 91 | 外面：口縁端部ヨコナデ、体部ヘラミガキ／内面：体部ヘラミガキ？ | | 第56図 |
| 92 | 外面：口縁端部ヨコナデ、口縁部～体部ヘラミガキ／口縁部ヘラミガキ、体部調整不明 | | 第56図 |

写真図版

写真図版1 住吉宮町遺跡

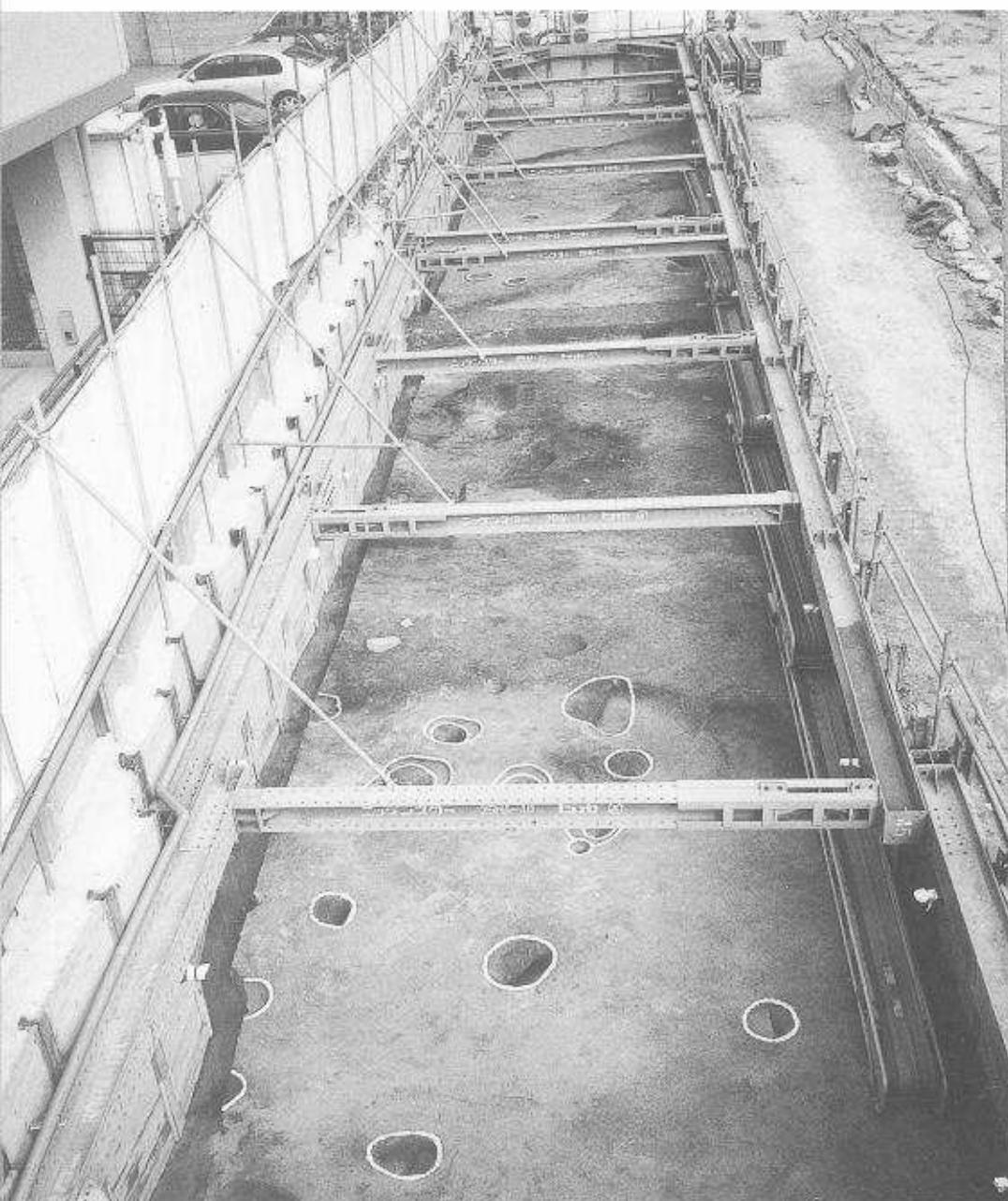


調査地遠景（北上空から）

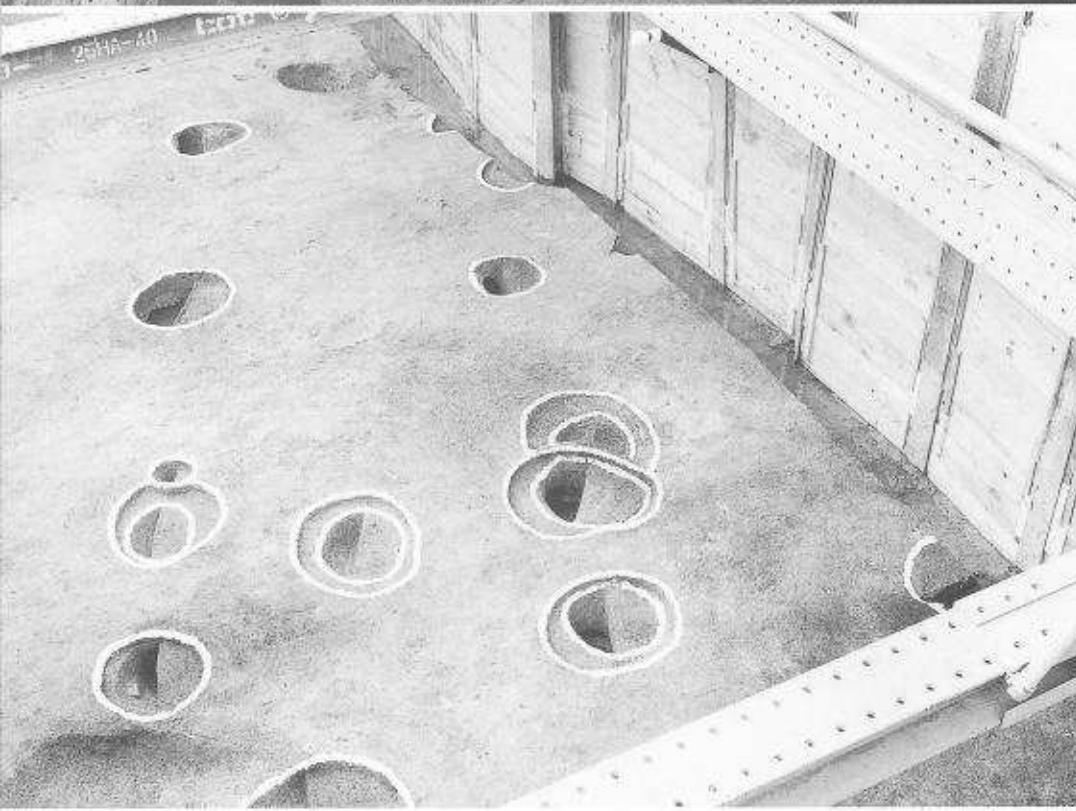


調査地遠景（北上空から）

写真図版 2 第1面・A地区



全景（西から）



S B 101 (東から)

写真図版3 第1面・B地区



全景（東から）



全景（東半）（西から）

写真図版4 第1面・B地区



S B 102 (西から)



S K 102 (西から)



S K 102土器出土状況
(東から)



B地区地滑り痕
(西から)



B地区地滑り痕
(東から)

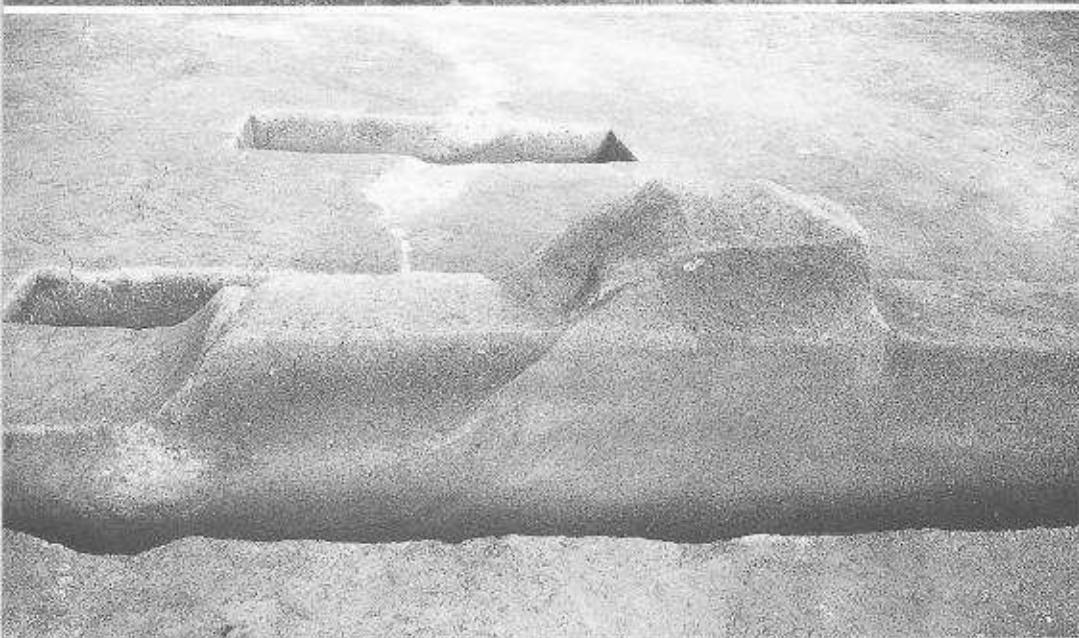


B地区地滑り痕断面
(南から)

写真図版 6 第2面



B地区地滑り痕検出
(西から)



B地区同断面
(西から)

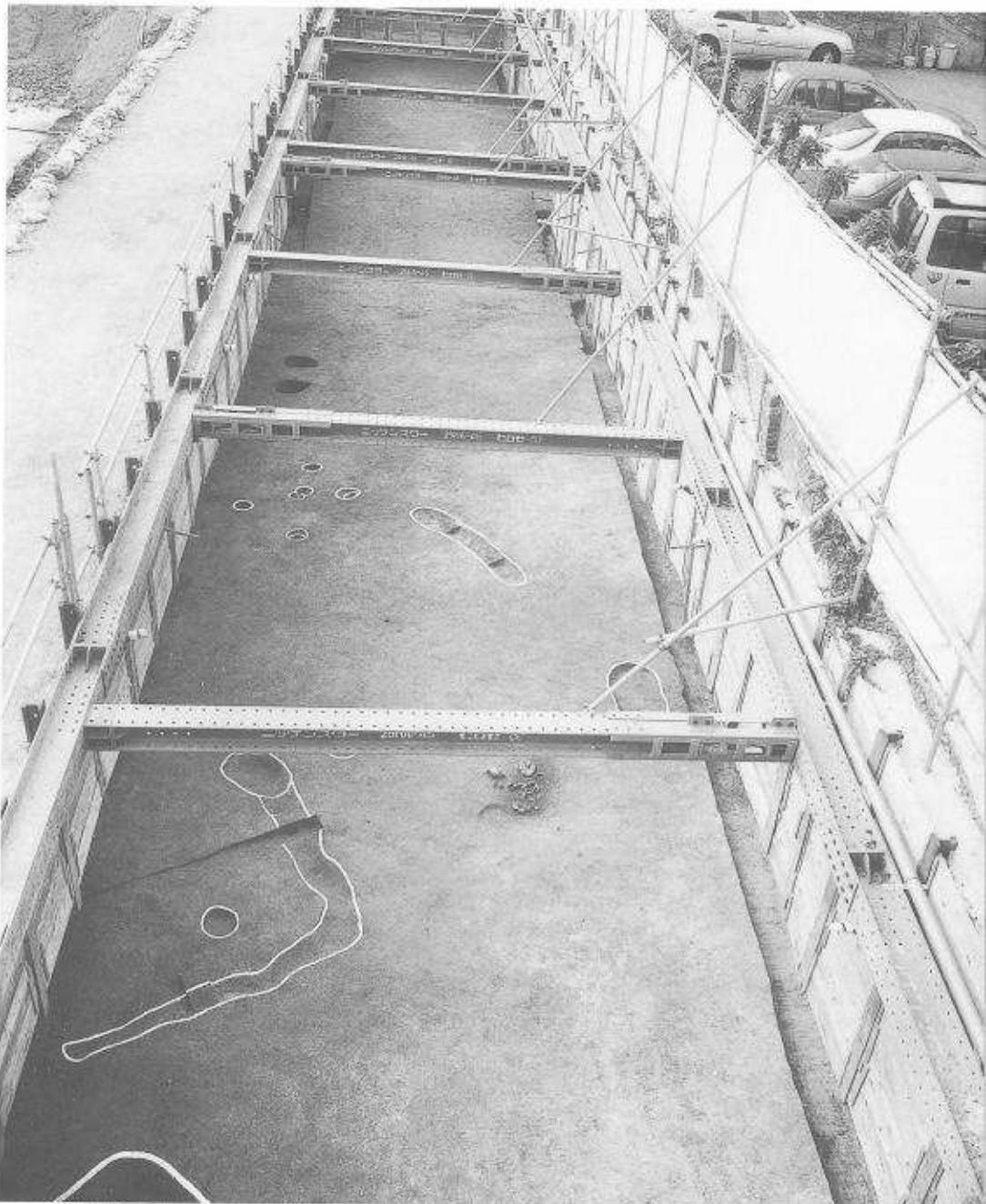


A地区地滑り痕断面 (東から)



B地区砂脈断面 (東から)

写真図版 7 第3面・A地区



全景（東から）



全景（東半）（西から）

写真図版 8 第3面・A地区



S H 301 (北西から)



S H 302 (北西から)



S K 301土器出土状況
(西から)



調査区全景（西上空から）

写真図版10 第3面・B地区



全景（東から）



全景（東半）（東から）

写真図版11 第3面・B地区



S H 303 (南から)

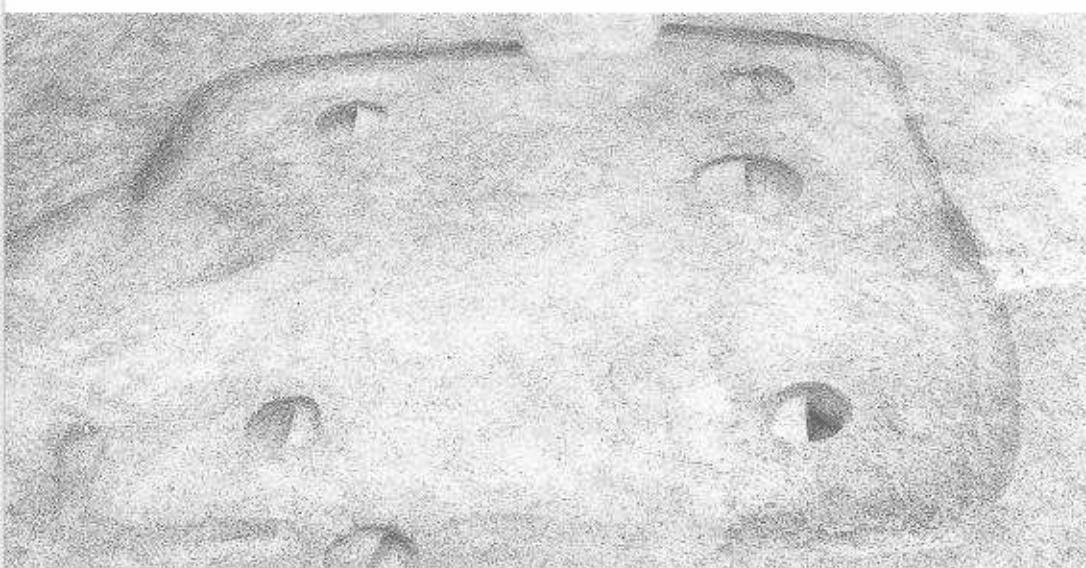


S H 304・305
(西から)



S H 306・307検出
(南から)

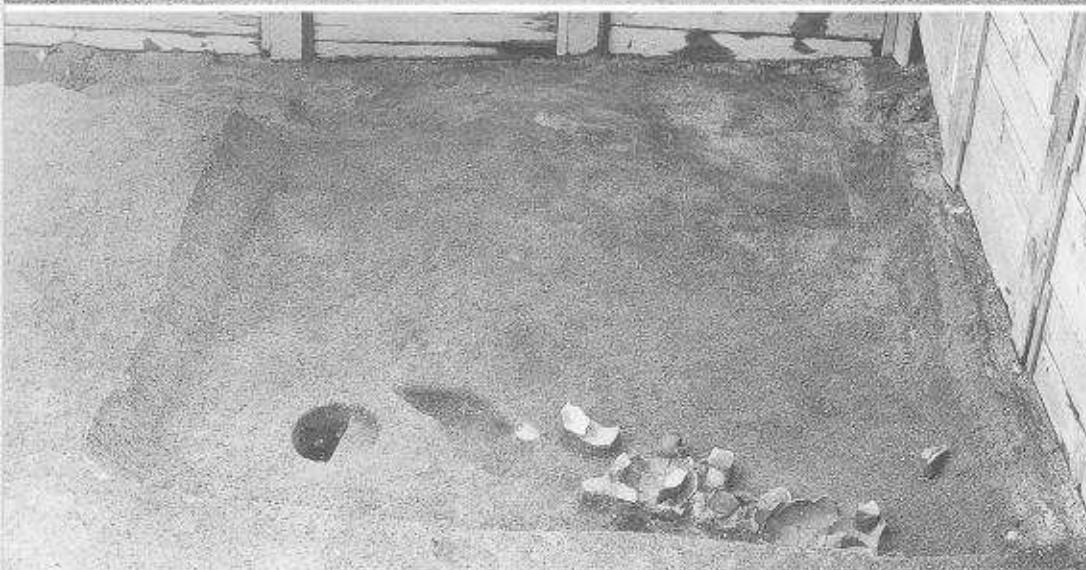
写真図版12 第3面・B地区



S H 307 (北から)



S H 308 (東から)

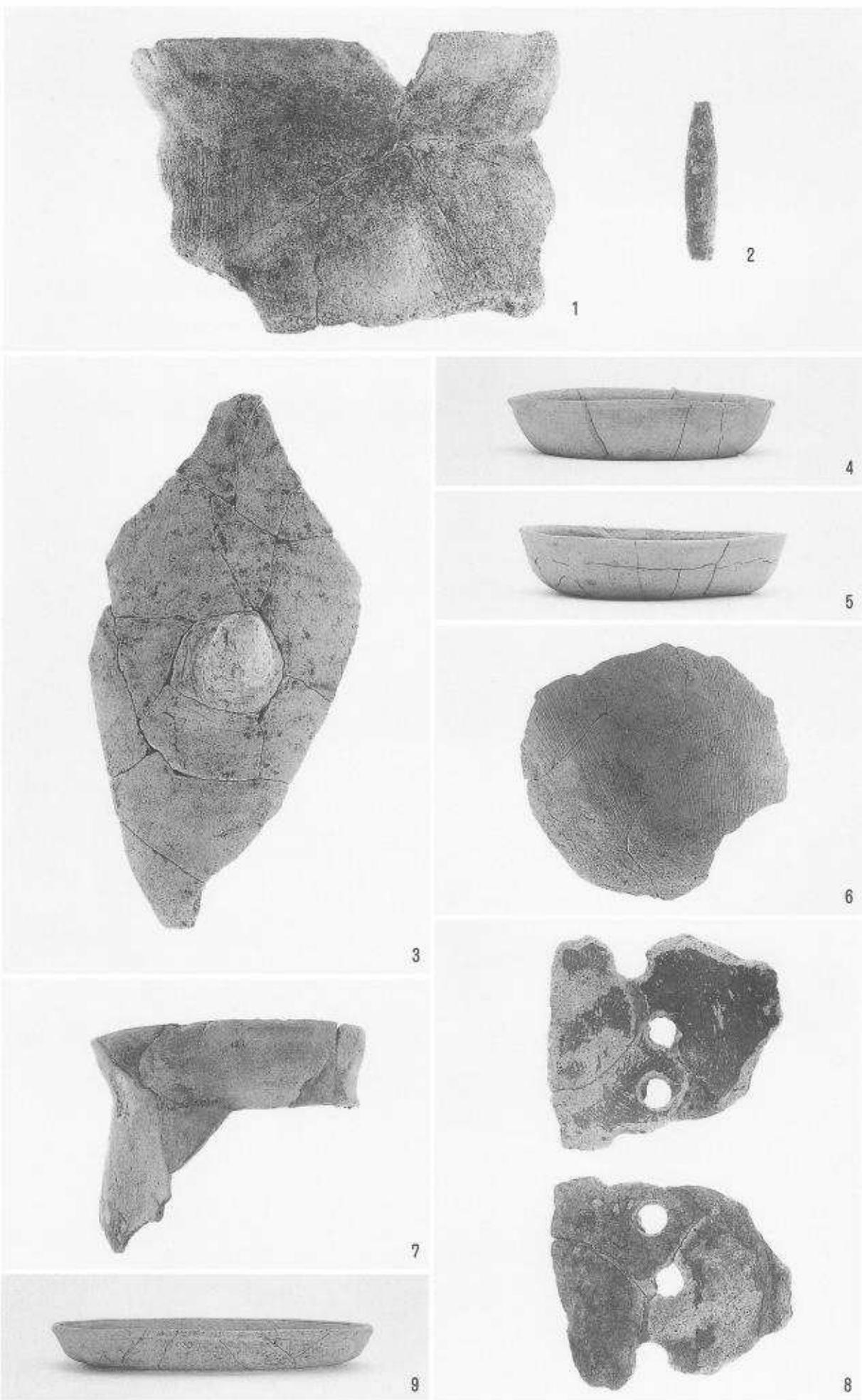


S H 309 (北から)



S H 309土器出土状況
(南から)

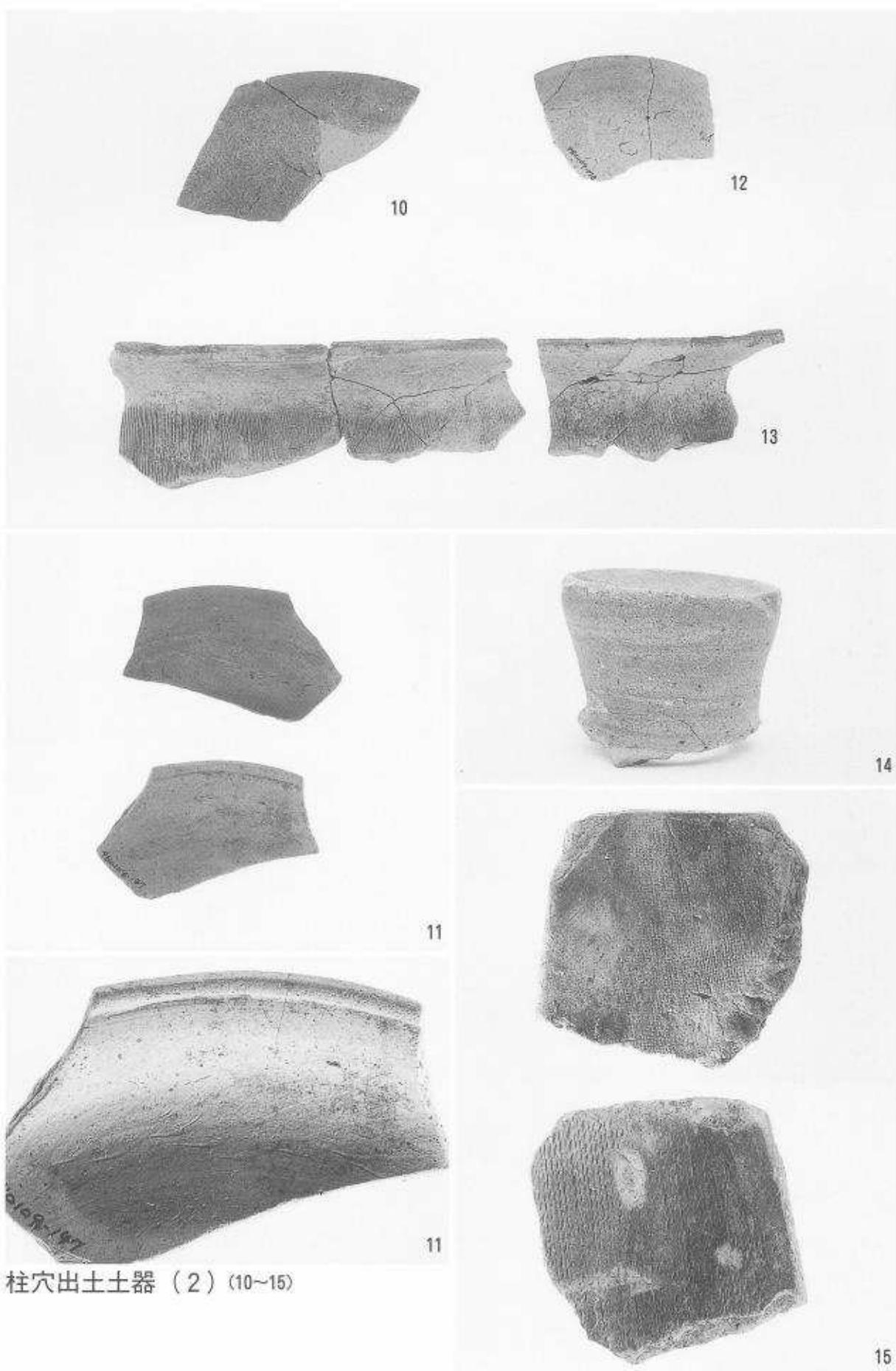
写真図版13 第1面出土遺物



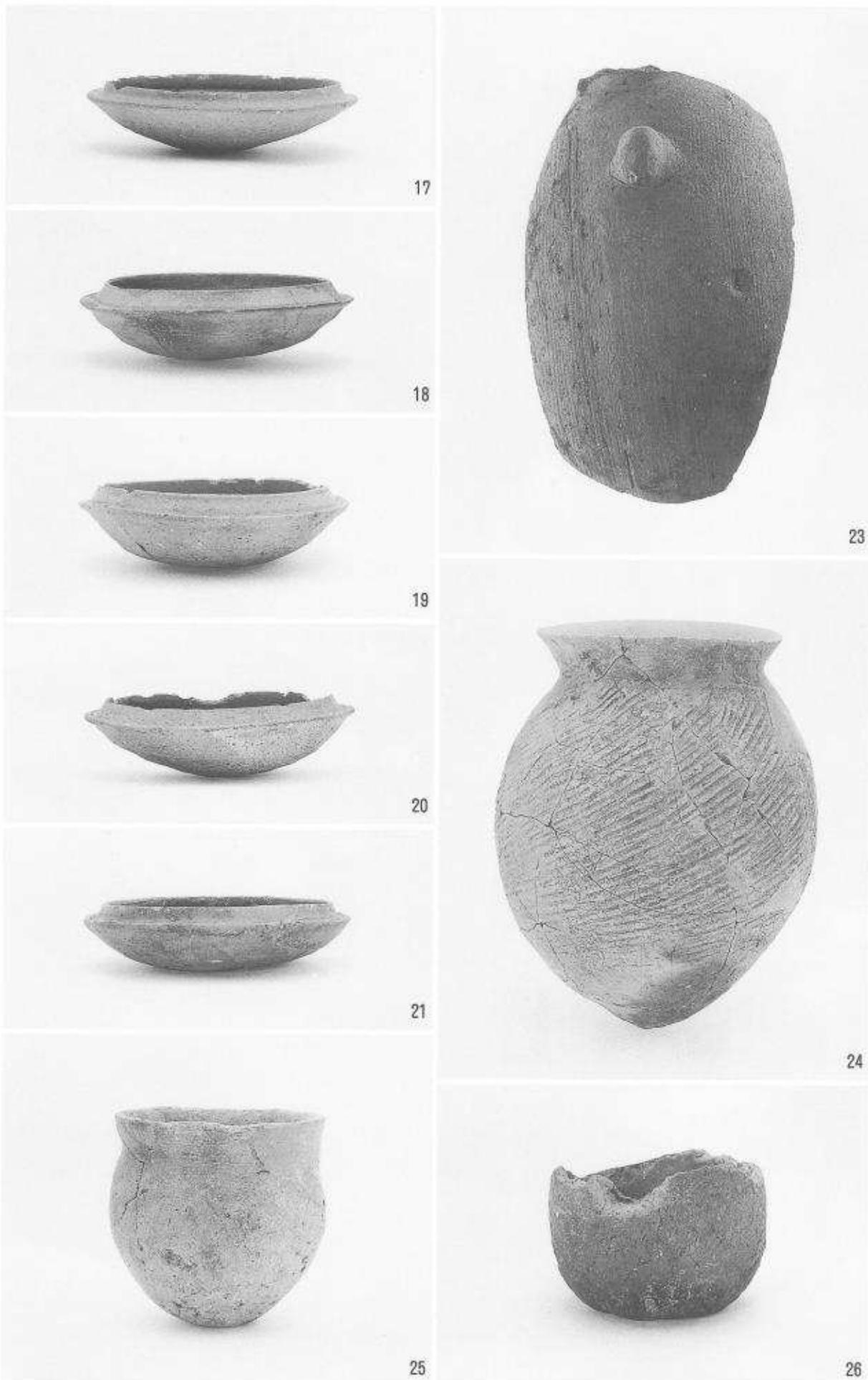
包含層出土土器（1・2）

土坑出土土器（3～6）・柱穴出土土器（1）（7～9）

写真図版14 第1面出土遺物

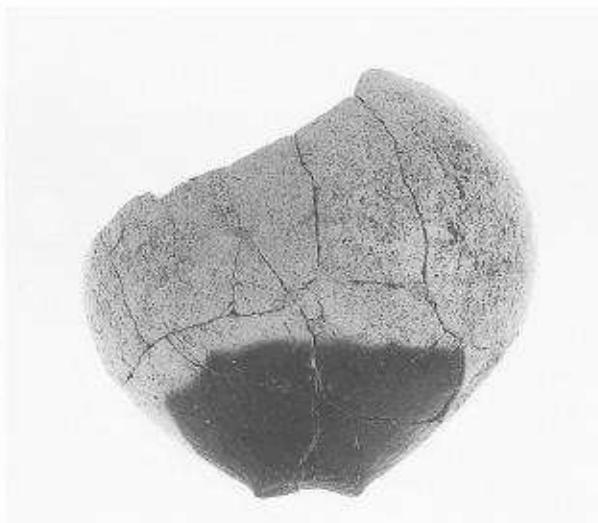


写真図版15 第2面出土遺物



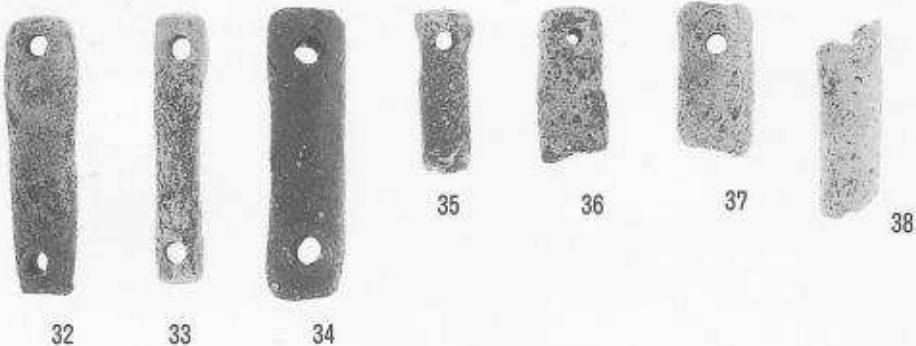
A地区包含層出土土器(1)(17~21・23~26)

写真図版16 第2面出土遺物



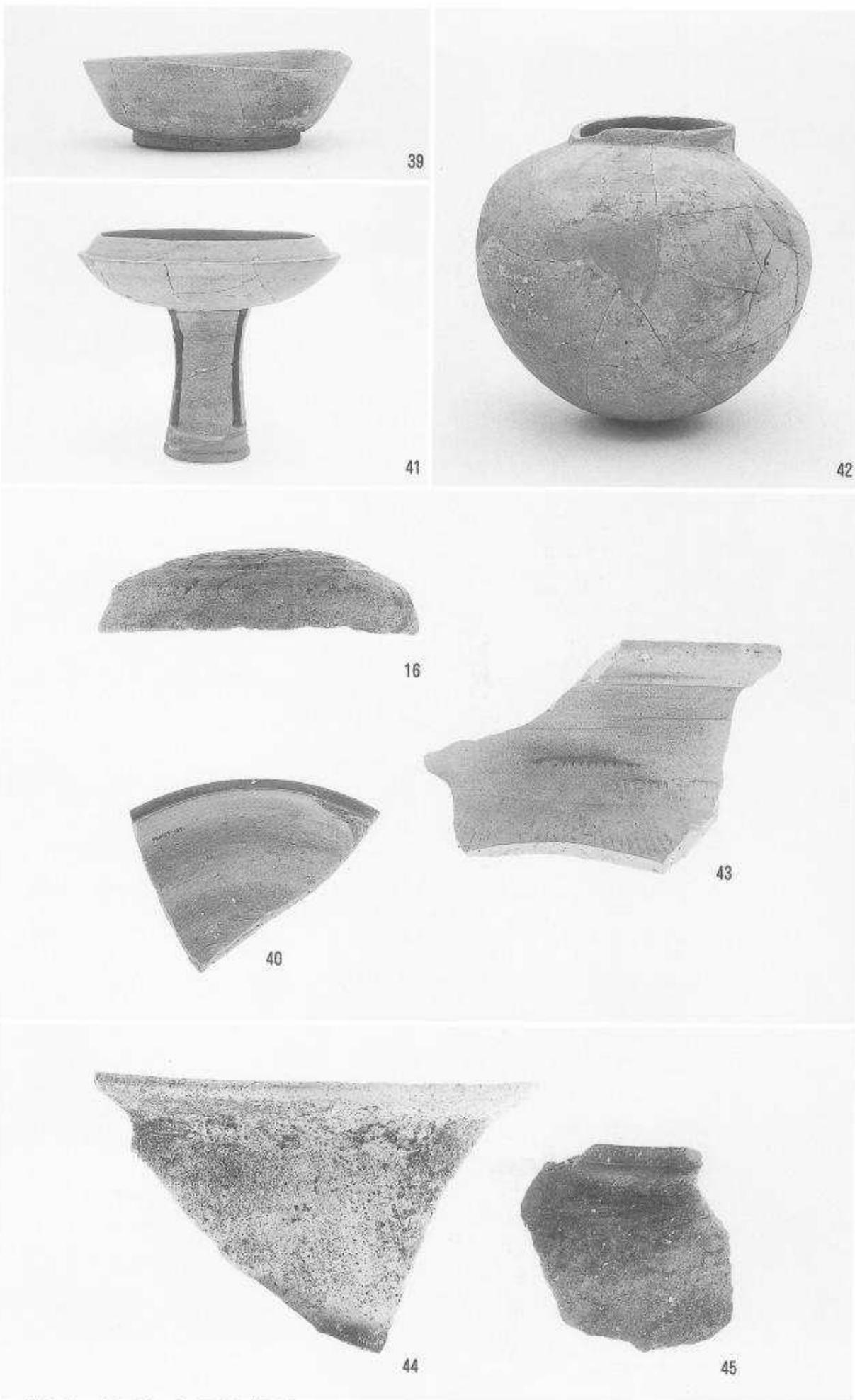
31

29



A地区包含層出土土器(2)(27~38)

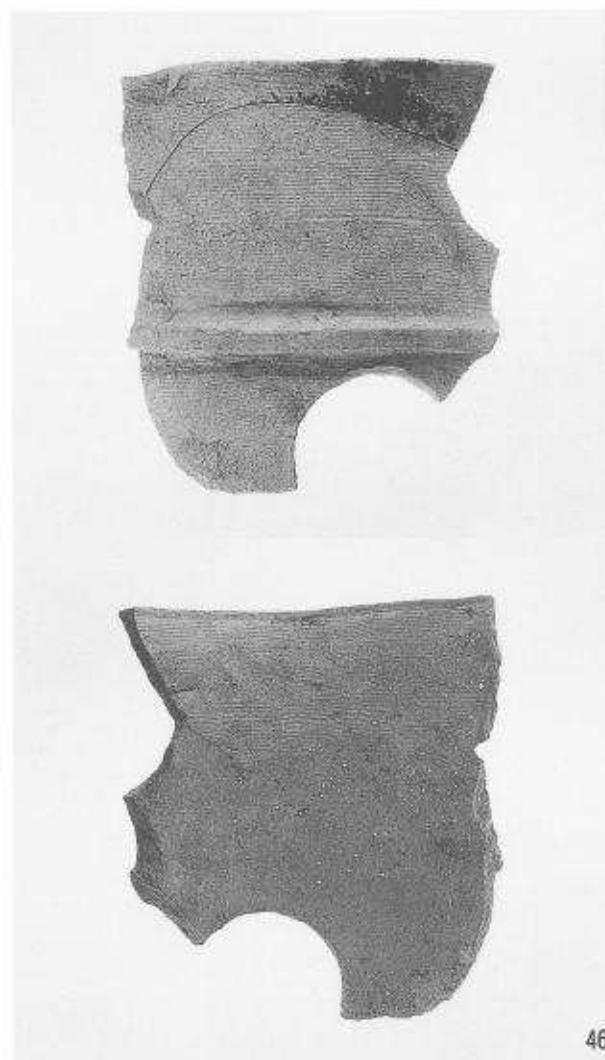
写真図版17 第2面出土遺物



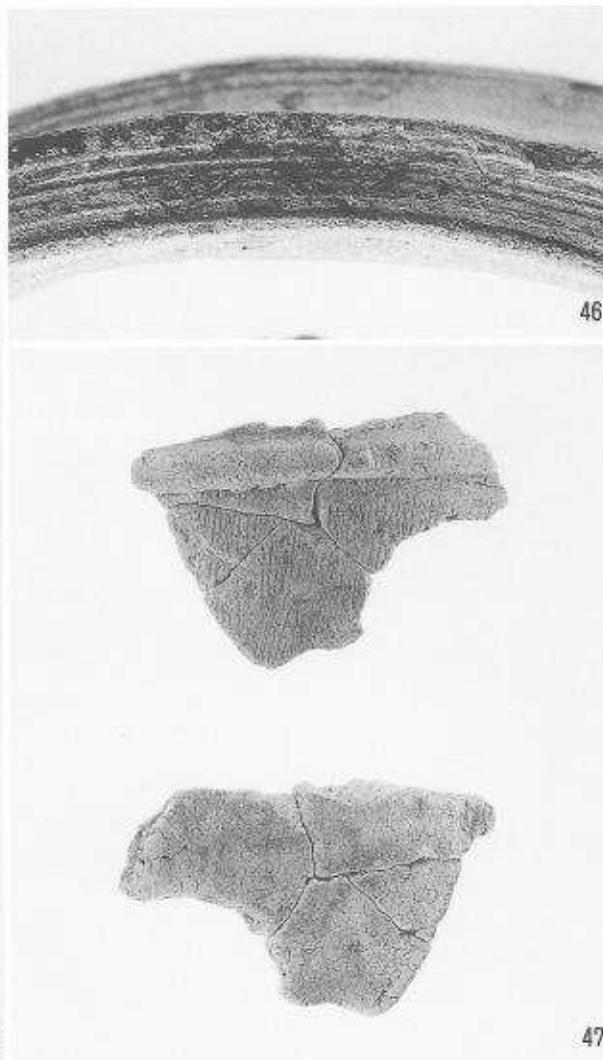
A地区包含層出土土器(3)(16)

B地区包含層出土土器(39~45)

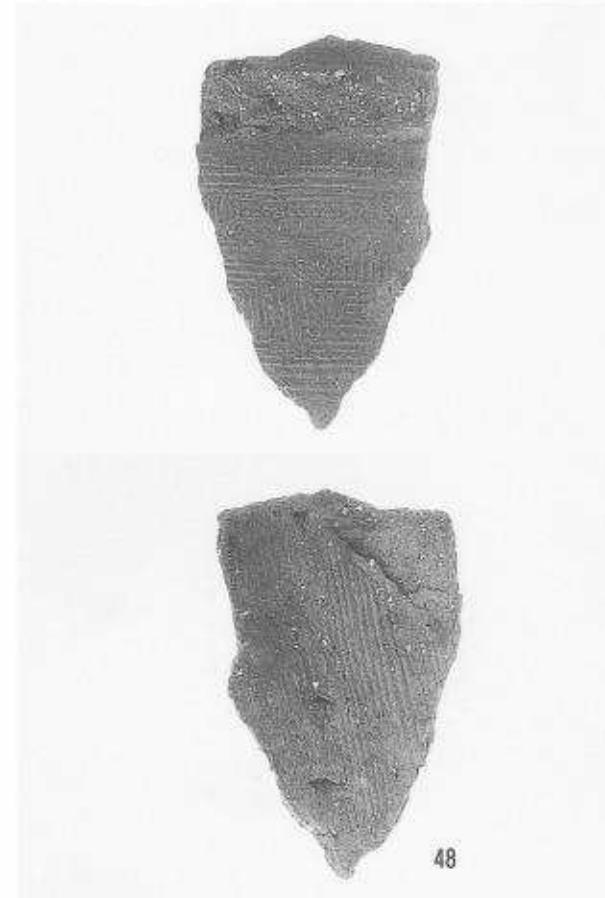
写真図版18 第2面出土遺物



46



46



48



49

B地区包含層出土埴輪(46~49)

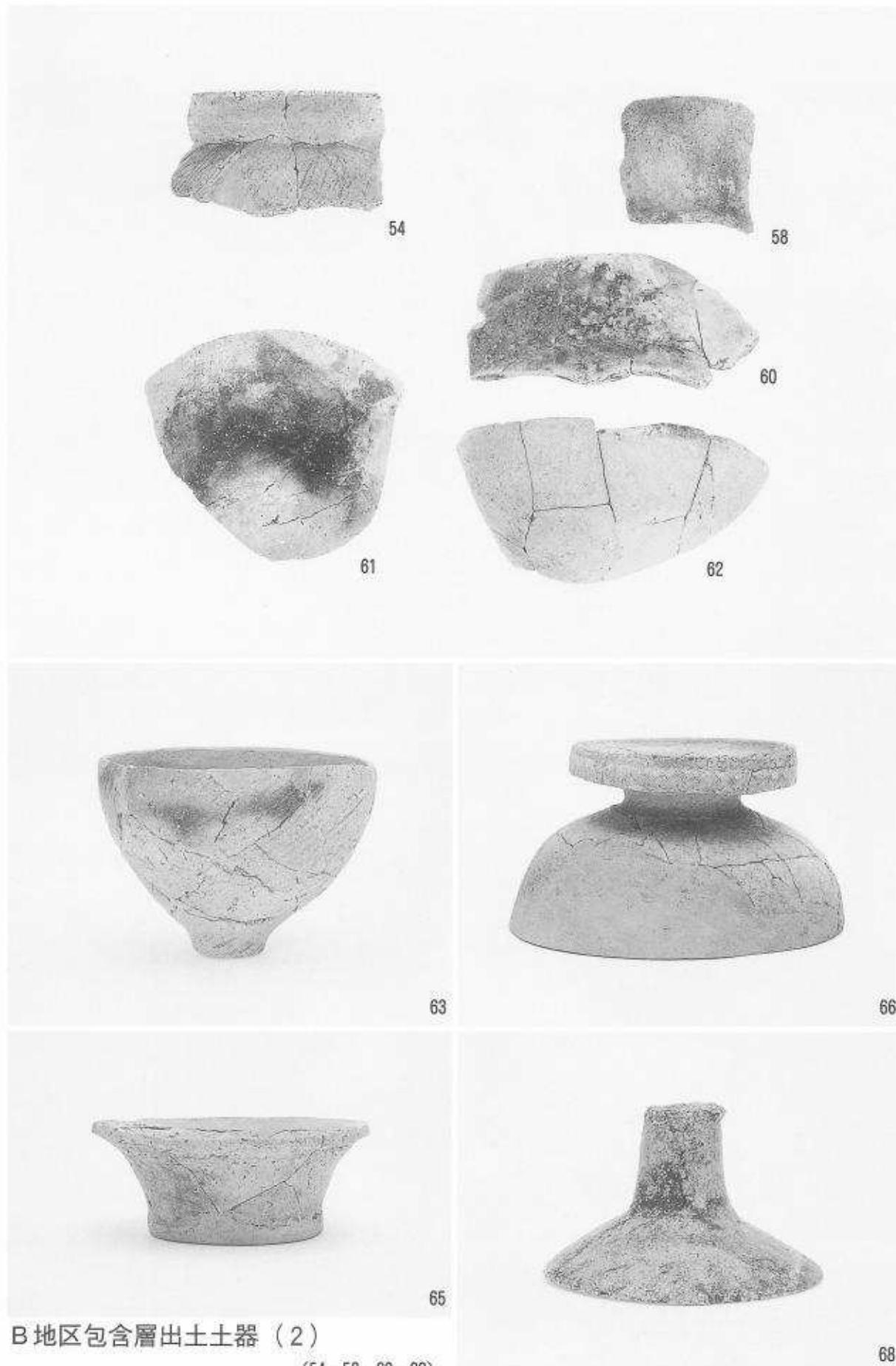
写真図版19 第3面出土遺物



A地区包含層出土土器（50~53）

B地区包含層出土土器（1）（55~57・59）

写真図版20 第3面出土遺物



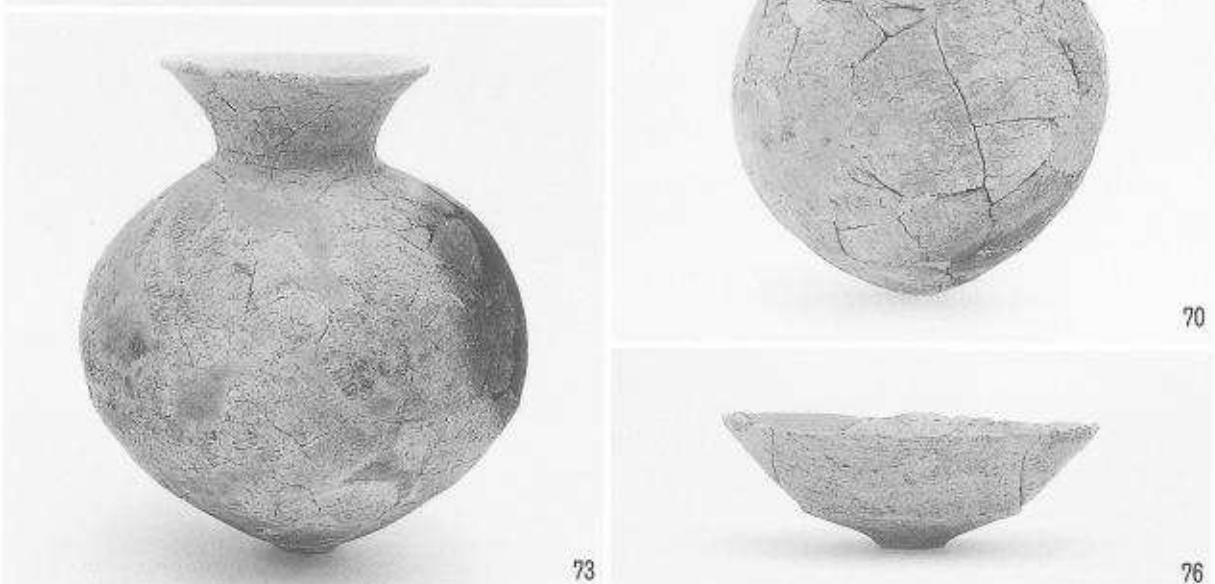
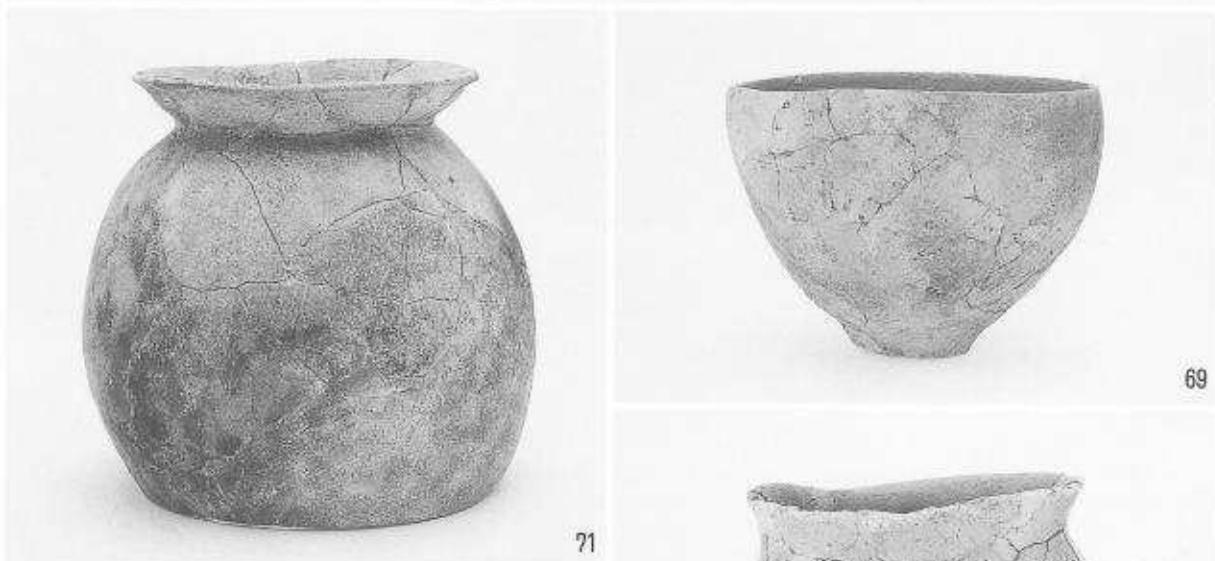
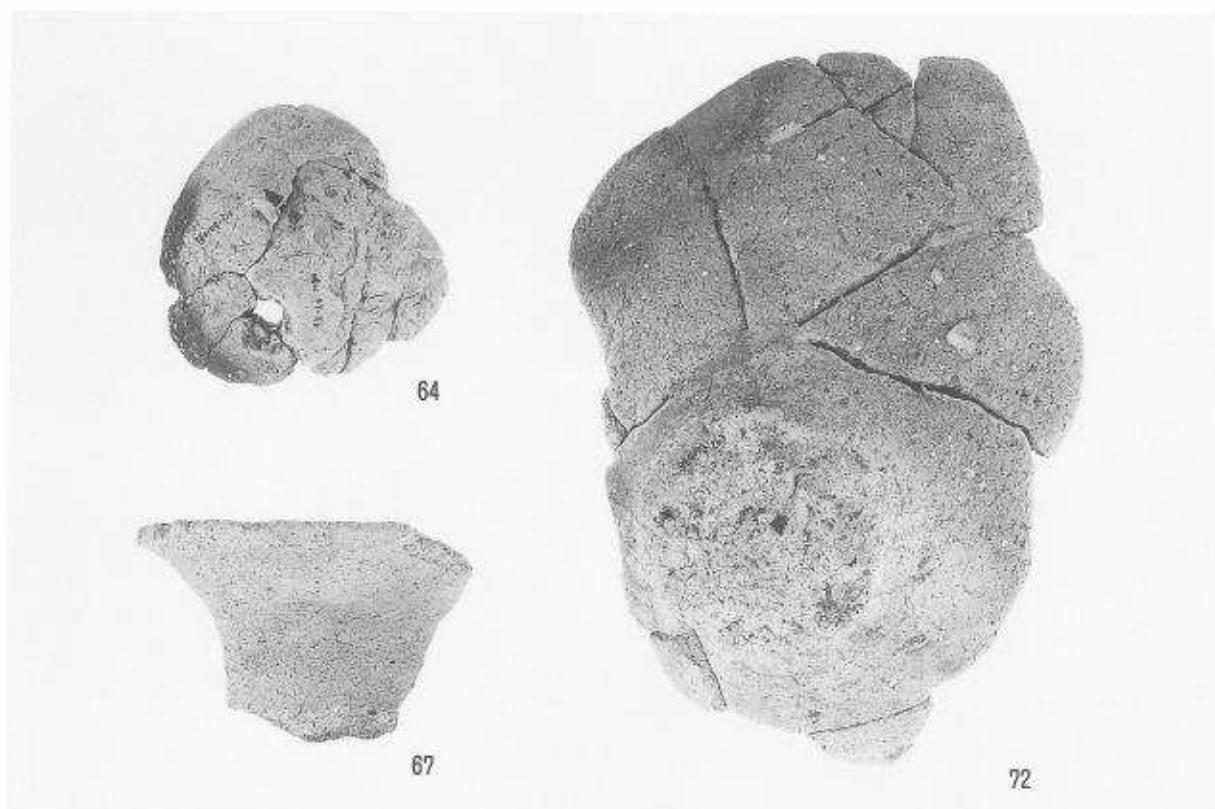
B地区包含層出土土器（2）

(54・58・60~62)

土器溜りA出土土器（1）(63・65・66・68)

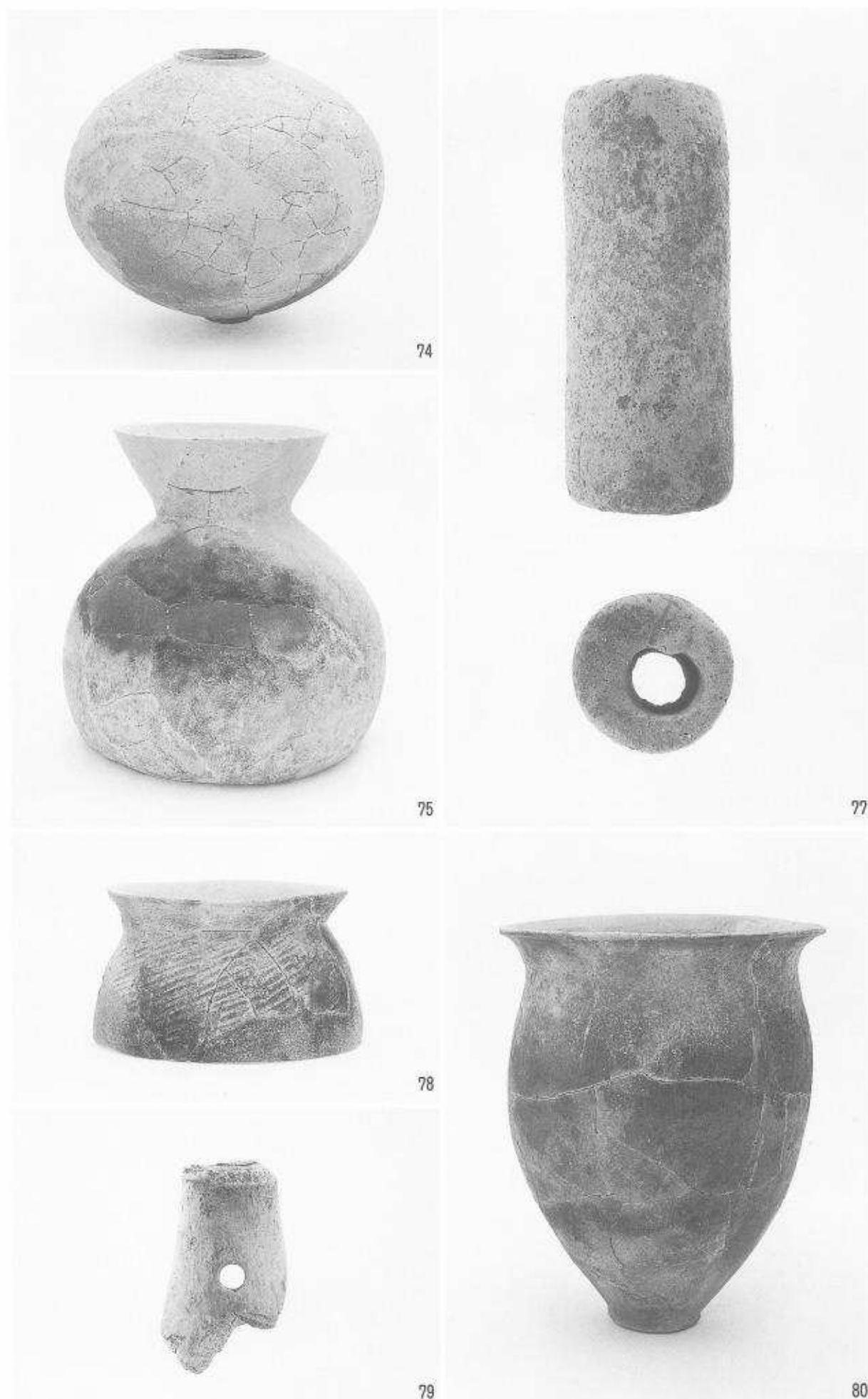
68

写真図版21 第3面出土遺物



土器溜りA出土土器（2）(64・67)・土器溜りB出土土器（1）(69～73)
土器溜りC出土土器（1）(76)

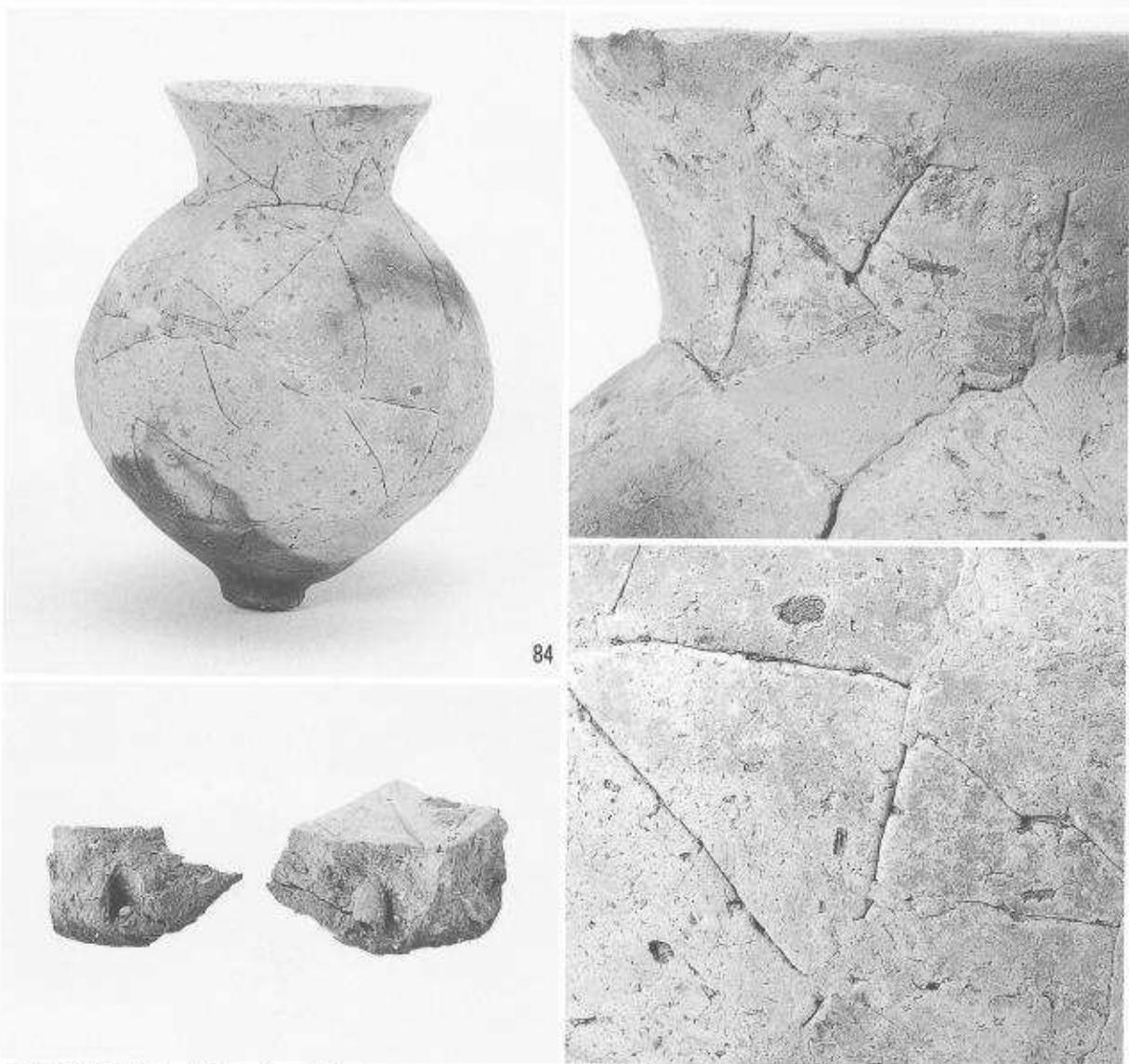
写真図版22 第3面出土遺物



土器溜りB出土土器(2) (74)・土器溜りC出土土器(2) (75・77)

S H 301出土土器(78・79)・S H 303出土土器(80)

写真図版23 第3面出土遺物

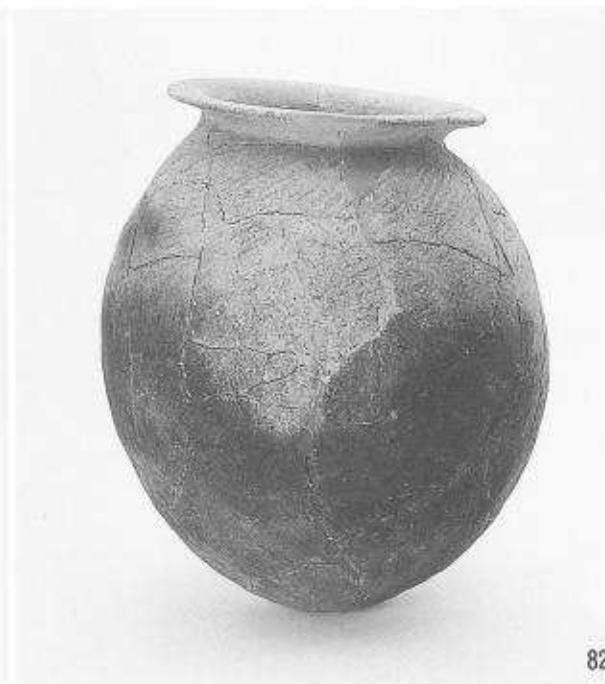


S H 309出土土器（一括）(81~84・86・87)・管玉状土製品が混入した土器(84)

写真図版24 第3面出土遺物



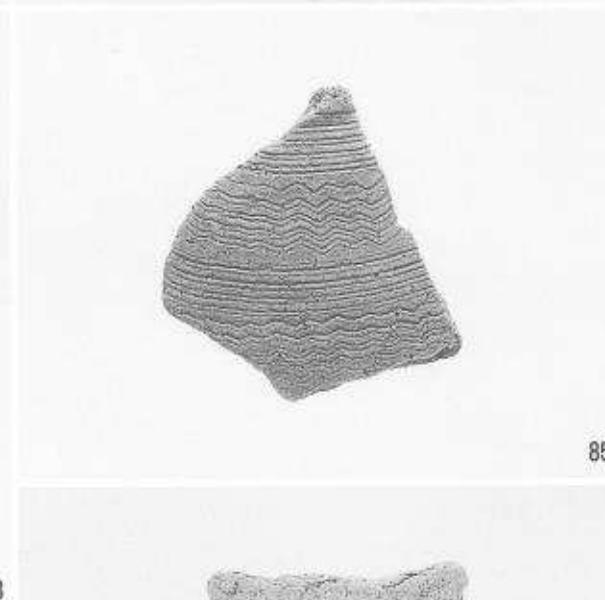
81



82



83



85



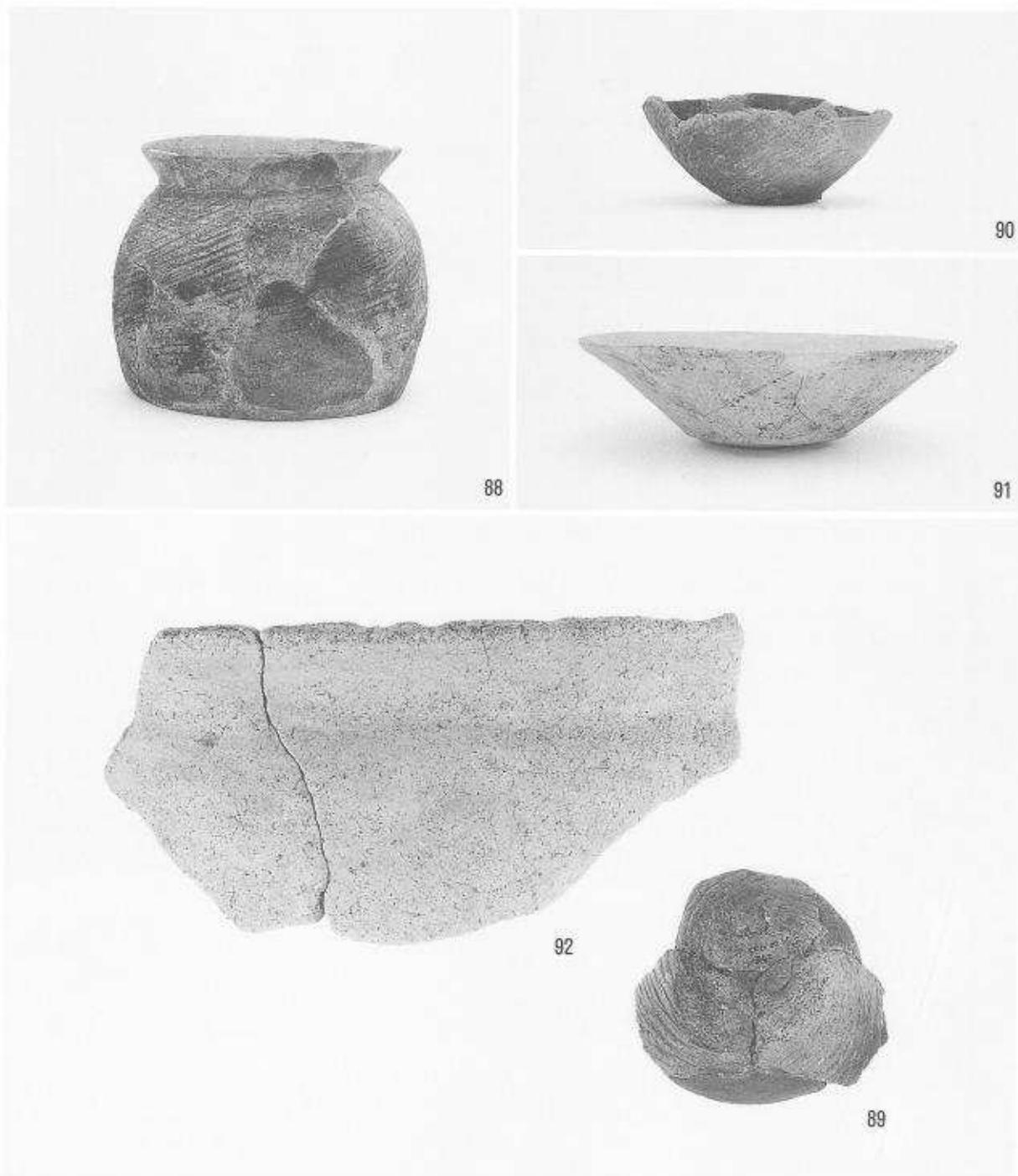
87



86

S H 309出土土器 (81~83・85~87)

写真図版25 第3面出土遺物



S K 301出土土器 (88~92)

報告書抄録

| | |
|--------|---|
| ふりがな | すみよしみやまちいせきだい33じちょうさ |
| 書名 | 住吉宮町遺跡 第33次調査 |
| 副書名 | 公社長期分譲住宅「住吉宮の前(3)住宅」建替事業に伴う発掘調査報告書 |
| 卷次 | |
| シリーズ名 | 兵庫県文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第226冊 |
| 編著者名 | 服部 寛・寒川 旭 |
| 編集機関 | 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 |
| 所在地 | 〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011 |
| 発行年月日 | 西暦2002年(平成14年)3月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|------------------------|---|-------|------------------|-------------------|--------------------|-------------------------|---------------------|------------------------------------|
| | | 市町村 | 調査番号 | | | | | |
| すみよしみやまち 住吉宮町 遺跡 | こうべしひがしなだく 神戸市東灘区 住吉宮町 6丁目88番地 | 28101 | 980109 (全面調査) | 34度 42分 51秒 | 135度 15分 43秒 | 1998.8.4~ 1998.11.18 | 1,307m ² | 公社長期分譲住宅「住吉宮の前(3)住宅」建替事業に伴う発掘調査報告書 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|------------|-----|------------------|-----------------------------|---------------|-------------------|
| 住吉宮町 遺跡 | 集落跡 | 奈良時代~ 平安時代前半 | 掘立柱建物跡2棟 土坑・溝・柱穴 | 須恵器・土師器 鉄器 | 庇付き建物 地鎮遺構 |
| | | 古墳時代後期 | 地震の痕跡 | 須恵器・土師器 埴輪 | 慶長伏見地震 |
| | | 弥生時代終末期 (庄内期) | 竪穴住居跡9棟 土坑・柱穴・溝 土器溜まり | 弥生土器 | 管玉状土製品 の混入した土器 |

兵庫県文化財調査報告 第226号

神戸市東灘区

住吉宮町遺跡 第33次調査

—公社長期分譲住宅「住吉宮の前(3)住宅」建替事業に伴う発掘調査報告書—

平成14年3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL 078(531)7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目16-12
TEL 078(341)7711

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39
TEL 0795(22)3226
